設

910.8-Ko45ウ
1200500754830

910.8
K045
(18)

文學博士 藤井乙男 著

江戸文學概說

東京 日本文學社

610-2000

江戸文學概說

目次

第一章　總　說……一
第二章　前期第一期――萬治寛文時代……一三
一、時代概觀と軍記物語……一三
二、古典の模倣擬作……一五
三、外國文學の飜譯……一八
四、動物擬人物語……二〇

昭和宮本

五、小說的地理書……二〇
六、遊廓案內……二二
七、滑稽小話集……二二
八、佛教傳道草紙……二五
九、三教一致物語……二六
十、純粹の小說……二八
第三章　前期第二期——元祿享保時代……三〇
一、元祿享保時代文學の特質概觀……三〇
二、井原西鶴……三五
三、西鶴の模倣者……六六
四、八文字屋本……七四
五、第一期の惰力的作者……八三

六、淨瑠璃……九九
七、歌舞伎……一四一
第四章　後期第一期——明和安永時代……一五二
一、明和安永時代文學概觀……一五二
二、京阪文學の形勢……一六〇
三、教訓物の變遷……一六三
四、讀本……一六七
五、黃表紙……一七八
六、洒落本……二〇四
七、淨瑠璃……二一五
八、歌舞伎作者……二二一

第五章　後期第二期――文化文政時代……二三一
一、時代の勢概觀……二三一
二、讀　本……二三四
三、京傳の讀本……二三八
四、曲亭馬琴……二四一
五、京阪の讀本……二五一
六、江戸の讀本作者……二五四
七、滑稽本……二五六
八、合卷物……二六四
九、人情本……二七七

江戸文學概說

――小說戲曲を中心とせる江戸文學の史的考察――

第一章　總說

自然人事すべてこれ旋律の世界である。律動の世界である。我が國文學の世界に於ても、これを、遠く上古の舊きより近く明治大正の新しきに至るまで、史的展開の迹としてたどつてみる時、一高一低、一起一伏、時に盛衰隆替、明暗一境の消長を見るのである。しかも、一つ去り一つ來るや、その間に自ら（おのづから）なる必然的理法の存するありて、文學的生命の絶えざる創造の連續を認め得るのである。この必然的理法と、これに照應する文學的事實の史的展開との相關々係は、我等に國文學徒としての微妙なる考察を要求すると共に、又盡きざる興味を之に伴はしめるものである。且つその相關現象の裡にひそむ時代と個人の交渉は、それみづからが一個の戲曲たるの觀がある、天才來つて時代の潮を導き、時代の大氣醞釀して天才の雲を呼ぶ。かくして律動の世界は益々展開されてゆくのである。

さて、日本文學の史的展開を辿つて來る時、明治以前に於て我等は光彩絢爛たる二つの時代を發見する。平安朝時代と江戸時代とが卽ちこれである。この兩時代は中間に鎌倉室町時代四百年の谷をへだてゝ前後に相對峙する高嶺である。平安朝時代はこゝに措く、單に江戸時代と概言はするものゝ、三百年の長い年月の間には、さきにのべた盛衰

隆替のリズムが存する。文學の隆盛を極めたるもの之を前にしては元祿時代、之を後にしては文化文政時代、これ又その間をへだてること約百年、高嶺中の兩尖峰である。元祿時代は文學の主權京阪にあつて、國學の僧契沖、漢學の伊藤仁齋、小說の井原西鶴、戲曲の近松門左衞門、いづれも西方の雄であつた。文化文政時代は文學の中心全く江戸に移つて、國學漢學の大家も多くは江戸に集り、ことに通俗文學には山東京傳、瀧澤馬琴等の驍將輩出して、全盛の華を唉かせたのである。二嶺あれば一峯あり一谷あれば一溪あり、その對比まことに妙といふべきである。

今この江戸時代文學の年代的區劃を更に詳述してみれば次の如くになる。元祿を中心とする慶長より寶曆以前までの約百五十年間と、文化文政を中心とする寶曆より明治以前までの約百年間の前期後期二期に分ち、前期を更に分けて第一期第二期の二とし、第一期を慶長より寛文まで、第二期を延寶より正德までとし、後期も更に分けて第一期第二期の二とし、第一期を寶曆より天明に至るまで、第二期を寛政より慶應に至るまでとするのである。なほ分り易く表示してみれば左の通りである。

江戸時代文學
- 前期　元祿中心時代（約一五〇年間）
  - 第一期　萬治寛文時代（慶長—寛文）
  - 第二期　元祿享保時代（延寶—寛延）
- 後期　文化文政中心時代（約一〇〇年間）
  - 第一期　明和安永時代（寶曆—天明）
  - 第二期　文化文政時代（寛政—慶應）

參考　慶長一九—元和九—寛永二〇—正保四——慶安四—承應三—明曆三——萬治三—寛文—一二——延寶八——天和三—貞享四——元祿一六—寶永七—正德五—享保二〇—元文五—寛保三——

欠

十歳で歿した人である。この人には戰國以來元和、寛永までの見聞を筆記したものが三十二册あつた、後、小田原北條五代に關係した部分を「北條五代記」と名付けて萬治二年に刊行したのである。

その他淨心には信玄と謙信との軍に關する事蹟を書いた「甲陽軍鑑」といふ書の批評を書いたものに「見聞軍抄」といふのがある。慶長十九年の刊行である。又遊女歌舞妓に關したものに「そゞろ物語」、その他に「慶長見聞集」といふのがある。この二書は德川時代初期の風俗雜事を見るのに究竟の參考書である。由來淨心といふ人は記憶力も相當に强く、文章にも長じて居つた人の樣である。

この外、軍記物に屬する類書には、大阪陣のことを記した「大阪物語」、天草亂のことを書いた「島原記」等がある。孰れも事實を骨子としたものであるが、多少の誇張と文飾とをまぬかれない。

又、軍記物ではないが、事實に基いて想像文飾を加へて小說的に傾いたものに「水鳥記」(寛文二年刊)と「武藏鐙(むさしあぶみ)」(萬治四年刊)とがある。「水鳥記」は酒戰の記である。水はシ、鳥は酉、即ち水鳥は酒である所からの名稱である。慶安の初頃に大塚の地黃坊樽次、池上の大蛇丸底深等と假名した大酒豪の輩が、己が弟子を連れて酒戰をやつた記事で體を軍記物體にしたものである。「武藏鐙」は明暦の大火に妻子家財を失ひ、一念發起して諸國行脚に出た樂齋坊が知人に邂逅して、火災の有樣を物語ることを書いたもので、淺井了意の作だと言はれてゐる。當時の物としては結構、文章ともに巧に出來てゐる。かくの如く、事實を基にして之に多少想像を加へて敷衍したものが、後世になつて實錄(じつろく)物といふ歷史小說に展開する起原となつたのである。

欠人

當時は國學者の中にも文人歌人と言はれるほどの人に乏しかつた時代であつたが、多少學問の素養があると人の中から、中古文學の「伊勢物語」「源氏物語」「古今集」等の註釋を出すものも出來て來た。ことに「徒然草」は當時流行してゐた儒學と相通ずる思想に富み、儒・道・佛の三教を折衷して日常の教訓に資する所が多く、更にその文章もあまり古風ではなくて解り易く、加之、卷數も手頃でかさばらぬといふ樣な多くの點から大いに歡迎されて、中院通勝・松永貞德・林道春・北村季吟等の註釋が續出して、「源氏物語」についで多くの註釋書を持つ書となつた。この傾向はやがて「徒然草」の體裁を摸した隨筆物を多く現出せしめるに至つた。

如儡子　可笑記　寛永十九年
井上小左衞門　悔草　正保四年・
曾我休自　爲愚痴物語（ゐぐちものがたり）　寛文二年

又古典文學を通俗化滑稽化したものには

尤草紙　寛永九年
烏丸光廣卿といはれてゐる　仁勢物語　未詳
古今若衆　（承應元年より前といふ）
犬つれ〳〵　承應二年

右の中にても「可笑記」は有名であつて近世の教訓小說の元祖だと言はれてゐる。內容は主として武士たるものの心得を說き、懦弱驕奢の弊を戒めたもので、さゝ滑稽を加へ又文中往々作者の稜々たる氣骨を思はせるところもある。

この書の大いに行はれたことは、間もなく再版され、之に倣つた、

山岡元隣　他我身の上　明暦三年

「可笑記」を批評した。

淺井了意　可笑記評判

等が出で、更に時代を下つては、

井原西鶴　新可笑記

の出たことでも推せられる。この作者の如儡子といふのは東北地方の武士（酒田城主東禪寺右馬頭の姪といふ）であつて、湯村式部といふのがその本名であるといふ。浪人となつて江戸に出たといふより以外のことは知られてゐない。なほこの人には「百八町記」（寛文四年刊）といふ作がある。これは佛教の趣意を卑近に說いたものである。この時代はすべて神儒佛三教の一致を說いたのである。

次に「悔草」「爲愚痴物語」も共に儒教による修身齊家の教を說いたものである。前者は儒教趣味が勝ち、後者に佛教趣味に富んでゐる。作者井上小左衞門は「筠庭雜錄」に「大阪記に井上小左衞門四十四歲、元和元年道明寺へ鐵砲百預り、又兵衞加勢に出て討死すとあり。此說いかに有べき。又或說には、大阪籠城の諸人の內井上小左衞門定利、嫡男次兵衞、父子共二條御城にて召出さる。今の新五郎が先祖なり。二男瀨兵衞は加賀家に仕へしが後に黑田に仕ふといへり。これに據れば、この草子は小左衞門老後に書ける事證すべし云々」とある。又、曾我自休はその書中に朝鮮に渡航したことがある由を記してゐる外何等の徵すべきものがない。

「尤草紙」は清少納言の「枕草紙」の眞似である。尤と木篇の枕とを通はせたのである。

「仁勢物語」は勿論「伊勢物語」のまねである。

「古今若衆」は「古今集」の序文に似せたものである。

「犬つれ〳〵」は男色のことなどを書いたものである。（この項拙著「江戸文學研究」（二七頁―三〇頁）中「假名草紙の作者」參照）

三、外國文學の飜譯

古文學の摸倣擬作と共に外國文學の飜譯が行はれた。まづ支那文學の飜譯としては次の如きものを擧げることが出來る。

無名氏	棠陰比事（たういんひじ）	慶安四年
松雲了意	伽婢子（おとぎぼうこ）	寛文六年

「棠陰比事」は支那の「裳陰比事」の意譯である、裁判の話を集めたものである。この書は元祿時代に至つて西鶴の「櫻陰比事」や、月尋堂の「日本桃陰比事」（寶永六年刊、後に「藤陰比事」と改題）の如き裁判小說の魁をなすものである。この裁判小說の系統は後まで長〳〵緒をひいたものである。又わき道に外れて盜賊の話を集めたものなどもある。これみなこの「棠陰比事」より起つたものである。

「伽婢子」は支那の「剪燈新話」「剪燈夜話」の抄譯である。全く日本風に消化され文章も暢達であるため、大に行はれて怪談や短篇小說の祖となり、その影響は元祿時代に入つてこれに倣つた青木鷺水の「御伽百物語（ひやくものがたり）」、都の錦の

「御前お伽婢子」等十數種の摸倣作を出さしむるに至つた。下つて天明頃に至つては上田秋成の「雨月物語」、都賀庭鐘の「古今奇談英草紙」（寛延二年）もこの系統を傳承するものである。有名なる「牡丹燈籠」はこの「伽婢子」の中にあるのである。新しいところでは明治に至り圓朝の講談にもなり、藤森成吉氏も雜誌「改造」の昭和三年一月號に「相戀記」と題する五幕八場の戲曲としてこの「牡丹燈籠」を扱つてゐるのは興味がある。但し「剪燈新話」の紹介は既に「伽婢子」以前にある。天正年間の作と認定される「奇異雜談集」（近江六角氏の臣中村豊後守の息の著）中に見え該「剪燈新話」中の「金鳳釵記」「牡丹燈記」「申陽洞記」が飜譯されてゐる。

なほ了意には支那の故事傳說を集めた「新語園」（天和二年）の著がある。（この項拙著「江戸文學研究」（九一頁―一〇八頁）中「七、支那小說の飜譯」の章參照）

次に西洋文學の飜譯には「伊曾保物語」といふのがある。これははやく文祿二年天草の耶蘇教會で、羅馬字を以て口語體に飜譯されてをる。又この本と關係なく別に元和寛永頃の出版の活字本がある。その後萬治二年繪入の三卷本が刊行された。上中下三卷に別れ、上卷二十章、中卷四十章、下卷三十四章、總計九十四章でその中二十九章だけはイソップの傳記逸話、種々の場合に頓智才覺を顯した事を記し、その餘の六十五章は人のよく知る動物比喩談である。この書は教訓の寓意談として喜ばれたと思はれるが、他に及ぼした影響は前の「伽婢子」ほど著しくはない。けれども多少それのあつたと思はれる事は推するに難くない。山岡元隣の「小尼（こあまぢ）」の中には動物の譬喩談が多い、これもとより和漢の傳說を材料にしたものではあるけれども、一方ではこの「伊曾保物語」を學んだもの〻樣である。山岡元隣はもとは伊勢山田の人で、京都で北村季吟に就いて俳諧を學んだ人である。而慍齋と號し寛文十二年歿。又前述の「爲

愚痴物語」の中にも鼠が猫の迫害を免れるために、その首に鈴をつけようと相談したといふ話が見えて居る。又、「戯言養氣集」(元和活字版と云)にも、肉をくはへて木の上に止つてゐる烏を、狐が見て木の下に來り、烏の容貌風采を褒めたてゝ、定めて御聲もいゝであらう、願はくは一聲きかせ給へと煽てゝ、烏の口をあけて鳴く拍子に落した肉片をうまゝ〳〵と食つたといふ話が見えてをる。又了意の作である「浮世物語」(寛文十年)にはその主人公なる浮世坊なるものが、諸大名の悪行を滑稽に托して諷諫する所がある。又「一休噺」(寛文八年)の中には頓智で人を説服する小話が多い。以上はいづれも「伊曾保物語」の傳記逸話方面の影響を受けたものゝやうにも考へられる。

四、動物擬人物語

「伊曾保物語」の影響をうけたものではないが、此時代に動物擬人物語がある。

雞鼠物語　寛永十三年成

猫の草紙　慶長七年成

あだ物語　寛永十七年刊

等がこれである。これは室町時代の「お伽草紙」の「烏鷺合戰物語」や「魚鳥平家」「玉虫の草紙」「梟の草紙」等の系統を引いたものである。「雞鼠物語」は雞と鼠との合戰を書いたもの、「猫の草紙」は猫の解放令が慶長七年に出で、解放された猫のために洛中の鼠が江州へ逃げたといふ話、「あだ物語」は鳥類の戀愛談であつて、「梟の草紙」を學びこれに儒佛の教を附加したものである。

五、小説的地理書

地理紀行の類で有名なものは

徳永種久　色音論(一名東めぐり)寛永二十年作

中川喜雲　京童　萬治元年刊

淺井了意　江戸名所記　寛文二年刊

等がある。「色音論」は奥州より上つて江戸見物をした話である、自分の觀察せる江戸の風俗をのべることが主で、地理は從である。題名は寛永頃に椿の花を作ることが流行した。これは和蘭人が貴重がつたためである。又鶉を飼養してその鳴く音を愛した。この椿の色と鶉の音とをとつて名としたのである。しかしこの種類中最も傑出してゐるものは

淺井了意　東海道名所記　萬治元年作といはる

である。これは樂阿彌といふ男が江戸から京部へ旅行して、名所舊蹟をたづね、或はその由來を聞き或はその景色を語る趣向である。中には卽興の發句狂歌を挿み、文章も輕妙で當時の人情世態をよく現はしてゐる。この書は寛永十二三年頃の作と認められる「竹齋物語」(烏丸光廣作といふ)より暗示を得て書いたものと思はれる。「竹齋物語」といふのは當時山城に竹齋といふ藪醫者があつた。病家もなく貧しかつたために、下男のにらみのけを連れて二人で諸國を見物し、最初に京都に來て、神社佛閣に參詣し、やがて江戸に下る道中で主從二人が狂歌をよみ、種々の滑稽、失敗を演ずることを書いたものである。この「竹齋物語」も大いに流行して貞享・元祿の頃「新竹齋」「竹齋行脚袋」「竹齋療治之評判」「竹齋咄醫者評判」など之に因んだ作が多く、芭蕉も「木枯の身は竹齋に似たるかな」と叫じた程であつ

た。要するに了意の「東海道名所記」はこの「竹齋物語」の系統をうけて後代の十返舍一九の「膝栗毛」を導き出すものとなつてゐる。而してこの主人公樂阿彌といふ男は仙骨と凡俗との間を縫つて、飄逸洒落な態度を以つて人生をあつさりと通らうとするのである。竹齋も、「浮世物語」の主人公浮世坊も共に同じ傾向と色彩とを持つた人間で、それが元祿時代になつて好色味を加へた西鶴の「一代男」の世の介を生み出すに至るのである。

六、遊廓案内

江戸時代の文學は遊女や歌舞妓に關係せること多く、且つ是等は後に西鶴の好色本を呼び起せる原因となるものである。その主なるものは次の通りである。

三浦淨心	そゞろ物語	吉原のことをかいたもの。
吉原を始めた庄司某の筆	洞房語園	同
德永種久	吾嬬物語	同
	桃源集（承應四年刊）	京都の島原のことをかいたもの。

なほ寛文に至つて「吉原雀」「吉原讃嘲記」等あり。遊廓の案内や遊女の評判記は後に發達して小說體となり、西鶴及び八文字屋本の好色本に展開して行くのである。ことに西鶴の「一代男」は諸國の遊廓案内とも言ふべきものである。八文字屋本の「役者評判記」は遊女評判記から來たものである。

七、滑稽小話集

滑稽なる話を集めたものが此頃世に出た。落語や輕口系統の笑話である。これに有名なるものは

安樂庵策傳　醒睡笑　元和九年成

である。安樂庵策傳といふのは京都の誓願寺にある竹林院の住職であつて、茶人としても有名な人である。本姓は平林、通稱を平太夫といつた。醒翁と號し、茶道は金森宗和に就いて學び、常に諸侯伯の邸に出入し、豐太閤にも愛せられた。頓智の才に富み、笑話に巧であつた。寛永十九年、八十九で歿した。「醒睡笑」は策傳が板倉侯のために口演した小咄を輯錄したのだといふ。後世の小咄、落し咄のもとになつたものが多い。

作者未詳　昨日は今日の物語

二冊で。寛永活字の本がある。尾籠な話も少くない。

中川喜雲	私加多咄（しかたばなし）	五冊　寛文元年刊
	一休ばなし	四冊　寛文八年
瓢水子松雲	狂歌咄	三冊　同十二年
	一休關東咄	三冊　同
	輕口曲手鞠	四冊　延寶より天和へ
	囃物語	三冊　同
	輕口大わらひ	五冊　同
	當世手打笑	五冊　同
	新撰咄揃	五冊　同

延寶天和の頃京都に露の五郎兵衛なるものがあつて落語に巧であつた。而して祇園、四條阿原、北野などに小屋がけをして辻噺を興行してゐた。後に髪を落して露休と號した。元祿十六年六十一歳で歿したのであるが、この作に

御存知の輕口露がはなし	元祿四年	
露新轉口ばなし	元祿十一年	
露五郎兵衛新ばなし	元祿十四年	
露休ばなし	元祿年間	
露休置土産	寶永二年	

等がある。又大阪には米澤彦八といふのがあつて、「輕口御前男」(元祿十六年)といふのを書いてをる。更に江戸には鹿野武左衛門といふのがあつて、座敷仕方咄で有名であつた。彼は江戸の長谷川町に住し、本職は塗師業であつたが、その著には次のものがある。

鹿野武左衛門口傳話	三冊	貞享二年
鹿の卷筆	五冊	同三年
はなしの問屋	一冊	元祿年間

その後明和安永の頃に至り輕妙なる小咄本が續出した。而して徳川の末年までいろ〳〵これに屬する類本が絶えなかつた。初期のものほど獨創的であり質朴であつて面白い。(この項「近代日本文學大系」二十二卷「落語滑稽本集」卷頭に載せられたる笹川種郎博士の解題參照。)

八、佛教傳道草紙

佛教傳道の目的で書かれた假名草紙(儒佛の教に基いた隨筆樣の教訓的雜話を假名書にしたものをいふ。)中最も小說めいてゐるのは「二人比丘尼」(寛文三年)である。これは切支丹退治・佛教宣傳に熱心な三河の武士、石平道人鈴木正三の作である。これは多分足利時代の作である「三人法師」や「七人比丘尼」等に基いて作つたものと思はれる。(「三人法師」といふのは三人の僧が高野山で集つてそれ〴〵の來歷を物語る話であり、「七人比丘尼」といふのは、信濃國關川宿の草庵に、秋の夜をたま〳〵宿り合せた七人の尼僧が、こも〳〵出家の動機を語る懺悔話である。)而してこの「二人比丘尼」といふのは、下野の住人須田彌兵衛といふものが二十五歳の時討死し、後に殘つた年若い妻が哀別の悲哀にたへず、一周忌の後に家をぬけ出で、夫の討死したあとを弔ひに行き、辻堂の夜の夢に多くの骸骨共が現れ手拍子面白く無常の歌を歌ひながら踊つてゐるのを見て、人生の無常果敢なさに菩提心を起し、感涙止め難き折柄、一人の美しき女が來て身上話をする、遂にその女と共に庵室に籠り、修行の功を積みて大往生を遂げるといふ事をかいた物語である。現世一切の夢幻を超越して、勇猛精進の信念の下に、捨身念佛の修行を積むべきを物語にて說いたのである。この作者鈴木正三といふ人は三河武士であつたが、大阪の陣後出家して禪に參じた程の烈しい氣象の人であつて、島原の亂後其地に渡つて、耶蘇教の撲滅に大に力をつくした人である。明暦元年七十七歳にて歿。この外にも佛教趣味のものを書いてゐる。その「因果物語」(寛文元年)は因果應報の理を見聞した實例を擧げて說いたものである。(鈴木正三の傳記に就いては石田元季氏の精細なる評傳を拙著「江戸文學研究」(三一頁―六九頁)「鈴木正三」の項

に載せて置いたから參照されたい。）

九、三教一致物語

三教といふのは道教・儒教・佛教を指すのであるが、徳川時代はこの三者のうち儒教が最も勢力を持つてゐた時代である。（道教は俗間に同情を得ること乏しかつたため、之に代ふるに神道を以てする場合が多い。）しかし、佛教の勢力は俗間に於て中々侮るべからざるものがあつたのである。從つて儒教と佛教とはその教義の説明に於て學者仲間にては互に相衝突することを免れなかつたのである。けれども、一般の國民の間ではむしろ融合調和してゐたのである。これ我が國民が古來より一般に通有してゐる妥協癖に基くもので、いはゞよい加減の所で折れ合つて置くことを欲する性癖のおかげである。かくて儒佛二教の間にも特に著しい紛爭や葛藤を見ることなくして、三教一致を説くものが續出して來たのである。

三教一致の理を説いて、一般社會に教訓を與へることを目的とした書の中で有名であつたのは「清水物語」であつた。寛永十五年十月の出版で、廣く世に行はれ、二三千部も賣れたと言はれてゐる。一人の順禮が京都東山の清水觀音に參詣して、一老翁に會し互に談を交した問答に擬し、道教・儒教を揚げて佛教を貶したものである。

近き頃僧法師など師匠として國に益なく人の恨の種まきしはなきに劣りなるべし。

等といふ詞を以てもその一斑を窺ふことが出來よう。この書のかき方は、大體に「大鏡」の序文の體裁を學んだものである。作者は貞享の書籍目錄によれば、朝山意林庵といふ人になつてゐる。この人は幼にして父母を失ひ、僧になつて素心といひ、還俗の後、儒となり、承應二年後光明天皇に易經や神道の講義などをした人で、京都の祇園の附近

に住んでゐて、寛文四年七十六歳で歿したといふことである。「清水物語」は三教一致物語とはいへ、實は佛のわる口をいつてゐるので、作者の儒者流であることを知るのである。

「清水物語」に次いで出たものに「祇園物語」といふのがある。清水執行の作と言はれてゐる。此書は或人が「清水物語」の大意を語るのを、僧がきいて陽に之を敷演するが如くで、しかも陰に之を駁した體になつてをる。これを以て見れば明かに「清水物語」に對して反駁を加へたものと考へられる。祇園の名の清水に對するを見てもその意が推測されるやうである。文章は「清水物語」のやうに平易でなくて、儒書・佛典の引證多くて堅苦しい。刊行の年月は詳かでないが、「清水物語」出でて後一二年間の作と思はれる。

次いで刊行されたのは「大佛物語」である。京都の大佛へ參詣した行脚の僧と、儒佛神の三德に合つたと思はれる一貫といふ人との問答にかこつけて、儒教・佛道・風俗世教等に就いて説いたものである。佛教諸宗に對する態度は公平であるが、特に禪を力説してゐる點より推すれば、恐らく作者は禪家の人であらうかと思はれる。寛永十九年の刊行である。

なほ同類の書に「糺物語」「海上物語」がある。前者は承應元年の刊行にかゝるもので、その内容は、或人都一見のために田舍から上京して來て、加茂神社に參詣した所が、方々に幕打ち廻し舞ひつ歌ひつ中々の騒ぎであつたので、心浮かるゝまゝにとある幕の内を覗き見したところ、美しい上臈が數多集つて、年の頃十七八ばかりなるが三味線をとり直して、迦陵頻迦にも劣らじと思はれる聲でうたひをさめたので、そばにゐた上臈がその小歌「未生以前がいや又ましよ、何の因果に娑婆にでて、娑婆にでて」の心に感動してしきりに後世の心を起すのを、今一人の上臈がさ

まん〳〵に說得する體に書いたものである。一問一答、理氣の說も述べてはゐるが、なほ佛敎ことに法華經をもあげ說いてゐる。「書籍目錄」には日心作とあつて、その何人であるかを詳かにすることは出來ないが、日蓮宗の僧侶であるの點は疑を容れない。後者の「海上物語」は寛文六年の板で、これには古拙なる挿畫が入つてゐる。惠中の作であるといふ。惠中は鈴木正三の門人であつて彼の「驢鞍橋」の筆記者である。この物語は明曆二年八月、薩摩の國へ赴かんとして、長崎から便船に乘つたところが、船中に六十ばかりの坂本方の老僧があつて、乘合の士農工商の人々を相手にして卑近の喩譬を以て道を說き舟が薩摩潟に著くまでに、同船の人々を悉く敎化しおほせた話をかいたものである。この物語は前にあげた數種の物語の中で最も小說的の趣味に富んだもので、且つ當時の面白い瑣談逸話に乏しくない。

以上あげた數種の三敎一致物語は、その色彩は著者の立場の異るに從つて各々ちがつてゐて、三敎の好惡に就いても自ら厚薄親疎の別がある、しかし、これを純粹の小說として見れば、其資格を缺けることはいづれもみな共通であつて、一本は他の一本の犒にならへば容易く成し得る類のものたるを免れないのである。（「江戸文學研究」（一四頁―二七頁）中「江戸初期の三敎一致物語」の項參照）

十、純粹の小說

この時代に於ける作物の中で純粹の小說といふべきものは、「恨之介草紙」と「薄雪物語」との二である。「恨之介草紙」は「薄雪物語」と共に平凡なる戀愛小說である。「恨之介草紙」は慶長末年の作であつて、德川時代初期の小說としては注目すべきものである。葛の恨之介なる者が淸水觀音に參詣して、ふと妙齡の一美人を見そめ、戀々の情に堪へず、觀音に參籠して切なる思ひを祈願に籠め、夢の御告によつて、その美人は近衛殿の姫君雪の前なることを知り、姫の親しき友である菖蒲の前を賴んで切なる思ひのたけを言ひ送り、漸くに一度の會ふ瀨を得たのであるが、その後はまゝならぬ人目の關に妨げられて再逢ふ由もなく、思ひあまつて重き病の床に打ち臥したるに、夢の浮世之介、松の緣之介、君を思之介、中空の戀之介、などいふ友人が見舞に來て、さま〳〵に言ひ慰めるがその甲斐もなく、雪の前にあてた最後の文を友人に託して、恨之介は死んでしまふ。雪の前はその手紙を見て悲歎のあまり自殺し、仲介をして菖蒲の前を初め、乳母侍女までが悉く姫のために殉死する。恨之介と雪の前との遺骨は共に黑谷に葬るといふ筋である。自殺と殉死とは戰國時代の餘風を存してをるのであるが、文章だけは人名を見ただけでも想像されるやうに、古めかしい美辭麗句の羅列であつて全く退屈させられるばかりか、印象も極めて不明瞭である。この書は種々の版があつて相當に行はれたもゝやうであるが、これを摸倣した「薄雪物語」が流行したゝめに遂に忘れられるに至つた。

「薄雪物語」は寛永九年の出版であつて、園部左衞門といふ男が、例の如く淸水の觀音で一條殿の御內の某の娘薄雪を見そめ、しげ〳〵と艶書を通はして遂に望を達したが、その翌年左衞門は近江志賀の里に知人の病氣見舞に赴いて暫く滯在し、京へ歸れば思ひがけない戀人の病死に、失望落膽して自殺しようとするのを、人々に止められて果さず、僧となつて大原の奧に行ひすますといふのが一篇の筋である。「恨之介」とは男女の位置を反對にし、自殺を出家隱遁に變へたまでであるが、大部分を男女往復の艶書でみたしたのが結構上の新案といへばいひ得る位の物である。ところが讀物の少なかつた時代の小說といふのと、書簡體の小說に對する好奇心とから隨分歡迎されたらしく、種々の異版もあり、後にはこの風をまねた一種の小說が元祿頃まで續々出されるに至つた。「新薄雪物語」「錦木」「新錦木」「薄

紅葉』『雲の梯』などがそれである。けれどもかうした足利時代の御伽草紙風の小說は餘り陳腐であるために、元祿時代では復興することなく却つて可笑記の樣な敎訓的の隨筆に、前後一貫した主人公を設けた作物が、元祿文學の根本をなしたのである。こゝにもその必然の展開相を見るのである。

要するに寛文頃までは元祿時代の準備期で、啓蒙敎訓的な雜駁な物ばかりで、純粹な創作と見るべきものは未だその姿を現はしてはをらないのである。

第三章　前期第二期——元祿享保時代

一、元祿享保時代文學の特質概觀

前期の中心である元祿時代は、元和偃武より六十年、世は漸くに太平に慣れ、物質的にも精神的にも頗る文化の發達を來し上には學問ずきの將軍大名あり、下には文學技藝を以て身を立て名を成さうとする者が種々の方面に崛起したばかりでなく、一般世人の知識や趣味も非常に發達し、元祿文化の花は燦然として咲き誇つたのである。

元祿は一言にしていへば所謂文藝復興の時代であつて、又新文學の發生した時代である。新しく勃興した事象が清新の風を帶びてゐることは勿論、再興したものも生氣潑剌としてゐたのである。元祿文藝の重んずべき點は實にこゝにあるのである。東圃藤岡作太郎博士は、その遺稿卷四「近代小說史」中に於て、元祿文藝の面目一新の要點を、「古文古語の障壁を脫して直接に社會に觸れたるに在り。即ち人間そのものに深き趣味を感得して之を研究せるに在り。」としてをられる。而して氏の說に從へばかくの如き風潮の生じた理由は次の三點にあるのである。

(一)、太平が久しくつゞいて戰國以來の慘憺たる負擔も取り除かれ、身神共に餘裕を生じたのである。活動の伴はない餘裕は徒らに人心を沈滯せしめるにすぎないのであるが、幸にしてこの時代の國民には戰國以來の活力がなほ存在し、政治上では階級の制度が確立して、形の上に四民の行動を束縛することがないでもなかつたが、その精神はかゝることで束縛されるべきではない。益々道を求めて事物の研究觀察に自由の態度を加へて來たのである。

(二)、德川氏の學問はもと制度を定める必要から起つたものであつて、その他の著述も亦敎訓の意義を有し、即ち讀む所學ぶ所は空文空理でなく、直ちに社會に接して之を究めようとし、我等人間の性情を以て研鑽の對象とせんとするに至つたのである。

(三)、前代から江戸時代にかけて行はれた禪宗の宗義も、文字書物の外形に囚はれることなく、直ちに自己の心を研究して本來の面目に到達せんとし、自然萬象の面目を赤裸々に發揚せんとしたのである。この態度は極端に事物の眞相を知らんとする風向を養つたのである。

かくの如くにして、古文學の傳習を脫し、中古の假面をかなぐり捨て、自由の思想を以て直接に社會に觸れて人生の研究に趣味を感ずるやうに至つたのであることは、まことに東圃博士の言の如くである。

これを人材の輩出に見るに、國學の下河邊長流・戸田茂睡・僧契沖、儒學の伊藤仁齋父子・荻生徂徠・俳諧の西山宗因・松尾芭蕉・戲曲の近松門左衞門、浮世草子の井原西鶴、繪畫の菱川師宣・尾形光琳、蒔繪の山本春正・小川破笠、歌舞伎の坂田藤十郎・市川團十郎、淨瑠璃の江戸半太夫・竹本義太夫、何れも從來の因習的習慣を打破して、新

進の勇氣を以て一旗幟を立てたものである。

當時一般に行はれた所謂階級制度は、市民をして各々その分に安んじ、各自その埒外に出ることを許さしめなかつたばかりでなく、政治上の批評又は新しき說を稱へることは嚴禁せられ、何事も先蹤に從ひ舊慣に據り、人心を萎靡沈滯せしめ、ひいて個人的發達を妨げ、すべてのものを一定の型に入らしめたのであつた。しかし、元祿時代に於ては幕府の制度が未だ享保以後の如くに窮屈ではなく、人民の氣分も漸く泰平に慣れて、慶長元和頃の殺伐なる氣風を失ひはしたけれども、いまだ活潑奔放なる意氣を消しつくさないで、一脈豪放豁達の氣分を存し、煩瑣な規矩繩墨に拘泥して云ひたいことも抑へ、したいこともせぬといふやうな萎縮した風は無く、大膽に思ひ切つて男らしく華やかに仕事をするといふ有樣であつた。之を惡い方からいふならば、粗豪であつて覇氣衒氣に富み、戰國以後衰頽せる文藝は慶長以後芽をふいたとはいふものゝ、何れの方面にもいまだ一代の師表となつて一世の風潮を左右する程の有力なる先輩もなく、從つて專ら之に追隨遵奉すべき金科玉條もなく、元祿時代に雲の如く輩出した諸方面の俊才は、恰も七むつかしい後見人、さてはロやかましい親戚の叔父の手を放れた年少氣鋭の若主人の如くに自由活潑の精神を以て、前代の形式に囚はれることなく、氣兼遠慮なく、各々その爲さんと欲する所に自由に趨いて、自ら新文藝の開祖となつたのである。

第二期後半の享保時代は、德川八代將軍吉宗の時代であつて、元祿時代の奢侈放逸の風を矯正するために、勤儉尚武主義をとり、政治上、風俗上、緊縮方針を基としたゝめに、小說等も一頓挫を來し、前半期に於ける自由奔放の風を收め、漸くその光彩を失ふに至つた。しかしなほその餘勢は繼續してゐたのである。享保七年十一月に出版條例を出して、異說・淫事を記したり、幕府に關係したことを記したりすることを嚴禁し、新刊書には必ず著者と出版人との署名をなさしめた。且つ從來世に出版されてゐた好色本は追々之をとりしらべて、絕版を申付ける命令をも出したのである。このため好色といふ二文字を削除して改題をしたものも少なくなかつた。たとへば「好色五人女」を「當世女氣質」とし、「好色盛衰記」を「西鶴榮華話」とした類である。八文字屋本が好色の文字に代へるのに風流又は傾城の文字を以てしたのもこのために外ならない。

元祿時代が我が國文學史中最も光彩に富み、趣味の多い時代であるといふことは今更贅するまでもない事であるが、ことに文壇の三偉人、西鶴・芭蕉・近松の三人を思ふ時、更にこの感が深いのである。この三人のうちでは、西鶴が一番の年長者であつて、芭蕉はこれより二歲若く、近松は芭蕉より九歲の年下であるが、その事業の世に現れたのは殆ど時を同じうするといつてよいのである。西鶴の初作「一代男」の世に出たのは天和二年であつて、從來號して桃青といつてゐた芭蕉が深川の草庵に一株の芭蕉を植ゑ、初めて芭蕉庵と號した時で、近松が義太夫のために新淨瑠璃瑠出世景淸を作つた貞享三年は、芭蕉の有名な「古池や蛙とびこむ水の音」の吟のあつた年である。此三人が京・大阪・江戸と三方に分れたことも面白い現象であつて、且つ小說・俳諧・戲曲の三方面に各々革新の事業を企て、共に立派に成功してその歷史に一新紀元を開いたことも驚異に値することである。實に元祿の通俗文壇は此三人によつて代表せられ、此三人ありて始めて價値のあるものとなつたのである。當に元祿文壇といふばかりでなく、我が國文學史をして重からしめた此三人の力は實に偉大といはなければならないのである。更に特にこゝに一言したいのは、この三偉人中近松と西鶴とが元祿時代の思潮を最もよく代表してゐるといふことである。

近松・西鶴の二人が、從來の戯曲や小說の因習を打破して、自己の言語文章を以て直ちに社會の人間を活寫しようと試みたことは、從來しば〳〵のべた風潮によつておのづから明かになる事であるが、これ等の文學が大阪といふ土地に起つたのは如何なる理由によるであらうか。こゝに考察を要すべき問題が含まれてゐようと思ふのである。元和偃武以來太平うちつゞき社會の文化は一般に進步し、生活の程度も高まり、人民みな泰平の春に浮れ文化の酒に沈溺してゐたのである。ことに江戸・京・大阪・三府の繁昌はとりどりであつた。江戸は將軍の膝下であり武士の都ではあるが、新開地の悲しさ、文化の素地がまだ不十分であり、民間の富力も商人の都會である大阪にはとても及ばなかつたのは勿論である。京都は古來王城のあるところであつて、都會としての品位は隨一を保つてゐたとしても、金力に於ては何としても日本全國の貯所といはれた大阪の足許にも及ばないのである。一方京都は長年の歷史を背景とした文化の中心地であつたが、德川幕府の政策はなるべく士民の耳目を京都に向けしめないやうにし、諸侯の參勤交代の通路も京都を回避せしめるやうにし、又事實としても運輸の不便な土地であつて、政治上の中心地たる江戸がやゝ東によりすぎて物貨の集散には不便であつたと同じく、、大阪の全國中心たる點には及ばなかつたのである。かういふ理由でもつて大阪には諸大名の米をたくはへる倉屋敷があり、富豪は軒をならべ、中國九州の入船をうけて堂島の米相場は全國の大勢を動かしたのである。江戸は武士の勢力のあるところ、京都は貴族の勢力のあるところ、大阪は町人の勢力のあるところ、町人を相手とする文學が大阪に起つたのは當然の勢である。西鶴がこの地に出で、宗因や近松が京から大阪に下つて來たのもこの理由によるのである。かく町人の富裕なるにつれその勢力も驚くべきものがある。江戸の紀文、奈良茂、京の中村内藏助、大阪の茨木屋幸齋、淀屋辰五郎の如きはいづれも當時の富豪であつて奢侈を極めたものである。而してこれ等の商人は理想も低く道義の觀念も薄く、懷の温まるにつれて太平の春に浮れ出で、種々勝手なことをやつたゝめに、風俗自ら淫靡に流れざるを得なかつたのである。遊女と野郎とがこの頃の文學の二大材料であるのも故ある哉である。また當時の戀愛が肉感的であるのもこのためである。單に書物の名だけを見ても、遊女野郎の評判記以外には、「好色何々」「傾城何々」といふものが非常に多い。これを第一期の作物が教訓に傾き、三敎一致を說き、神佛の靈驗をとけるに比ぶればまことに雲泥の相違があると言はなければならない。性欲の滿足、現世の快樂を說いた所謂デカダン的享樂主義が小說界を風靡したのである。神佛の力、妖怪の力は到底黃金の力には及ばなかつたのである。かくして現世を謳歌し、現實世界の榮華に醉ひ、享樂的風潮は滔々として一世を蔽つたのである。

二、井原西鶴

(一) 年譜

便宜のためにまづ年譜をかゝげる。

寛永十九年（一歲）大阪に生る。（如儡子の「可笑記」刊）
同　二十年（二歲）（後光明天皇即位。）
正保　元年（三歲）（松尾芭蕉伊賀に生る。）
同　二年（四歲）
同　三年（五歲）

同　四　年（六　歳）
慶安　元年（七　歳）
二　年（八　歳）
三　年（九　歳）
四　年（十　歳）（將軍家光薨、「蒙陰比事」刊。）
承應　元年（十一歳）
二　年（十二歳）（近松門左衛門生る。松永貞德歿す。）
三　年（十三歳）（後光明天皇崩御。）
明暦　元年（十四歳）
同　二　年（十五歳）
同　三　年（十六歳）（山岡元隣の「誰が身の上」刊。正月江戸大火。）
萬治　元年（十七歳）
同　二　年（十八歳）
同　三　年（十九歳）
寛文　元年（二十歳）（鈴木正三の「因果物語」刊。）
同　二　年（二十一歳）（曾我休自の「おぐち物語」刊。松平信綱卒す。）

同　三　年（二十二歳）（鈴木正三の「二人比丘尼」刊。靈元天皇即位。）
同　四　年（二十三歳）（如儡子の「百八町記」刊。）
同　五　年（二十四歳）
同　六　年（二十五歳）（「遠近集」に鶴永の句始めて出づ。淺井了意の「伽婢子」出づ。八文字屋自笑生る。）
同　七　年（二十六歳）（江島其磧生る。）
同　八　年（二十七歳）
同　九　年（二十八歳）
同　十　年（二十九歳）
同　十一年（三　十　歳）
同　十二年（三十一歳）（德川光圀始て彰考館を開く。）
延寶　元年（三十二歳）「生玉萬句」（俳書）撰。
同　二　年（三十三歳）
同　三　年（三十四歳）「大阪獨吟集」（俳書）「糸屑集」（伊勢村重撰）に句出づ。この時始めて西鶴と號す。
同　四　年（三十五歳）「俳諧師手鑑」撰。
同　五　年（三十六歳）五月二十八日生玉本覺寺にて獨吟千六百句興行、翌年「大句數」と題し刊行。
同　六　年（三十七歳）「博多百合」。「三鐵輪」。「胴骨」。「虎溪橋」。「五德」（以上いづれも俳書）「新附合物種集」を編。

同七年（三十八歳）「西鶴五百韻」。「杉やき集」。「兩吟一日千句」。「飛梅千句」

同八年（三十九歳）五月七日生玉本覺寺にて四千句獨吟。

天和元年（四十歳）「大矢數」。「難波百人一句」刊。

同二年（四十一歳）「好色一代男」刊。西山宗因（七十八歳）山崎闇齋卒す。芭蕉江戸深川の草庵に芭蕉を植ゑ初めて芭蕉庵と號す。

同三年（四十二歳）宗因一周忌に「精進膾」刊。

貞享元年（四十三歳）住吉神社にて一晝夜二萬三千五百句獨吟。「二代男」（一名諸艶大鑑）。「冬の日」刊。「暦」（淨瑠璃）

同二年（四十四歳）「西鶴諸國噺」（一名大下馬）（芭蕉野晒紀行出づ。）

同三年（四十五歳）「三代男」？「近代艶隱者」（序文のみ西鶴、中は弟子の白鷺作）「五人女」。「一代女」（近松の出世景清出づ。芭蕉に「古池や」の吟あり。）

同四年（四十六歳）「本朝二十不孝」。「男色大鑑」（一名本朝若風俗）。「懐硯」。「武道傳來記」。（東山天皇即位。）

元祿元年（四十七歳）「日本永代藏」。「武家義理物語」。「新可笑記」。「色里三所世帶」？「好色盛衰記」。

同二年（四十八歳）「本朝櫻陰比事」。「一目玉鉾」。（芭蕉の細道出づ。）

同三年（四十九歳）「眞實伊勢物語」？。（蘭人ケンペル長崎に來り日本記事を著す。）

同四年（五十歳）「石車」（俳書）。（淺井了意及び土佐光起歿す。）

同五年（五十一歳）「世間胸算用」。

同六年（五十二歳）八月十日歿す。浪華寺町誓願寺に葬る。この年冬「置土產」刊。

同七年「織留」。刊。

同八年「俗つれ〴〵」。刊。

同九年「萬の文反故」？。刊。

同十年

同十一年「小夜嵐物語」？。刊。

同十二年「名殘の友」。刊。

（二）西鶴の傳記

西鶴の傳記は近松と同じく一向分らない。年齒十五六歳の頃始めて俳諧に志し、西山宗因に師事したやうである。西鶴の句が始めてものに見えてゐるのは寛文六年刊行の「遠近集」（西村長愛子撰）であつて、鶴永といふ號で句が三句出てゐる（雜誌「國語國文の研究」第十七號及び第十九號所載、潁原退藏氏「西鶴の俳歴」參照）次で寛文十一年に刊行された「落花集」（高瀧以仙撰）に「長持へ春そくれ行く更衣」が見え、延寶元年には「生玉萬句」を撰してゐる。而して「大阪獨吟集」の刊行された延寶三年に鶴永の號を改めて始めて西鶴と號した。これは師匠宗因の別號なる西翁の西を鶴永の上に冠して西鶴としたものと思はれる。この西鶴の號が始めて見えるのは延寶三年八月の序のある「糸屑集」である。この樣に俳諧の方では西鶴の號ははやく用ひられてをるのであるが、天和二年から貞享三年までの五年間、所謂好色本時代には何等の署名が無い。これは好色本を卑下して遠慮したものであらうか。元祿元年の「新可笑記」に至つて西鵬といふ名を用ひてをる。これはこの年の二月一日に江戸市中で鶴屋の屋號、又は道具に鶴の紋をえがくことを禁じたためである。延寶五年將軍綱吉に姫君が生れ、鶴姫と名付けたのでこれに憚つてかくの如き禁止を下したのであ

る。この姫君は後年紀州家に嫁いだのでこの禁止もゆるんだものと見え、元祿六年の「置土産」には西鶴といふ名に復して居るのである。大阪の西鶴の墓には仙皓西鶴とある。その他俳書には四千翁、二萬翁二萬堂などとも署名してゐる。大阪では槍屋町に住んで二十一歳の頃には俳諧の點者をしてゐたらしい。彼の孫とみづから名のる東鶴といふものがあつて、明和頃の繪本などに序文を書いてをる。小說の作は無いやうである。その眞僞はおぼつかない。彼の逸話として傳へられるものにかういふ話がある。「好色浮世躍」六册を作ることを池野屋二郎右衞門といふ書物屋から賴まれて、その前金を三十兩貰つて遊興に使ひ果して、作の成らないうちに本屋も西鶴も共に死んでしまつたといふのである。冥途でこの兩人が邂逅し、西鶴はきまりわるくて避けようとしたが、池野屋がこゝまで來て遠慮には及ばぬと言つたといふ。「元祿太平記」にこんな話が見えるが如何であらう。活版本には三十兩を三百兩に誤つて居る。

彼は又豪商天王寺屋のとりまきをして遊廓に出入したと傳へられてゐる。道樂は盛にやつた樣であるが、下戸で酒ののめなかつたことは、弟子の北條團水が追善の「心葉」といふ書物に見えてをる。

當時眞面目な人からは嘲罵惡口をうけ、「好色破邪顯正」にはよからず言はれ「阿蘭陀西鶴」とのゝしられたものである。しかし又八文字屋本の「傾城禁短氣」には「粹法師」と言つておだて上げられてをる。どちらにも一理があつて、西鶴の面目を表はしてをると思ふ。

書物に見えてをる彼の事蹟は以上の如きものであるが、本年になつて次の如き新說が新資料によつて世に紹介せられるに至つたので一瞥して置かう。

雜誌「國語と國文學」第五十七號(昭和四年一月號)新資料研究號で、藤村作博士は「井原西鶴は平山藤五か」といふ題目で「日本藝林叢書」第八卷見聞叢談(三七頁)をひいて、「この新資料について、余の先づ喜ぶ所は、見聞叢談の著者が、その人物に於て相當信賴をなし得べき人であり、又その記錄された年代が、西鶴の在世生時に近いことである。この二點に於て本資料は相當の敬意を以て取扱はるべきものであらう。この新資料に據れば、西鶴の實名は平山藤五であつたことが知られる。井原といふのが苗字でなかつたとすれば、井原西鶴は雅號のやうなものであらうか。次に彼を武家の出身であらうかといつた疑も單に疑に止つて、大阪の町人であつたことになる。作品から察すると、いかにもこれが眞實らしい。元祿太平記が彼を貧乏ものと傳へて、誰も疑ふものはなかつたやうであるが、この資料に依るともと相當富んでゐた家に生れたが、後その家を手代に讓つて、俳諧や浮世草紙などに筆を執つて、專ら世を自由に暮したといふから、生得の貧乏者ではなかつたことゝなる。この點も彼の作から考へ、これまで知られてゐた經歷と照らし見て興味多く思はれる。獨身者であつたらしかつた想像はよく當つてゐたことゝなるが、併し嘗ては妻も持つたが、夙に死なれてしまひ、一女子も盲目の上に早世してからは、全く獨身であつたと見える。一目玉鉾の著述のあることや、好色本その他の作が三都ばかりでなく、廣く地方に亘つて材を得てゐる趣から察して、彼が旅行家であつたといふ想像もこれに依つて確められるわけである。一年の半分も旅に出てゐたといふことはいかにもさうであつたらしく思はれる。こゝに疑問となり、その解決の望ましいことは、著作についてこの新資料の傳ふる所である。永代藏はいゝが、西の海、世上四民雜形といふのは永代藏の別名の意でいふのか、文が不明確であるが、今日傳へてゐる日本永代藏の二種の本には新長者敎の別名を傳へて、西の海とも世上四民雜形とも傳へてゐない。永代藏の外にこの二書がある意かとも取られるが、それにしても、余は寡聞まだかゝる著作を見たことなく、又かゝるものゝあるこ

とを傳聞したこともない。偏へに特志家の研究示教を俟つのである。」(二九一頁——二九二頁)と言つてをられる。今後の研究に俟つべき問題であると思ふが、とにかく新資料として日本藝林叢書第八卷見聞叢談中の記事は注意すべきものゝ思ふ。

(三) 西鶴の門人

彼の有名なる辭世の句「浮世の月見過しにけり末二年」は「置土產」に出てゐる。彼の俳諧の門人には水田西吟、下山鶴平、北條團水、椎本西丸等いふ人がある。西丸といふ名稱は西角に對するものであるかも知れない。この中で小說を筆にした人は西吟であつて、落月庵と號して、攝津櫻塚の人である。「一代男」の版下はこの西吟が書いたといふことである。種々の俳書を出してをるが、その外に「近代長者鑑」といふ小說も書いてをる。これは「永代藏」を模したものである。その他淨瑠璃にも筆を染めてをる。北條團水は京都の二條堀河の人であつて、後大阪に下り、西鶴の家に住んで、西鶴庵と號して種々の俳書及び小說を書いてをる。下山鶴平といふ人は大阪心齋橋筋の本屋であつて、俳諧では炭翁と號してゐる。椎本西丸(才丸)は舊德翁とも號して大和の產で、長く江戸にも住し大阪にも住んだ人である。この人は全くの俳諧專門であつて、晚年は蕉風の影響をうけて句風を改めた。

(四) 著作の傾向

西鶴の著作について一言を加へてみるに、俳書「石車」の序文に彼自らかう書いてゐる。

俳諧ほどの事なれども我三十年點をいたせしに云々

この語より推して考へてみるに、「石車」は彼五十歲の時の作であることは前に年表で示した通りであるから、西鶴は二十歲前後で俳諧の點者となつたものと思はれる。延寶三年の「大阪獨吟集」から天和元年の「大矢數」に至る七年を專ら俳諧の方面の活動に費したと見ることが出來る。次いで天和二年四十一歲で「一代男」を著してから、小說家として立つに至つたのである。然らば何故に西鶴は、俳諧より小說へと彼の職業をかへたのであらうか。

延寶天和年間は俳諧に於ける談林派の全盛時代であつて、天和二年はその開祖西山宗因が死んだので、この一派にとつては一大打擊であつたけれども、從來養ひ來つたところの勢力は俄かに衰ふべきものではなかつた。且つ芭蕉はこの時代に於てはまだ一家の特色を樹立するところまでは行かないで、いろ〳〵懷疑煩悶して居つた時代であつたので、さ程の勢力はなかつたのである。故に西鶴が如何に恰悧先見の明があつたからと言つて、談林派の前途を見限つて自らの業を轉ずべきではない。こころで飜つて考へて見るのに、西鶴は宗因門下の第一俊才として有名ではあるけれども、俳諧はたゞ惡達者といふにすぎないもので、實力に至つては到底宗因に及ばないこと勿論で、弟子の才丸にも劣つてゐる位である。ことに俳句に至つては數も少く、見るべきものは僅か三四句にすぎない有樣である。たゞ連句に於てはその數も多く、人事の曲折を寫し世態人情を穿つてゐる句も少くはない。由來談林派の連句は、新奇なる言葉、流行の風俗を材料として警句を吐くことを主としたものであるから、これが一轉すれば一種の寫實小說となるべき傾向は十分にそなへて居るのである。たとへば西鶴の「大句數」の中にも次の樣なのがある。

胸の火や少し心を置炬燵
揚屋ながらも初めての宿
何と亭主變つた戀は御座らぬか

昨日もたはけが死んだと申す

といつた調子のもので、少々テニオハを加へるとすぐに好色本の一節が出來上るのである。「この點芭蕉の連句とは大いに異なつてゐるので、天然の叙景の句少く、人事に重きを置き、遊女や歌舞妓のことなどをよんだ句が多い。こと に西鶴の才はこの世態人情を寫すといふ方面に優れて居つた。」それにこの時代には遊女評判記や野郎評判記が行はれ、その風潮は延いて熱心な遊廓研究者を出したのである。「延寶年間には貞德派の俳人の畠山箕山なる人の「色道大鏡」といふ大部の著述が出たのである。箕山は呑舟軒とも號し、二十九歳の時思ひたつて斯道の研究に志し、東は奥州から西は九州まで普く天下を文字通り遊學して、年を積むこと三十有餘年にしてこの書を成した。この書は十八卷あつて名目・儀式・器財・音曲・烈女傳といふものが書かれてゐる。」西鶴もかういふ時勢の風潮に促されて、自分の長所を之に向けんとの考を起し、遊女評判記及び遊廓案内を兼ね、小說的形式を備へた「一代男」を著したのである。之より前に評判記以外に「犬つれ〴〵」(承應二年刊)。「催情記」(明暦三年刊)や「たきつけ」、「もえくゐ」、「けしずみ」(延寶五年刊)といふ類の好色物もないではないが、是等は皆隨筆風の書き方で「一代男」のやうに纒つたものではなく、一人の主人公を設けて趣味の一貫した物語として現出したのはこの「一代男」が始めなのである。西鶴の物は全く目新しい趣向である上に、文章は多年俳諧で鍛へあげた腕の冴へた簡潔な力の籠つたものである所から、非常な喝采を博し、江戸の方にも僞版が出るといふ勢であつた。それから彼は乘氣になつて、矢繼早に「二代男」「五人女」と續いて出して、小說の方に熱中して居る中に、蕉風が次第に盛んになつて、談林の林に秋風が吹きそめたので、遂に本職の點者の方は疎かにして、小說家として身を終るに至つたのである。西鶴は元祿時代にもてはやされたけれども、文化

文政時代には勸善懲惡主義の小說のために忘れられ顧みるものも無かつたのである。それが明治に入つて尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉等に見出されて俄に聲價を高め今日に到つたものである。而して西鶴は元祿文壇の大立者、新小說の創立者であるけれども、彼自身は芭蕉のやうに眞面目な理想をもつて、風雅に達する唯一の道を信ずるやうな、そんな抱負や自覺があつた譯ではない。たゞ無意識に世間の風潮につれて濁波をあげたにすぎなかつたのである。好色本は畢竟、遊女評判記や遊廓案内の變形たるにすぎないものである。されば元祿時代の書籍目錄にも遊女野郎の評判記や笑本と同列にをさめられ作者の名も記されてゐない。元祿の如き遊冶の時代にもさすがに表立つたものとは思はなかつたのである。

(五) 好色物の一「一代男」

「一代男」は八册よりなつて世之助といふ好色男が七歳の時に始めて戀を覺えてより、種々のいたづらをしつくして、一時は父親より勘當されしも母親の臨終の際に二萬五千貫のかたみ分けを貰ひ、三都は勿論、諸國の遊廓に明暮たはけの數をつくして、六十歳に至るまで三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の美少年を弄びて、日本も遊び飽いたゞ、茲に好色丸といふ船を仕立てゝこれに種々の好色道具を積みこんで女護島の遠征に上るといふ顚末を五十四章に綴つたもので當時の色界の風俗を活寫してゐる。これは嚴密にいへば一章づゝ獨立してゐる話であつて、その間をつないでゐるものは唯世之助といふ主人公だけにすぎないので、五十四章の間には有機的の連絡はないのである。換言するとつまり評判記のきぬを十分脫ぎきつてをらぬといふことになるのである。「二代男」は更に逆もどりして一貫した主人さへも無いといふ始末である。

この「一代男」の抄錄に「里樣太皷」といふものがある。これは遊廓案内の目的で抄錄したもので、この點よりしても西鶴の作が遊廓案内と深い關係のあることが分るのであらう。つまり主人公世之助といふ名を除いてぬき書きにすれば各地の遊廓案内の代用となるべきものである。一代男は非常な勢で流行し江戸にまで及び貞享四年には師宣の繪を入れて飜刻し、又畫を大にし文章を縮めて頭書にして出版されてをる。（「やまと繪の根元、日本風俗繪」といふ。）寶永七年の八文字屋本には「寛濶平家物語」といふのがある。これは世之助の一子京之助の一生を寫し、最後に世之助の肖像を置いてこれを祭ることに作つてある。又享保年間には「和漢遊女容氣」といふのがある。「一代男」とその頃行はれた淨瑠璃の國性爺合戰とをつきまぜ、世之助が女護島に渡り女王の妹と契つて生れた遺子世繼之助が放蕩をつくして後、「一代男」の三十三回忌を營むことを書いたものである。その他世之助を例に引いたものは極めて多家としていのである。以てその影響が同時代にも後代にもいかに著しかつたかといふことが明かであらう。且つ理想的の好色業平、光源氏以外に世之助といふ新しい名を加へた譯である。實に「一代男」は元祿好色本の祖であるばかりでなく、我が古今の小說期を劃したものである。西鶴自身も、その後つゞいて多くの好色本を出し、しかも題目を他にとらないで「二代男」「三代男」「一代女」など命名したのを見れば、いかに「一代男」が當時にもてはやされたが分るのである。

(六) 好色物の二『二代男』

「一代男」の後一年を隔てゝ「二代男」が出來た。世之助が十五歳の時さる後家と通じて生んだ子を捨てたといふことが「一代男」に見えてゐたのであるが、この子がある富豪に養はれて、長じて名を世傳といはれた。この世傳が女護島

欠

ども女子の放蕩逸樂といふ事が、男子のそれほど時人の好尚に適しなかつたものか、「一代女」は「一代男」ほど名聲を博することが出來なかつたので、彼は更に一轉して他方に眼をそゝぎ「男色大鑑」を境としてこゝに好色物の終りを閉ぢるに至つたのである。元來西鶴の題材は常に生活問題を離れず、色慾、義理、利慾を寫したのである。その色慾を寫したものが以上の樣な好色もので、利慾を寫せるは町人もの、義理を寫せるは武家ものである。

(一〇) 好色物より武家物への過渡としての『男色大鑑』

「男色大鑑」は一名「本朝若風俗」といつて「一代男」「二代男」が遊女評判記なると同じく、これは野郎評判記の變體と見るべきものである。全部八册であつて、始めの四册は素人若衆のことを寫し、後の四册は歌舞妓若衆の事を寫してをる。これも恐らくは事實に基いた話を集めたものだと思はれる。「本朝二十不孝」と共に明かに序文に名を表はしてをるので、序文は特に有名である。つまり「男色大鑑」は好色物から武家物へ移る過渡期の代表作と言ふことが出來るのである。

(二) 好色物から武家物への轉移の原因

西鶴が貞享三年四年を境として、好色物から武家物へ移つたのは、嘗つて述べた所の俳諧より小說に移つた轉化と等しく注意を要すべき變化である。その原因は何處にあるであらうか。藤岡博士の「近代小說史」に論ぜられてゐるところを籍りてこれを考へてみよう。

世には當局者の禁令から、好色物を捨てゝ武家物に移つたといふ論もある樣であるが、俄にこれには從ひ難いのである。禁令の有無に就いても問題はあるが、假りにその禁令の出たのが事實としても、西鶴以外の作者に好色本のあ

欠

またあることを思へば、他にその原因を考へなければならないのである。即ち西鶴が好色本に筆を絶つた貞享四年には、作者不明の「好色旅日記」「好色貝合」といふのが出で、其角の「吉原五十四君」も出てゐるのである。又その翌年の元祿元年には「好色盛衰記」「好色注能毒」「好色通變古」など多くの好色本が出てゐることを考へれば、この禁令は必ずしも西鶴をして好色本を絶たしめた原因とは考へられないのである。又事實好色本に關する禁令は當時無かつたやうである。

西鶴が好色本を捨てゝ武家物に移つた原因はかゝる外圍の境遇より來たのではなくて、內面的に西鶴一身上の事情より來てゐるものではあるまいかと考へてみる必要があるのである。西鶴は極端なる寫實家である。その作品は多く斷片的經驗の事實を羅列したにすぎないものである。從つて若しその自己の經驗が盡きて、之を補ふに足るだけの想像力が働かなかつたとしたならば、その創作力は見聞の材料の減少に伴つて減退せざるを得ないのである。西鶴の作は奇警なる觀察や、鋭利なる筆鋒を以て人目を眩するもの多かつたのであるが、實は今日の新聞の雜報のやうな見聞の事實を雜然と集めたものにすぎないで、「二代男」が「一代男」に劣り、「一代女」が「一代男」ほどに觀迎をうけなかつた理由の一つはたしかにこゝにあるのである。從つて機を見るに敏である彼が、自己の力量をはかつて、材料に乏しくなつた好色本を捨てゝ翻然として專ら力を目新しい武家物に注いだのであらうと思はれる。而して武士階級は當時社會の中堅であつたところから、現實描寫を本領とする彼がこの方面にその取材を求めたのは當然である。

(一二) 武家物の一『武道傳來記』

西鶴はこの序に次の如く書いてゐる。

和朝兵揃の中に、爲朝のくろがねの弓、武藏坊が長刀、朝比奈が力瘤、景清が眼玉、これらは見ぬ世の事、中古武道の忠義、諸國に高名の敵討、其のはたらきを聞き傳へて筆の林、詞の山、心の海靜かに、御松久かたの雲によろこびの舞鶴これを集めぬ。

これにて知られる如く中古の武道譚をかき集めたもので。全部八卷、各卷の目錄のはじめに「諸國仇討」とかいてあるけれども必ずしも仇討のことばかりを書いたものではない。異し合ひの事等もあつて要するに武張つた話を集めたものである。まゝ男色に關したものもある。貞享四年の刊行である。

(一三) 武家物の二『武家義理物語』

これも亦前者と同樣の書であつて

「時の喧嘩口論、自分の事に一命を棄つるは誠ある武の道にあらず。義理に身を果せるは至極の所」と書いてゐることとく、武士の義理に關する物語を集めたものである。

以上二書の武家物は西鶴にとつて共に失敗の作である。武士をうつすことは遊女野郎を寫すより不得手であつたと思はれる。西鶴は元來大阪の町人であるから武家の事情に通じなかつた爲であらう。元祿元年の作である。

(一四) 武家物の三『新可笑記』

これは如儡子の「可笑記」に基いた作であつて、武家に關する面白い話を集めたものである。武家物としてさきの二書に比べてはよい出來である。その目錄には「理非の命勝負、武士は人を助くる一言のこと」等の如く、一々「武士は」とあつて、皆武家の話であるけれども、その實は內容に町人を主としたものも少くはないのである。

(一五) 武家物より町人物へ

以上のべた武家物は西鶴の作としては決して成功したものではなかつた。彼は更に武家物から町人物に移つたのである。町人物の對象たる町人は西鶴の常に接觸してゐる世界であるから、その觀察も面白く、且つ滑稽中に多少の教訓を交へたゝめに大に京阪讀者の喝采を博したのである。從つて賣行も多かつたものと見えて今日殘つてをる書物もこの町人物が一番多い。

(一六) 町人物の一『日本永代藏』

これは一名「新長者教」ともいふもので長者になつた人の話を集めたものである。六卷ある。これよりさき寛永四年の出版に「長者教」一册があつて儉約致富の方法をこいた小册子で、小說ではないが、かなり流行したやうで間もなく再版を出して居る。本書はこれに對して書いたものである。「永代藏」の本旨は、長者分限になるべき處世の術を說いたものである。世渡り術の具體的物語である。この具體的處世術を西鶴は「才覺」と名づけ、これを發揮することによつて長者分限になり得るとしたのである。弟子の園水には「新永代藏」の作がある。西吟には「近代長者鑑」なるものがある。

(一七) 町人物の二『世間胸算用』

この書の序に曰く

松の風靜かに、初曙の若えびす〳〵、諸商人買うての幸ひ賣りての仕合、拂帳閉棚おろし、納め銀の藏びらき、春のはじめの天秤、大黑の打出の小槌、何なりともほしき物、それ〴〵の智慧袋より取出す事ぞ。元日より胸算用油斷なく、一日千金の大晦日を知るべし。

と。大晦日に於ける商人のやりくり算段の苦しいさまを書いたもので、精細透徹、大晦日を背景とする町人生活の活寫である。商人の內情がいかに金錢に驅使せられてをるか、描き得て妙である。筆致老熟、西鶴の町人物中の傑作であつて、元祿五年の作で、生前に出版された最後の書で五卷ある。

(一七) 町人物の三『織留』

これは西鶴の歿後、元祿七年、遺稿として出版されたものである。北條園水の序文には次の通りかゝれてある。

西鶴生涯のうち、述作する所の假字草子、棟に充ち、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代藏、本朝町人鑑、世の人心、これを三部の書と名づく。尤も商職人の閑するに、日用世を渡るたづきに、こゝろを得べき龜鑑たるべきものにして、永代藏は其の功なりて後、町人鑑世の人心半ば書き遺して、過ぎし酉の葉月に此の世を去りぬ。されば兩部の名のみにして、むなしく三部闕けたらんには、ぬしの本望もかなはず、かつは卷いて紙蟲の家ともならば、珠を澁泥にかくすにひとしからんと、書林の某の歎きに應じて、兩部の書き殘されし半ば宛を、とり合はせて一部とし、かれにあたふるついで、予に序を乞ふ。此の書の功のをはらざるに、わかれしを思ひ出でゝ、涙を墨にして筆を添へ侍りぬ。

これで如何にして出版されたかゞある。一卷、二卷は「西鶴織留本朝町人鑑」と名付けられてゐるが、三卷、四卷、五卷六卷は「西鶴織留世の人心」と名付けられてゐる。前者には町人の才覺が語られてゐて、教訓的傾向がある。

(一八) 好色物、武家物、町人物以外の作。

西鶴には以上あげた三種の著作の外にいづれにも入らぬ雜著と稱すべきものがある。

1、「置土産」

これは西鶴の歿後、元祿六年に出版されたもので、大盡が遊興のために落ちぶれた話が集めてある。藤岡博士も言つてをられる通り西鶴の著書中では稍々無常を感じたる趣を帶びたものである。「置土産」といふ名稱は歿後すぐの出版であるから名付けたものである。卷首に西鶴の肖像及び辭世の句、門人追悼の句などが出てをる。作の傾向からいへば大體好色物の部類に屬すべきものであらう。六卷、元祿六年刊。

2、「本朝二十不孝」

後には「新因果物語」と改題されたものである。淺井了意の「大和二十四孝」の裏を行つたもので不孝者の話、さては因果應報の談も交つてゐる。「新因果物語」は鈴木正三の「因果物語」にならつて名付けられたものである。五卷、貞享三年刊。

3、「懐硯」

4、「諸國噺」

この二書はともに國々の奇事異聞を集めたものであつて、淺井了意の「伽婢子」「犬張子」にならつたものである。これ等を「奇談物」といふ名で呼ぶ人もある。共に五卷、前者は貞享二年刊。後者は貞享四年刊。

5、「名殘の友」

俳諧師に關係のある逸話を集めたものである。門人才麿や園水に關することなどもある。五卷、元祿十二年刊。

6、「本朝櫻陰比事」

これは「棠陰比事」にならつたものであつて、名奉行の裁判話を集めたものである。一節毎に「昔都の町」といふ話を以て始めてをる。五卷、元祿二年刊。

7、「俗つれ〴〵」

衆好法師の「徒然草」には色と酒との評論がある。この書にも酒色に關する話が集めてあるのでかく名付けたのである。五卷の中一、二、三は酒の利害を實例を以て示したものであり。四、五は情事に關する記事であつて、五卷には「置土産」と同種類の、たとへば「四十七番目の分限、又一番の貧者」の如く大盡の零落談もある。全篇を通覽するに文章の巧拙一樣にあらず、又殘篇と見える樣な點もあつて、完備した感じがない。全篇が西鶴の筆であるとは思はれない。後人が恐らく七八分書き加へたものだらうと思はれる。

8、「一目玉鉾」

これは蝦夷から對馬に至るまでの道中名所案内記であつて小說ではない。四卷、元祿二年刊。

(一九) 西鶴の作とは思はれないもの

1、「近代艷隱者」

西鶴の序文はあるけれども、その序文中に「西鶯軒橋泉之を書き殘しぬ」とあつて西鶴の作ではない。文章も西鶴のそれとは大いにちがつてゐる。

2、「萬の文反故」

書簡に擬して種々の小話を作つたもので、これも文體や用語が西鶴とは異つてゐる。僞書であらう。

3、「小夜嵐物語」

從來行はれた軍記物と金平本に見える金平の地獄めぐりと合して出來上つたもので、源平兩家が地獄で和睦し後鳥羽上皇の幽閉せられたまふを迎へて地獄征伐をする趣向であるが、全く西鶴の作ではない。

4、「眞實伊勢物語」

「伊勢物語」の裏面を行かうとして、戀の失敗譚を書いたものである。猥雜なものであつて西鶴の好色物とは比ぶべくもないものである。

5、「奸色盛衰記」

貞享五年の出版であつて、後に題をかへて「西鶴桑華話」といふ。作風も文章も共に西鶴に似てはゐるけれども、西鶴とは俄に斷定しがたいものである。なほ十分の研究を俟つ必要がある。

(二〇) 西鶴の作品評論

「元祿以前の小說はその時代の社會の眞相をありのまゝに寫すことをしないで、たゞ話の道筋を運びて之に道德的の批判を加へて敎訓の用に供しようとした傾が多かつた。西鶴の好色本は行き方が全く之と異つてゐる。尤も西鶴も今日いふところの純粹の寫實家とはいへない、往々興に乘じて誇張した點もその描寫にはあるが、とにかく元祿時代の精神及空氣を多く想像を加へないで具體的に描出した一種の寫實家である。而して別にこれといふ理想もなく敎訓もなく、近松のやうな美しい情緒や感傷的な氣分は交へないで、赤裸々な人間性を寫したのである、社會の表面の美し

欠

最後に西鶴の淨瑠璃の作に就いて一言して置かう。

遊女野郎に接近した西鶴が梨園の事情に詳しかつたことは、その著「男色大鑑」が一種の役者評判記であることでも知れるのであるが、近松の樣に自ら劇部に携はつて脚本に筆を執つたといふことは聞かない、唯淨瑠璃に「凱陣八島」と「暦」の作あることが傳はつてゐるだけである。當時俳人で淨瑠璃を作つたものは、錦文流、櫻塚西吟等がある。西吟は既に述べた如く西鶴の門人でその作も多くはない。それにしても西鶴の淨瑠璃の作が僅か二種に止まり、それすら一は西鶴の作でないと言はれ、一は丸本の傳つてゐないに至つては、誠に遺憾の極である。さて此の二作を以て西鶴の作とするのは西澤一風の「今昔操年代記」(享保十二年刊)に起るのである。一風は享保十六年六十七歳で歿した人であるから西鶴よりは二十三歳、近松よりは十二歳の年少ではあるが、當時大阪で書肆を營み、傍ら小說戲曲の作に從事した人であるから、その說は信ずべきが如くである。「聲曲類纂」も一風と同じく「凱陣八島」を以て西鶴の作としてをる。しかし是は確實なる根據のないことで、たゞ加賀掾の節事を集めた「小竹集」(貞享二年刊)に西鶴が序文を書き、且卷頭に「凱陣八島」の義經道行、勸進帳、花子の三章を揭げ、その次に西鶴作の「暦」を出して居るところからの推測であると思ふ。種彥も「西鶴作に暦といふ淨瑠璃あるよし、あやつり年代記および外題年鑑、近世世事談等に見へたり、小竹集といふ加賀掾が曲事(フシゴト)をあつめしものゝうちにて、暦の曲事を見しのみにて、いまだ全本を見ず、此小竹集のうちにも此かいぢん八島の曲事をのせ、序文も則西鶴作といふにうたがひあるべからず」といつて居る。然るに余は「近松全集」を校註するに當り、「暦」の全本を發見して再三熟讀して「凱陣八島」と比較するに、その文致筆癖は西鶴よりも近松に近く感ぜられたのである。鶴屋版の十行三十丁本には「近松門左衛門作」と署名がしてあるので、余は近

欠

松の作だらうと思ふのである。(「近松全集」第二卷及び「江戸文學研究」(二七七頁——二九〇頁)中「西鶴の淨瑠璃」の章參照)「暦」に於ても西鶴の文才は認められるが、全體としては散漫なまとまりのないもので、失敗たるを免れない。

三、西鶴の模倣者

(一) 北條團水

西〇に私淑して、その武家物や町人物の方面を主として學んだのは、北條團水と月尋堂とである。團水は鳳城團水、又團粹然和尚、滑稽堂主人、白眼居士など號して、俳諧を椎本才麿に學び、後西鶴の門人になつた人である。西鶴の歿後西鶴庵を守ること七年、正德元年四十九歳で歿した。主とするところは勿論俳諧であつたのであるが、師にならつてしば〳〵戯作にも筆を執つたのである。團水の著作は次の通りである。

新武道傳來記　寶永三年
晝夜用心記　寶永四年
一夜船　正德二年（後享保十一年に「怪談諸國物語」と改題）
日本新永代藏　正德三年
日本智慧鑑　同　年

この中で團水の傑作といふべきものは「日本新永代藏」である。これは西鶴の「永代藏」を眞似たものであつて、大體成功の作と言つてよい。けれどもその才は到底西鶴の比ではなく、從つて作に奇警なる點が乏しいのである。「晝夜用心記」はかたりや盜賊の話であつて「櫻陰比事」の裁判話から分れたものと見るべきである。世人は之を見て用心

すべしといふのである。「列傳體小說史」中には「正月揃」といふ作を團水の作の中に入れてをるけれども、この著者は白眼居士と言つて京の東山に住んでゐた僧侶であつて、「好色破邪顯正」を著し、以て好色本を非難した人であつて、團水とは別の人である。團水も別號を白眼居士と言つたので混同されたものと思はれる。「正月揃」は一種の職人盡にして上下貴賤の正月の樣を寫したものであるけれども、唯之を陳列しただけで極めて拙なものである。到底團水と同一人の作ではないのである。思ふに團水の價値は「新永代藏」に於て判定すべきもので、西鶴を模する點がよく表はれてをる。この點で團水は西鶴の忠實なる模倣者として許されるものである。

(二) 月尋堂

北京山人とも號し、印の文字によると看花齋とも號してゐる。その著作は次の通りである。

鎌倉比事　寶永五年
今樣二十四孝　寶永六年
兄弟善惡車　同　年
子孫大黑柱　同　年
儒偶用心記　同　年

この人の作中最もすぐれてゐるのは「今樣二十四孝」である。文章は西鶴を學んだのであるけれども團水よりも一層平明であつて、寧ろ八文字屋風に近いのである。「鎌倉比事」はいふまでもなく西鶴の「櫻陰比事」を模したものであつて、北條時賴や、泰時の裁判話を書いたものである。「子孫大黑柱」は「永代藏」より來たもの、「儒偶用心記」は團水の

「書夜用心記」と似たもので、盗賊や詐僞師の種々雜多のやり方を書いたものである。この書は明和の頃「世間用心記」と改題されて出てゐるので間違ひやすい。藤岡博士の「近代小說史」(一八四頁)にも

世間用心記に「定延狂書」「廉長」の押印あり。定延廉長は名か字か明かならず。

と記されてゐるが、定延といふのは明和寛政の頃の人であつて、「儒偶用心記」の改題なる「世間用心記」に序文を書いた人なのである。かたりの話を書いたものは支那にもある。「杜騙新書」は即ちこれである。併しこの書が當時すでに渡來してこれを模倣してかいたものであるかどうかは不明である。月尋堂はその傳を詳にしない。俳諧師の鬼貫と俳諧を詠じ交した人に月尋といふのがあるが、果して同人であるか別人であるかは明かでない。

以上の二人は西鶴の町人物、武家物を模倣した著しいものであるが、畢竟西鶴の糟粕を嘗めたにすぎないもので、出藍の才無く多く注意するに足りないのである。

西鶴本の好色本の模倣についていへば、この影響は江戸にまで及び「一代男」の翻刻があり、又俳人其角が西鶴の文を學びて「吉原源氏五十四君」なる評判記を書いたのは既に述べた通りである。

(三) 松月堂不角

貞享四年の「色の染衣」元祿四年の「好色染した地」等の作がある。不角は有名な俳諧師である。

(四) 桃林堂蝶麿

元祿十年に「好色大福帳」を書き、元祿十五年に至るまで五六種の好色本を出した。淫猥の甚しきものばかりである。

(五) 石川流宣

この人は浮世繪師で、貞享三年「好色江戸紫」を出せしを始めとして、二三の著がある。

(六) 由之軒政房

好色文傳授　元祿十二年(後に「風流文評判」と改題)

誰袖之海　寶永元年

京都の人である。前者は一種の「潦雪物語」の如く、往復の手紙を以て組立てた小說である。後者は京都の好色者が江戸に來て吉原に遊び、江戸の遊廓の人情風俗を品評し、かへるさの道々に色里を觀察し、京に歸りて島原に遊ぶことを書けるもので、いはゞ「東海道名所記」を好色仕立に書きなほした觀のするものである。

(七) 雲風子林鴻

これも京の人で、蘆月庵似船の弟子であつて、俳書にも「俳諧京羽二重」及び「永代記返答」等の著述があるが小說には「好色産毛」一部のみである。猥褻なものであるけれどもその文章は他の模倣者連に比べてみれば餘程達者であつて、當時の風俗に關係した記事の緻密なる點が西鶴によく似てゐる。西鶴式の好色本中では出色のものである。

(八) 西村市郎右衛門

京都の書肆で好色心中女、好色往能毒、浮世祝言揃など多數の好色本を書いてゐるが極めて猥褻なもので小說とは言はれない。江戸の桃林堂蝶麿と東西の好一對である。

(九) 西鶴

御前獨狂言　寶永二年

(一〇) 西　樂

世の是沙汰　寶永三年

以上の二人は恐らく西鶴に私淑した人であらう。名は西鶴の西をとつたものと思はれる。

(一一) 圓　水

この人は元祿十六年に「好色大振袖」といふのを出してゐる。圓水といふ名稱は圓水に何等かの關係がある樣である。この人は增田圓水といふ人と同人で、八文字屋の評判記を書いた人であらう。

(一二) 西澤與志

大阪の人で名は朝義と稱するのであるが、之を略して與志といふのである。又、一風とも號した人である。本名は正本屋九左衞門といつて、大阪心齋橋南四丁目の本屋であつた。晩年には淨瑠璃をも作つたが最初は小說ばかりである。享保十六年六十七歲で死んだ。その孫を一鳳といひ、歌舞伎關係の著述がある。

新色五卷書	元祿十一年	
御前義經記	元祿十三年	
風流女丹前記	元祿十五年	
傾城武道櫻	寶永三年	
野傾友三味線	寶永五年	
茶傾ひぞりがほ	同	

色繪綱百人後家	享保三年

初は全く西鶴を模し、後には八文字屋本を眞似てゐる。作の數は多いけれども奇拔なる觀察も、すぐれた文章の味もない。西鶴の「三代男」はこの家から出版してゐるから或は與志の作かも知れない。流行を追つてゐるのみで見識は無い。

(一三) その他

藤岡博士の「近代小說史」には西鶴の作を模して趣向の上に多少の工夫を凝らしたものに次の如きがあると論じてある。

傾城仕送大臣	元祿十六年	
好色罌粟鹿子	元祿七年	菩敎寺猿算
大峰山上參色道懺悔男	寶永四年	如醉
寶永千歲記	寶永二年	漆屋圓齋
好色忘花	元祿九年	九思軒
男色木芽漬	元祿十六年	
新色三つ巴	寶永二年	
香の薫	元祿八年	
風流好色十二段	元祿十五年	

風流夢の浮橋　元祿十六年　雨滴庵松林
立身大福帳　同　唯樂軒
御入部伽羅女　寶永七年　湯漬翫水
金銀座色町奢　正德三年
商人職人懐日記　正德三年
近代長者鑑　正德四年　落月庵操庖
魂鍛金衣鳥　享保二年

一傾城仕送大臣」は色々の遊女を描き、或る大盡が節季に彼女等に仕送をしようと思つて調ふる品物の名を擧げ、これによつて各遊女の性格を示さうとしたものである。

「好色罌粟鹿子」は浪花の色町遊びを大盡と遊女との問答體に記したものである。

「大峰山上參色道懺悔男」は好色のために目を煩つた男が、大和金峰山(大峰)に參詣し、己が過去の好色の懺悔をし、遂に眼病の癒えることをかいたものである。

「寶永千歳記」は寶永二年の春、伊勢お蔭詣が大に流行して、全國から主人の眼をぬすんで參詣したものが多かつたので、これをあてこんだもの。或る惡僧が參詣の小僧を殺さうとしたところ、小僧は神の加護によつて助かつたといふのである。けれども主眼は惡僧の色狂ひであつて、又一種の好色本である。

「好色忘花」は一半は佛教、一半は色道の書である。

「男色木芽漬」は別々の話を集めたものである。

「新色三つ巴」は好色と怪談との混じたものである。

「香の薫」擬古文でかいてゐるところは前者に同じ。

「風流好色十二段」は淨瑠璃の始祖と稱せられてゐる十二段草子を、今風に書き改めたものである。古文に擬した所も見えるけれども大體は西鶴を眞似たもので猥褻の風がある。

「風流夢の浮橋」は古風を追うて今樣としたもの、京の美濃屋源六といふ分限者が、業平の夢の告によつて、遊女狂ひ、若衆狂ひをなし、後己れの契つた女が、友人と密通したのを疑つて、二人を殺し、己も死ぬ話である。

「立身大福帳」これは當時の好題目であつた長者鑑の一である。この書は七册で七福神に當て、表紙の見返しにその箱を書いてゐる。五の卷までは松阪、大阪、京、長崎等の今長者の立身の徑路を寫したものである。

「御入部(ごにふぶ)伽羅女」京の長者町大黑屋宗善の子息勝久、癆症で氣欝するのを慰めようとて、父の勸めで遊女あそびをすることになつて、大阪に下つて豪遊を極めるのである。そのさまが大名の御入部(國守又は領主が始めて自分の支配地又は領地に入ることを入部といふ)に似てゐるといふのである。後には勝久、伽羅姫と契つて目出度終るのである。西鶴を模して始めは教訓の所があるが、好色の所も多い。

「商人職人日記」も西鶴の町人物を學んだものであるが拙い。

「近代長者鑑」は近代の分限者のことをかいたものである。名は長者鑑であるが、多くは遊女屋に遊んだことを寫

し、結局零落に終つてゐる。西鶴に及ばざる事遠いものである。

「魂鍛金衣鳥」は源三位頼政をもじつて主人公を銀三位欲政とし、大壺の放逸なる樣を寫して、東海の波に漂ふ由を記してゐる。當時にありては出色の作といつよからう。

かくの如く多くの町人ものが行はれたが、如何にして長者になつたかといふよりも、如何にして零落したかを記してゐるのが多い。又好色物の題目を見るのに、西鶴のあとにならつて好色の二字をつけたものが元祿時代にはことに多いやうである。これ一つにはこの名が賣るのに都合のよかつたものであつたらしく、甚だしいのに至つては教訓物にすらも好色の名を附けたのがある程である。然るに都の錦あたりからは、露骨をさけて風流の二字を以て之に代へるに至つた。又西鶴の「男色大鑑」に對して「男色子鑑」あり、「色道大鑑」に對して「色道小鑑」といふのがあり、心中を集めたものに「心中大鑑」がある如く、「大鑑」式の名稱も當時の流行であつて、これ又西鶴の模倣といつてよい。

四、八文字屋本

(一) 八文字屋本の起原

西鶴が出て小說の作風に一變を來したことは既に述べた通りである。爾來皆西鶴の作風を模倣してよくその型を出たものはなかつた。その中にあつて、西鶴を祖述しながら作風に一派を立てたのは八文字屋本であつた。八文字屋本といふのは書肆八文字屋から出版したもの、及び同類のものゝ併稱である。八文字屋本は役者評判記と密接なる關係がある。元來役者評判記はもとは遊女細見（遊廓内の各青樓の名と娼妓の名と位附などを細かに記した小册子を細見といふ。）に倣つたものであつて、始めは技藝の評よりもむしろ容色の評判を主としたのが多かつたのであるが、後には技藝の評を試みるに至つて、上中、上々吉などの位附を揭げるやうになつた。明曆二年板の「役者の噂」が最初のものだと云はれてゐる。この評判記の位附は全く遊女の細見より出たものである。而してこの評判記は貞享三年の頃より毎年出版せられ、西鶴や團水等もその筆を執つたといふことである。

元祿十二年三月、「役者口三味線」が八文字屋から出版された。これ八文字屋から評判記の出た最初である。この書は京、大阪、江戸の三卷に別れ問答の體をとり、甚だ精密なる批評が加へてある。

八文字屋なる書肆は、京の麩屋町誓願寺下る所にあつて代々の本屋である。江島其磧曰く。

抑も八文字屋八左衞門と申す草紙屋は、何にて世間へ廣く名を發し候哉。二條正本や（二條通寺町西へ入る正本屋山本九兵衞）、同じく鶴屋（同所南側鶴屋喜右衞門）は古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は京芝居の歌舞伎本を板行仕候（「役者目利講」の序文）

と。右の如く京では、正本屋山本九兵衞、鶴屋喜右衞門と相並んで、古くから淨瑠璃本の出版書肆として有名であつたのである。ところが前述の「役者口三味線」を出版してから、年々評判記を出版して殆ど獨占の狀態になつて了つたのである。これは他の書肆より出る評判記よりも文章挿繪等が優秀であつたためである。その繪は西川祐宣の弱年時代の筆であつて、當時西鶴本の生硬なる畫風に反して柔かな愛嬌のある描き方である。これが大いに人氣に投じたのである。

八文字屋なる書肆の主人は本名を安藤八左衞門といひ八文字舍自笑はその號である。出すところの書にはみな自作の如く自笑と署名してゐるが、實は皆江島其磧の作である。自笑は延享四年「自笑樂日記」を出版するまで多くの書を

刊行した。その子八左衛門即ち八文字舍其笑に業をつがしめ、延享四年十一月十一日八十八歳を以て歿したのである。その子孫いづれも八文字舍と號して評判記を出したがいづれもその祖には及ばなかつた。

(二) 江島其磧

其磧は通稱江島屋市郎左衛門名は宗惠、先祖代々京の京極通誓願寺前に大佛餅を賣るを業としてゐたのである。誓願寺は淨土宗の本山で本尊は春日佛師の大佛であつた。大佛餅の名はこれに因んだもの。世にもてはやされ繁昌したのであつた。然るに秀吉が六波羅の南に方廣寺を營み、大佛建立のことがあつてより、他の餅屋新たにその門前に大佛餅を賣つて榮えたので、京極通の餅屋は業を轉じて誓願寺通柳馬場に移つたのである。其磧その餅屋の後裔として生れたが、放蕩のため資産を盡して了つた。けれども文才に長じ人情に通じてゐたので、自笑は之に托して筆を執らしめたのである。其磧は又正本屋よりも依頼せられて「役者一挺鼓」といふ評判記も書いた。しかし自笑は之を喜ばなかつたので、その關係を絶たしめた。依つてやむなく正本屋は增田圓水に評判記を依頼した。圓水は「お伽人形」「好色大振袖」の著者である。かくて其磧は八文字屋專屬の作者となつたのである。

八文字屋から浮世草紙を出したはじめは

傾城色三味線　枕本五册　元祿十四年板

である。京、大阪、江戸、鄙、湊の五卷に分ち、遊女の名寄細見を各卷の始めに置き、後に遊女に關係ある短篇を附けたもので、一篇づゝ讀切り小說で頗る氣の利いたもの、役者評判記と大變體裁がよく似てゐる。

世に聞き馴れたる鶯の花に鳴くも、さのみ身をうつ程にも面白からず、只何時聞いても魂にこたへて感じ參らすは、島原の投節、吉原のつぎぶし、新町の籠節なり。艶顏を少し背けて、紅舌の動く有樣、月雪花紅葉に代へられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは、此の分里の契緣、何か此の外に又樂しみのあるべきや。江戸の散茶に戀の寄太鼓、京の引舟、難波の鹿、歌に合はせて鳴かす色絲、引く手に靡く勤め女の、品々替りし諸分を載せて、色三味線と是を名づけぬ。

これはその序文である。以て一斑をうかゞふことが出來よう。

この役者評判記のやうな體を脫して、純然たる小說體をなすに至つたのは次の諸書である。

傾城曲三味線　寶永五年
傾城傳授紙子　寶永七年
野白內證鏡　同　年
傾城禁短氣　寶永八年

これ等はいづれも評判の作であつた。しかるに書肆(八文字屋)と作者(其磧)との間に利益上の爭ひ、感情上の確執があつたと見えて、正德四年正月に至つて、其磧はその子の名義で別に本屋を開き、自ら「役者目利講」なるものを出版して、その序に於て從來のいきさつを一切ぶちまけて了つたのである。

東西々々、扨わけて御斷りを申しますは、役者評判記本は中頃出水通和泉屋八左衛門と申す草子屋板行致し、年々古板に書き加へて、或は「役者舞臺鏡」又は「棕櫚帚」などと外題を替へて出し候處に、此の「役者目利講」の作者其磧と申す好き者、三ケ津を三卷にわけ、一切づゝの序をつけ、御慰みに、上中又は白字の上など申す位

付を致して、「役者口三味線」と外題をつけ、麩屋町八文字屋八左衛門方へ遣し申せば、早速板行に致しぬ。それより毎年せがまれ、斟酌しながら年々作り遣し候處に、又二條通り正本屋九兵衛方よりも、一とせ餘儀なく頼まれ已むを得ずして、「役者一挺撥」と申すを仕遣し候。しかれども八文字屋と、正本屋兩方をかけ持に、同じ事も成り難く、正本屋は圓水と申す好き人へ頼み、八文字屋方は例年絶えず仕遣し候、五六年以來は評判の所許りは、先格を以て、其年の狂言の當りを見て、自分にも可レ成事と、評判の仕方を教へ、八左衛門に致させ、外題目錄三ケ津の序を仕遣し候。然るに此作者其磧、一所の江島屋市郎左衛門と申す新本屋と、役者評判本は向後八文字屋と相板に致させ、末々まで入魂させらるる樣にと、作者色々と申せども、八文字屋一人にしていつまでも可レ仕由申切り、不同心にて却つて江島屋方をさして、似せ本又は紛らはしき草紙など出し候と、八文字屋より斷書出し候段、作者自身に仕候ては、心外の至に存候。抑も八文字屋八左衛門と申す草子屋は何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋、同じく鶴屋は古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は京芝居の歌舞伎本を板行致候外、さのみ家名を世間に御存知にても無レ之處作者其磧、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣し、其の語り本を八文字屋へ遣し、板行させ候てより、年々の評判本は申すに及ばず、「傾城色三味線」又は「曲三味線」「禁短氣」「傳授紙子」「色情あひひいな形」「御伽曾我」の類、慰みの書數多作り遣はし候所に、各樣の御意に入り八文字屋〳〵と、是より浮世本、評判本の名取のやうに罷成候事、八文字屋の功にて候や、作者其磧の功にて候や、此段憚りながら世上の人さま御了簡被レ成可レ被レ下候。殊更作者の實名を出さず、作者八文字舍自笑と致させ出し候程の深切を顧みず、今にては八文字と名を取り申す上なれば、鳥を鷺と書いて板

行仕出し候ても、八文字屋と申す名にて賣り申すとの所存、高鳥靈きて良弓藏るとやらんにて、功を立て遣し候作者の申分も用ゐず作者一所の江島屋をけづり、一人の功に可レ仕存念、是によりて當年より江島屋方に役者評判本板行仕候。已來は毎年仕出候間御求め可レ被レ下候。八文字屋方には、今迄名を取らせ假作者の功を奪ひ、自分の功に仕度存念に有レ之候へば、右の所世間へ披露致す事氣の毒に存じ、歌舞伎本、配りかんばん等に、此方似せ本の、或は紛らはしき本のなどと小書をして、八文字屋より出し候。右の通に少しにても違ひたることをかく長々敷書き顯し、板行に可レ成ものに候や、紛らはしきと申す小書仕る手間にて、眞實紛らはしき事にて候はゞ、此長口上をとがめ申すが眞にて候。惣じて紛らはしきの似せ本のと申すは、譬へば八文字屋八郎左衛門板などと仕り出し候はゞ、紛らはしきとも可レ申候。あの方は八文字屋板、此方は江島屋板と仕候に、紛はしきと申す譯は無二御座一候。八文字屋抑もの評判本、又は當世本の作者は、其磧と申すに紛れ無レ之候を、その儘其の作者の仕りたるふりにて新作出し候八文字屋こそ紛らはしきと申すべけれ、近ごろ傍痛い穿鑿、此方のは數年お馴染の作者、御佳例の評判本、新規の作の八文字屋評判と御見まがへ不レ被レ遊、御求覽可レ被レ下候。扨京芝居の評判は、一度づゝ重分に仕候間、御神妙に御一覽奉二願上一候。追付評判初り、左樣に御心得被成ませう。

いつの世にも出版屋作者の利益爭は絶えぬものと見える。なほ八文字屋本の性質等も右の序文によりよく分つて興味の多い文字である。

正德四年の二月には、八文字屋よりは「役者色景圖」なる評判記を出し、その中で我こそ本家本元であると言つて右

の其磧の語を反駁してをる。しかしこれは單なる惡口雜言で一向に要領を得ない文字である。以後六年の間互に相爭つてゐたのであるが、自笑の方にも其磧に代るほどの筆を持つた作者無く、其磧もまたしば〳〵自分が從來八文字屋本の眞の作者であることを辯じて、趣向文句に骨を折つたのである、けれども何分新店の悲しさには、多年の老舗の八文字屋ほどの賣行はなく、互に利益のないことを悟つたのであらう、雙方から折合つて享保四年の正月に「役者金化粧」を自笑其磧の連名、八文字屋、江島屋の相板で出版し目出度和睦したのである。これ以後の八文字屋本には其磧の名をかき、又八文字屋以外の書肆(菊屋安兵衛、菱屋孫兵衛、谷村清兵衛等)からも出版したのである。其磧は元文元年六月、七十歳で歿した。

因みに自笑其磧の爭ひ中に出版したものは次の如きである。

役者反魂香	正德五年正月	江島屋板
役者我身寶	享保元年正月	同
役者賭雙六	享保二年正月	同
役者職畝(しきくがにる)	享保三年正月	同
役者懷世帶	正德五年八月	八文字屋
役者願紐(がんちゅうのおび)解	享保元年正月	同
野傾髮(のかたむけかみ)透油(すかしあぶら)	享保二年四月	同

大體自笑といふ男は厚顏な男であつて、「自笑樂日記」の序文にも

僕若かりしより、狂言綺語を草紙にあやなせること數十部といひ、又同じ書の跋にも次の如く書いてゐる。

愚老若かりしより、數多の戯書を著すこと、十萬言に過ぎたり。櫻はいつも白雪と見、紅葉は常に錦の詠め、如何に珍らしからしめんとて、夏雪を降らせ、冬雌子の物好は、化物語にひとしく、綺語の中の變體取るに足らざらんや。「樂日記」を著して、筆を止むるにつきて、はた思ひ出しぬ。昔者「禁短氣」を述べて板行し、其の後「佛原」の狂言によせて「禁短氣」の後編を書き遣けりしが、校合疎なりしを取り出し、病中に全備ならしめ、「花月輪」と題し、一年は「樂日記」を出し、一年は「花月輪」を流布せよと、遺事せしめぬるも、子孫長く御贔屓に預り、是れより年々我が志を織ぎて、彫り傳ふ新板物の、いやさかえに御求め下さるゝやうにと、一佛乘の因を便りに、大略は序に記しぬれども、「樂日記」を出したる翌年「禁短氣」の後の卷と仕立てし「花月論」を弘めよと申し置きし仔細を、各樣へ御知らせ申上度。

其磧の歿後であるところから、「禁短氣」なども自作の樣に言つてをる。其磧の歿後は多田南嶺を八文字屋附の作者となして、昔に變らず八文字舍自笑の名を以て刊行したのである。自笑自らの著作といふものは、これよりすれば殆ど無いものかと思はれる。

(三) 八文字屋本の批判

八文字屋本の名が世に喧傳せられるに至つたのは、その傾城物である。その最初の作で西〇の「一代男」にも比せられるものは、「色三味線」である。次で寶永年中に出來た「曲三味線」「野白内證鏡」「傾城禁短氣」はいづれも枕本と稱

する横本の形である。内容は西鶴の好色本同樣、遊里の内幕をうつしたものであるが、文章は西〇の樣な奇警と鋭さを欠いて、語格も正しく溫和流暢の風に富んでゐる。從つて西鶴のやうな暗示的な、氣まぐれな書方ではない。秩序整然、首尾整ひ、諄々として說き、自ら人をして肯かしめるところがある。而して人情を寫すの精緻なると、時代の風俗等の描寫に重きをおかない點は、寧ろ西鶴とは反對で近松に似てゐる。八文字屋本は寫さずして說き、描かずして論ずるの傾きがある。西鶴は衣裳、髮かたちを精確に寫し、人情の方は略筆を以て急所を强く太く書いたのである。其禍が近松の風をとつたのは芝居の關係があるからである。

又八文字屋本には西鶴の「永代藏」や「胸算用」の町人物に比すべきものもある。享保十五年の「善惡身持扇」同十八年の「商人軍配團」等はこれである。

又時代物、御家騷動、俗譯物等のつゞきものゝ作もある。この方面では赤穗義士をしぐんだ「傾城傳授紙子」を始めとして、「百姓盛衰記」「西海太平記」「當世御伽曾我」の如き作がある。俗譯物は、都の錦、西澤一風のやつたやうに、すべて古代の人物の現代化である、義經は大盡に、辨慶は幇間といふ譯である。御家騷動のものは淨瑠璃、歌舞伎と同じく、若殿の放埒のために、一家が亂れて、奸惡なる叔父が野心を抱き、惡人共が之に一味し、若殿方の忠臣は種々の困難迫害を冒して遂に目出度し目出度しに終るので、寶物の詮議が之に伴つてゐる。これ等の時代物は淨瑠璃種、歌舞伎種の流用が多い。「國姓爺明朝太平記」「大內裡大友眞鳥」が近松や出雲の作に基き、「契情お國歌舞妓」が「女歌舞妓千代の初」といふ歌舞伎狂言によつてゐる類である。外題も同樣のものがある。要するに八文字屋本中時代物は小說の價値の乏しいものである。さるに其禍の歿後はこの種の時代物ばかりが出る樣になつたのである。

なほ最後に注意すべきは、其禍が氣質物を始めたことである。西鶴の「永代藏」「武道傳來記」も一種の町人氣質、武家氣質を寫したものと見る事が出來るが、武士や町人といふよりも一層狹い特殊の範圍や人倫の一部に限られた氣質物は其禍を以て元祖とすべきである。

世間息子氣質　正德　五年
世間娘氣質　享保　二年
浮世親父氣質　享保　五年
世間手代氣質　享保十五年

等はこれである。これ等は何れも滑稽の中に敎訓を寓して、人情を盡せる面白いものである。其禍の歿後明和安永の頃に至り、永井堂龜友、增谷大梁などいふ者が盛に氣質物を書いて一時大いに流行したのであるが、何れも愚作であつて見るに足るものは極めて少く、到底其禍の氣質物とは比較すべからざるものである。

五　第一期の惰力的作者

以上述べた樣に西鶴が出て、小說の作風は一變したとはいへ、なほ第一期寬文時代以來の惰力は一朝一夕に衰へなかつた。即ちこの元祿享保時代に於ても敎訓物、軍記物、怪談物等が好色本と共に並び行はれたのである。以下之に就いて解說を試みよう。

(一) 軍記物

軍記ものが第一期に行はれたことは言ふまでもないが、「太平記」「源平盛衰記」などを主としたものが大いに行はれ、遂に辻講釋を太平記讀とまで言ふに至つたのである。かく軍記物の大いにもてあそばれたのは、單なる娯樂の具といふばかりではなく、武士が軍法を學ぶための教科書として用ひられたに因るのである。從つてこの時代のはじめ以來多く世に出た「何々評判」と稱する類の書は、すべて楠、武田等の軍法の巧拙を批判解說したものである。この頃軍記物の著者として有名な人は、寶永正德の頃京郡に出た馬場信意である。又江戸には享保の頃神田白龍子といふ人があつた。

馬場信意は號を玄隆又は柳隱子といひ、京の儒者馬場信武の子、國學を修め神道を稱へ、當時に評判の高かつた人である。祖先は甲州の馬場美濃守信房であつて、その兵法を傳へた人だといはれてゐる。その軍記物としての著述は頗る多い。次はそれである。

北國太平記　寶永四年
中國太平記　寶永八年
鎌倉源氏一統志　正德二年
義經勳功記　同　年
曾我勳功記　同五年
義貞勳功記　享保元年

北條太平記　同二年
三代記 大全 武德鎌倉舊記　同三年（八文字屋板）
日本諸家秘訣 南朝太平記　同十年
曾我物語評判　同　年
楠一代記
西國盛衰記
北陸七國志
武家勳功記

右によつて分る樣にその著書の數は非常に多い。且つその中には八文字屋から出板してゐるのがあることは注意を要する點である。

神田白龍子は名は勝久、通稱李といつてゐた。江戸の人で享保の頃神田に住んでゐた講釋師である。その著には次の如きものがある。

本朝武備志
七書俚諺抄
續七書
武道訓

武道俗說辨

太閤記大全

浪花戰記大全

右の中には單なる軍記物といはんよりはむしろ兵法を敎へんために書いたと思はれるものがある。

以上の二人が軍記物の著者であるが、當時は西鶴一派の小說に壓せられてあまり勢力はなかつたやうである。けれども後にはこれが變化して所謂實錄物といふ一群の小說となつた。

(二) 怪談物

怪談は古く「日本靈異記」「往生傳」の如き佛敎の系統をひいたものと、「剪燈新話」のやうな支那系統のものとが相交つて出來たものである。當時の怪談は必ずしも文字通りに怪談（妖怪物語）だけに限らず、種々の奇事異聞を集めたものであつて、第一期のこの道の大家であつた淺井了意は元祿のはじめ頃にはまだ生存して、「伽婢子」の續篇ともみるべき「狗張子」を最後の作として元祿四年に歿したのである。この流れを繼承して此の一流の作物を主として作りだした人は、林文會堂と青木鷺水の二人である。

林文會堂は、字は九成、通稱は九兵衛といつて、京都の本屋の主人であつて、伊藤仁齋や伊藤固庵について漢學を學んだ人である。了意に私淑してゐたと見えて、その著「狗張子」を自分の店より出板してをる。その著は次の如くである。

玉櫛笥　元祿八年

玉箒子　同九年

當世智慧かゞみ　正德二年

何れも諸國の珍事奇談を集めたものである。「玉櫛笥」「玉箒子」はいづれも了意の「狗張子」の續篇になずらへたもの、樣である。

青木鷺水も京都の人であつて、次右衛門と號して立圃門の俳人で種々の俳書を著せる外、戲作をも作つてゐる。

御伽百物語　寶永三年

近代因果物語　同四年

古今勸忍記　同五年

新玉櫛笥　同六年

文會堂も鷺水も、たゞ達意の文を書いたといふだけの人であつて、才氣は甚だ乏しい。今日でいへば新聞の三面記事程度の物にすぎない。怪談專門のこの二人の外に北條團水の「一夜船」、（後に「怪談諸國物語」と改題）都の錦の「御前お伽婢子」等はこの系統に屬するものである。

當時の怪談物は一般の風潮としてさまで物凄い感じを呼び起すものは無い。たゞ事實の怪奇であるばかりである。扱方はどこまでも話の筋を運ぶにすぎないものである。又古代の如き眞の宗敎的迷信から妖怪を信ずるといふやうなこともなくて、頗る怪談らしからざる怪談なのである。これもしかし、德川以前の因果物語と、寬政以後の怪談との

連鎖をなすものと考へる時、そこに展開の史的價値を認めることが出來るのである。明和五年に上田秋成が世に出した「雨月物語」の如きはこの系統が一層進んだものであつて、寛政以後は益々この怪談の行はれるものが多くなり、黄表紙にもとり入れられ、脚本にも侵入し、遂には鶴谷南北のやうな狂言作者も現れ、「四谷怪談」「累の怪談」のやうな逸作も作られるやうになつたのである。かういふものに至る過程として元祿時代の怪談物は注意されるべきである。

(三) 古文俗解の作者

第一期に於ては「徒然草」「伊勢物語」の諺解又はそれ等を翻案したもの等も多く出たのであるが、この第二期では、此等のものはあまり多く行はれず、之に反して古代の小説を今様に改め、當世風の浮世草紙にひきなほすことが流行したのである。これも亦現代に重きを置ける時代の風潮の然らしめたところであつて、單に古代のものをそのまゝ飜譯することにはあき足らないで、之を今様の描寫に現實化せしめなければおかなかつたのである。近松の時代物の人物が何れも現代化されて、素盞嗚尊も業平も、すべて元祿氣質化されて居るのと同一の理由に基くのである。

この古文の俗解を以て一派を立てたのは都の錦である。この人は多少學問の素養もあつて、西鶴を無學無識とのゝしり、高く自己を標榜せんとつとめた人である。併し内心ではやはり西鶴の文才に感心せないではおけなかつたものと見えて、「古今集」の序文に擬して西鶴の文才を賞讃して次の如くに言つてゐる。

憂ひがちなる秋の夕、横堀に流るゝ廛埃をば西鶴の目に錦と見まがひ、春のあした茶臼山の櫻をば雲かとおぼしける。まことに西鶴こそわけの聖なりける。西鶴なくなりて濡の文止まれり。(元祿太平記)

又同じ「元祿太平記」の役者の評には西鶴の「男色大鑑」の文をそのまゝにぬすんでゐる所がある。

都の綿は大阪に住みて通稱を宍戸與一といひて、(繪本西川東童には都錦本名宍戸與市とある)本名を八田光風と稱した。二十一歳の時京都に上つて、伊藤仁齋の門に入つて經書の講義をきゝ、又北村季吟、烏丸資慶につきて歌學を修め、和漢の書に目をさらすこと六年に亘つた。ところが一朝烏原通ひを始めて、叔父の持家が三條通繩手にあつたのを賣りとばして費消し、二十七歳の時新黒谷の門前にひきこもり、山科の大宅寺の月坡和尚に參禪して鐵舟と名を改め、口を糊するために小説を作りて暮すこと二年六ケ月、のち江戸に出て身を立てんと友人の紹介狀を持つ因幡守元祿十六年四月江戸に下り、紹介された人を尋ねたところ、火災のために行方不明となつて分らなかつたので大にしてゐたのである。かくて流浪中無宿改めの役人に咎められてその冬の十月、薩摩の山ケ野の金山に追放された。而して遂にそこで死んだのである。

「元祿太平記」といふ書は序文に「元祿十四己の冬の仲、攝陽の住梅薗堂」とのみあつて匿名であるけれども、内容より推す時は都の錦の作に相違ないと思はれる。この書は一名を「諸藝太平記」とも言つて、元祿時代の種々の世相をうつしてゐる。始め伏見の乘合船に於ける京都大阪の書肆の問答より筆を起して、當時の小説家のことを述べ、西鶴を貶して都の錦を賞揚し、後役者の話で文を結んでゐる。その都の錦を賞揚した點、故事出典の多き點、文章の筆癖などより推して、たしかに都の錦の作に相違なしと思はれるのである。由來この人は盛んに自己吹聽をやる人で

自分の身上ばなしを著作中にする人である。例へば「風流日本莊子」の中にも

近き元祿卯の年、大阪新町に於て、京屋のお琴といふよねは、松の位の若緑、常盤の色の名に高き、天人の遙子とよばゝるほどの器量、宍戸與一が假名文、菱川の浮世繪も及ばぬ。

などと虫のよい事をいつてをる。「元祿太平記」の中にも自分の作を褒めたところが多い。又「御前お伽婢子」の中にも

淸白節義の士を抱ゆるに、大分の知行を以て呼ぶと雖も得べからず、古への伊尹、今の伊藤維禎(仁齋)これなり。忠貞の士を求むるに刑罰を以ておびやかすとも得る事能はず、古への伯夷、當世は宍戸光風が如きこれなり。、

などとおほびらに自慢を言つてゐる節がある。

彼の著作をあげてみれば次の諸書である。

東海道敵討	元祿曾我物語	元祿十五年正月
	御前お伽婢子	同　十五年正月
	風流神代卷	同　十五年正月
	風流日本莊子	同　十五年(?)
	沖津白波	同　十五年五月
	風流源氏物語	同　十六年正月

「元祿曾我物語」は京都の河勝板であつて、一名を「東海道敵討」ともいふ。この內容となつてゐる事實は、元祿十四年五月九日に、伊勢の鈴山で石井源藏同じく半藏といふ兄弟が親の仇赤堀源五右衛門を討つた事件である。材料は殺伐なものであるけれども、本文に關係のない遊廓を委しく寫したところは、流石に元祿式である。西澤一風の跋文がついてゐる。

「御前お伽婢子」は了意の「伽婢子」に倣つて作つたものであつて、佛敎臭味の因果物語を集めたものである。而してその終りに假名文の因つて來るところの古いことをのべ、從來の作品に目剛れたる目先をかへて、諸國の珍談を集めて出板する由を記し、軟かなる西鶴物に對してかゝる硬派の作品を出すのであると述べてゐる。「雨月物語」中の夢應の鯉魚は旣にこの書にも出て居る。

「風流神代卷」は日本書紀の神代卷を俗解し今樣化し元祿風にしたものである。此書の跋に元祿十四年三月より大阪に住み翌春京都へ歸る由を記してゐるのも、元祿太平記の序に「攝陽の住」とあるに適合する。「風流日本莊子」では友部彌市といふ主人公が放蕩の極、家を追出され、俄坊主となつても持前のへらず口をたゝき、神儒佛の引事で太平樂を並べてゐる。この作者が彼自身の學問見識を表すと共に、最も多く自己の境遇を語つてゐる作といふべきである。國書刊行會の「近代文藝叢書」の中に收められてゐる。

「風流源氏物語」は「源氏物語」の桐壺の卷から帚木の上半迄を今風に俗解したものである。俗解とはいふものゝ「源氏物語」には無い勝手なことを書き込み、ことさらに猥褻の文句を挿んだところが多い。王朝の貴公子である源氏の君も、この書では「當世はやる吉岡に大紋つけて、淺黃裏、繻子のかへしの二重帶、鬢付とろりと刷毛長に」元

祿風の大盡となつてゐる。

以上この人の作を通觀するに、その出板は元祿十五年十六年のものに限られて後のものが無い。これよりするも京には居なくて遠鄙に身をかくしたものと思はれる。彼は相當の和漢學に對する素養もあつて、文章も流暢平明で往々七五調のかけ詞などを用ひた道行振など交へてゐるが西鶴のやうに俳諧趣味がある譯でもなく、又新文體といふでもない。故事詩歌の引用がうるさくて淺だ衒學的である。俗語體の文中に和漢のひき事を加へ、且つ古語には自ら割註を施してゐる。これ等のことは西鶴等に對する一個の學問自慢のくせとも見ることが出來るが、又一方よりすれば、通俗趣味の大阪に對する京都の好古趣味を表せる一種反抗の表白とも見られのである。從つて西鶴と都の錦との差は、一面大阪と京都との差と見てよい。勿論西鶴と拮抗し得べき程の文才詩才は持つてをらないのであるが、一風變つた野心家としてやゝ風來山人などと似通つた點もあるが、風來程の鋭才はない。

都の錦の俗譯風を學べるものに隱士梅翁といふ人がある。洛陽山人、容膝軒の別號もある。

若草源氏物語　寶永四年
雛鶴源氏物語　同五年
紅白源氏物語　同六年
俗解源氏物語　同七年

これが梅翁の俗譯物である。

「若草源氏物語」は梅翁が都の錦について始めた「源氏物語」の俗譯の最初のものである。帚木の巻の末から夕顏の巻までを譯したものである。

「雛鶴源氏物語」は前著について若紫の巻から末摘花の巻までである。

「紅白源氏物語」は紅葉賀の巻と花の宴の巻とである。

「俗解源氏物語」は都の錦が「風流源氏物語」で俗解した巻々、即ち桐壺の巻から帚木の巻の半までを俗解したものである。初めは都の錦の後を受けて譯し出したが、後には一手で揃へて見たくなつたものと見える。

以上梅翁の俗譯物の源氏物語は、所々に猥褻の句があつて決して忠實なる譯といふことは出來ないのである。梅翁といふ人は、京都の人らしく見せ、書物も京都より出板してゐるが、その挿繪はいづれも江戸の奥村政信の筆である。奥村政信も梅翁と號したことがあり、繪の外に作もしたことがあるから、こゝにいふ梅翁も或はこの浮世繪師の奥村政信と同人であるかも知れない。疑を存する次第である。

なほこの類の源氏を譯したものには正德四年出板の「新橋姫物語」といふのがある。宇治十帖を全部俗譯したものであつて、作者はきし女とあつて誰か分らない。後享保十六年、再板の時には題を改めて「風流都の巽」といつてゐる。享保六年には「紫文あまのさへづり」なるものが出板された。これは甲州の士なる多賀半七といふ人の作であつて、「源氏物語」の桐壺、帚木、空蟬の三巻を譯したものであつて、俗語體ではあるけれども、眞面目な逐語譯ともいふべきものである。

かくの如く「源氏物語」をもとゝした俗譯も、第一期にては「をさな源氏」「十帖源氏」などは原作の筋書で、まづめに訓蒙を目的としたものであつたが、第二期即ち元祿時代のものになつては、皆當世風にひきなほされ、殊更好

色本めかされた。更に進んで文化文政時代に至り、種彦の「田舍源氏」になると、却つて足利時代のことゝなし、情趣を主とした平安朝の物語を變じてこれに寓するに勸善懲惡主義を以てするに至つたのである。これは何れも時代思潮といふものと文學の關係の密接であることを示すものである。

(四) 錦文流

都の錦と同時に大阪に錦文流といふ人があつた。西澤一風と同じく小說と淨瑠璃の兼作をした人である。錦文流の傳記は明らかでない。錦頂子とも號して大阪の座摩神社の近くに住居して俳諧の前句附の點者をしてをつたといふことだけしか分つてゐない。「元祿太平記」に島文柳といつてゐるから、本姓は島か島に近いものであつたかと思はれる。淨瑠璃の作には元祿十二年に「本海道虎が石」(竹本座)がある。寶永三年の「男色加茂侍」(豐竹座)、正德三年の「仁德天皇萬年車」(豐竹座)、享保二年の「西行法師曇染櫻」(豐竹座)がある。近松と同時代の作者である。從つて作風も初期の傾向を帶びてをるのである。

彼の小說は當時の巷談街說を綴つたもので一篇を通じた筋のある作品を特色とする。その作は次の如きものである。

棠大門屋敷	寶永二年	
當世乙女織	同	三年正月
熊谷女編笠	同	三年九月

本朝諸士百家記	同	六年
徒然時勢粧	享保	六年

「棠大門屋敷」は有名なる大阪の富豪淀屋辰五郎のことを書いたものである。同じ淀屋辰五郎を材料としたものに近松の淨瑠璃「淀鯉出世瀧德」といふのがある。この近松のは元祿十三年の作となつてゐるけれども、文中に現れてゐる文句より見れば誤りであつて、寶永五六年頃の作と鑑定される。(近松全集第八卷解題參照) 錦文流の作と近松のとは共に巷談街說を材料にして作つたもので踏襲の跡はない。この淀屋辰五郎の實說は「元正間記」に詳しく、八文字屋自笑の「風流曲三味線」(寶永七年刊)、北條團水の「日本新永代藏」(正德三年刊卷之三、十二の銀藏に鷄の空音)及び自笑の「傾城籠昭君」(享保三年刊)はこれである。近時三田村鳶魚氏の「芝居ばなし」第二編に淀屋辰五郎といふ詳しい考證がある。それに據ると、淀屋事件は寶永二年五月十六日に辰五郎以下が追放になり、八月に闕所の跡始末がつき、三年十一月に五人の者が獄門に掛り、辰五郎は享保二年十二月二十一日、三十歲で八幡に歿した。文流の作では淀屋辰五郎を江戸屋初五郎としてゐる。初五郎は家督を受けて興茂三郎と名乘り、遊興に耽つて家が絕えた。こゝに至つたのは、家に傳へた金鷄を初め、諸々の寶物が庫中に秘められてゐるに不平を懷き、こゝを遁れ出ようとする不思議の精力と、淀屋のために非常の死をとげた茶道珍齋が死靈との所爲としてある。

「當世乙女織」は種々の好色話をとり集めたもの、「熊谷女編笠」は、當時あつた事實を多少作りかへたものである。即ち寶永三年六月京の堀河下立賣にあつた妻仇討である。この事件は當時有名であつたので、文流の外に、同年八月に洛散人森本東烏といふ人の「京縫鎖帷子」あり、淨瑠璃では寶永四年二月近松の「堀河浪の藪」に作られてを

る。熊谷女編笠といふ題名は二人の女が熊谷笠をかぶつて敵を窺つたといふところに出てゐる。

「本朝諸士百家記」は西鶴の「武道傳來記」の類であつて、當時の武家に關した多くの話を集めたもので、武士道の墮落した方面を寫したものである。八の卷にある花房奎之丞短慮の事は、尾崎紅葉の作「東西短慮の及」に取られてゐるものである。

「徒然時勢粧」は名の示す如く「徒然草」の文に擬したものであつて、隨筆や短篇をとりまぜ、「徒然草」と同樣二百四十三段に分けて居る。その序文に「于時享保第五之庚子皐月上旬、座摩の宮の片邊に幽居の地を占むる事あり、爰において耄昧筆に狂ふ」とあつて、此後著作のない所を見れば久しからずして死んだのであらう。一風程多數の作品はないが、又一風程の駄作もない。

(五) 西澤一風

西澤一風は正本屋山本九左衛門といつた人である。小說の序などには西澤朝義、又與志とのみ書いてをる。一風は一風の孫であつて、正本屋次兵衛といつた人で寧ろ歌舞妓の作者である。

一風は正本屋（淨瑠璃出板書肆）であつて自作の淨瑠璃も少くはないのである。彼の小說の作は次の如きものである。

新色五卷書　元祿十一年
御前義經記　同　十三年
寬濶曾我物語　同　十四年
女大名丹前能　同　十五年
風流今平家　同　十六年
茶傾腹立顏　寶永五年頃
風流御前二代曾我　同　六年
後室色縮緬（一名色縮緬百人後家）享保三年
亂脛三本鎗　同　三年
熊坂今物語　同　十四年

「新色五卷書」は一卷一話であつて、色道のいろいろの話がすべて五つある。文章は西鶴を模し、會話には近松の淨瑠璃の趣をそなへてゐる。醜惡猥雜實にいとふべきものである。單に巷談街說にすぎないものである。

「御前義經記」この書に至つて、一風は卷頭に序凡例をかいて發端を明かにし、物語を綴るに至つた道筋をのべてゐる。これは八文字屋の芝居評判記の特色を摸したものである。內容は義經記を今風にかき改めたものである。

「寬濶曾我物語」は「曾我物語」を通俗にかき改めたにすぎないもので、今樣化したところはない。

「女大名丹前能」は義經にも曾我にも全く關係の無いもので、九州の磯野重右衛門といふもの丶女、都に上るに男の姿となり、後江戶に至り光尾丹前之助と結婚した話である。

「風流今平家」は平家物語を今風に改め、全く町人のこと丶し、町人が贅澤のために滅亡することを寫したもので

ある。「町人身の手かゞみ」といふ別名を持つてゐるところでもその行き方が知れよう。

「茶傾腹立顔」は茶屋、傾城屋の内幕をあらはに寫したもので、内容からいふと後に行はれた蒟蒻本のもとゝなるべきものである。

「風流御前二代曾我」は「曾我物語」を町人に書きあらためたもので、「風流今平家」と同様の行き方をしたものである。御前といふ名稱のついてゐるのは、序や凡例に於て君の御前でお伽話をなすやうに記したところからつけたものである。後の八文字屋本などに曾我ものや義經ものが多く行はれるに至つたのはこれ等がその先驅をなしたのであらうと言はれてゐる。

「後宝色縮緬」は一風中の佳作である。いろ〳〵な後家の物語を集めたもので、その頃行はれた八文字屋の氣質もの〻影響を受けてをる樣である。

「亂歴三本鎗」二册づつ一篇三個の妻敵討の話を集めたもので六册ある。第三第四の兩册は美作の津山で人妻を盗んで大阪に隱れ住んだ者が、田邊屋橋で討たれた話であつて、近松の「鎗權三重帷子」と同じ話である。

「熊坂今物語」は熊坂三郎、同四郎兄弟の惡漢を兄の仇とねらつて博多でうちはたした話である。序によると、片岡仁左衛門が芝居に演じ大當をとつた狂言であるのを、小説につゞつたとの事である。

當時の小説に、好色以外の題目でよくとられたのは敵討、妻敵討の話である。わけても元祿十五年の赤穗義士の復讐は淨瑠璃は勿論小説にも殊に多い。以下はその主なるものである。

傾城武道樓　實永二年　西澤一風作
傾城播磨石　同四年
傾城傳受紙子　同七年　八文字屋自笑
忠義武道播磨石　同八年
高名太平記　不明　青木鷺水
近士武道三國志　正德二年
當世智慧鑑　同年　林文會堂
今川當世狀　同三年
今川一睡記　同三年
西海太平記　同年　（八文字屋板）
新小夜嵐　同五年
忠臣略太平記　年月不詳　（江島屋板）
忠義太平記大全　享保二年

六　淨瑠璃

(一)　淨瑠璃の起原

淨瑠璃の起原に就いては詳かなことが分らない。淨瑠璃の名稱は淨瑠璃姫の物語を内容とした「淨瑠璃物語」一名

「十二段草子」を語るといふ所から來てゐる。而してこの「淨瑠璃物語」又は「十二段草子」の作者は小野お通であると普通に言はれてゐる。「昔々物語」に曰く、

昔は淨瑠璃、小歌、說經、かやうの音曲、近年とは替りたり。先づ淨瑠璃の初めは、織田信長公以ての外大病を煩ひ給ひ、病氣本復といへども大病の跡故、大きに草臥れ夜も寢かね給ひ、寂しがり、肥立ちかね給ふ。お側さらずの伽に城玄勾當、角都勾當、小野お通といふ女、此の三人晝夜少しも側を離れず、其の外近習若侍大勢晝夜相詰め伽仕り、色々の物語申すと雖も毎日毎夜の事故咄も絶え寂しがり給ふ。其の時城玄、角都一同に申すには、お通は能書の文者に御座候なれば、何ぞ面白き文を作り讀みて御耳に入れ候はゞ、御慰みにも可成と申し上げる。信長則ちお通に被仰付、お通さま〳〵辭退申しけれど再三御所望故、お通是非なく筆取つて何をか書き緩らんと色々思案し、源義經遮那王殿と申す時あづまへ下り給ふに、三河國矢矧の宿、長者が娘淨瑠璃と申す女に戯れ給ふ事、書き緩り作りすまして讀み聞かせ申す、殊之外面白く思ひ給ふ。城玄、角都を初め近習に有りあふ小姓若侍、耳をすまし聽聞し、興に入り、皆々感を催すにつき、毎日毎夜右の一卷繰返し〳〵讀む故飽き給ひ聞く人も眠り出でたり。其の時城玄、角都申すは、同じ事をば讀む計りにては、如何の義に候間、是れに節をつけて歌ひ候はゞ可然と申す。信長は尤もに候、誰か節つけさせんと思召す處に、此の頃御慰みの御伽御領分より出でたる丹後七郎左衞門橋本筑後と云ふ頓作第一の利發者、殊に聲わざ得たるもの兩人ともに詰め罷在り、諸事拍子方氣輕き者なりしを、七郎左衞門節出來、是れは名は何とつけ可申と伺ふ。淨瑠璃御前の事を作りたることとなれば、やはり淨瑠璃と名付べしと也、これ淨瑠璃の初めなり。

しかしこの說は容易に信ぜられない。右の說でみればお通は信長の侍女といふことになるが、「江戸名所咄」「女學範」は秀吉の侍女とする說である。又淀君の侍女であるといひ、或は後光明天皇の女御である新上東門院に仕へた女であるともいひ諸說紛々として歸するところを知らない。これに對して柳亭種彦はその隨筆「還魂紙料」にこの信長侍女說を駁してゐる。

柴屋軒宗長の「宗長日記」享祿四年の條に次の如く出てゐる。

八月十五夜、九月十三日夜は都鄙いづくも月にめで遊び、芋豆を手向とて、賤の男賤の女も月見るといふ。爰に八旬有餘の老拙夕まどひして目ざめ起きて、今宵を名月にやと思ひ出て、南の緣の柱にとばかり背中を休めついゐ侍る。折しも範甫老人豆に德裏をそへ持たせ送らる。

こよひ月まめに見よとやことたらぬいもこひしらの一盃と知れ

旅宿たすかる一兩輩人を遣はし、小座頭あるに淨瑠璃うたはせ、興じて一盃に及ぶ。

といふ語がある。これでみると享祿の頃はすでに駿河の宇津の山のことである。（この記事は駿河の宇津の山といふ田舍までも淨瑠璃の流行してゐたことが知れるのである。

又天文九年の「守武千句」の中にも

いとゞだに座頭まがひの杖つきの　（前句）
淨瑠璃語れともしびのもと　（附句）
こよひはや時は丑若ふけはてて　（又附）

といふ句がある。お通の時代を最も古く見たのは信長の侍女といふ説である。信長は天文元年の生れで享祿四年といふ年はその前年であるから、「宗長日記」に從へば信長の生前既に行はれてゐたといふことになる。「守武千句」の天文九年は信長が僅かに九歳であるから、九歳の子供の病氣を慰めるのにかゝる文章でもあるまいと思はれるから、かたゝこの物語がお通の作であつて、且つ淨瑠璃の起原であらうといふ説はなりたゝないことゝなる。これが大體定説となつてゐるところが明治になつて大槻如電氏は、淨瑠璃物語には二種あつて、お通は古き物語を改作したものであらうと言つてゐるけれども、これは全くの想像説であつて、この物語には種々の異本があつて、それは必ずしもお通の改作とは斷定出來ない。古い寫本の小異同のあることは普通のことである。今日の淨瑠璃が果して淨瑠璃物語に始まつたものであるかどうかは疑問であると思ふ。「守武千句」にも上述の通り「時は丑若」とあるから、淨瑠璃姫に關係のあるものには相違なからうが、「十二段草子」と同一のものであるかどうかは問題である。

お通のことは「川岡雜談」「望海毎談」等にも見えてゐる。「川岡雜談」によれば「お通が、秀吉の侍女であるといつたり信長公の側女であるといつたりするのは何れも虚説で年代が合はない。お通は長澤の松平上州侯の老臣小野能登守が養女であつて、實父は松平隼州侯の老臣長沼吉兵衛である。お通は池田家の家臣塙川志摩守の妻となつて一女をあげたが、故あつて離別し、女子を連れて母子共に後光明院の女御新上東門院に仕へた」といふことになつてゐる。又信州松代の眞田家の支流で同家の家臣である眞田氏の傳へてゐる「金葉和歌集」の寫本の奥書によれば、お通は美濃國本巢郡北方の莊小野正秀の女といふことなつてゐる。又同家に傳へられてゐる「天室號記」によればお通は小野正秀の女で渡瀬某に嫁し、一女を生んだことになつてゐる。（「近代日本文學大系」、第二卷、「古淨瑠璃及舞の本集」の笹川博士解題參照）

「淨瑠璃物語」の板本にも種々あつて、これに節がつけられたのは何時の頃よりであるかよくは分らない。「色道大鑑」では文祿三年説をとつてゐるが確證はない。

（二）淨瑠璃の發達とその傳統

淨瑠璃は最初は曲節も單純幼稚で、扇で拍子をとつて語つたもので、樂器を用ひなかつたことは、恰も琵琶の伴奏を伴はなかつた平家と同樣のものであつた。「鶏鶏が杣」の序文にも次の如く見えてゐる。

淨瑠璃はじまりて百十餘年、瀧野澤住兩檢校平家に精しく、琵琶の妙手たりしより「淨瑠璃物語」といふ雙紙をつゞりなほして、藥師の十二神をかたどり、十二段といふ節を語り出せり。其の時は三味線にあはすると云ふこともなく、扇を開き、左に持ち、右の手の爪先にて骨と地紙とを搔き鳴らして、色々の拍子を取りたる事なり。

その曲節は平曲に似て素朴なものであつたらうと思はれる。語るものは、座頭と稱する盲人で、小屋がけして語るか、酒宴の席へ招かれて語るか、又は驛路などを語り歩いたものらしい。その遺風は後年になるまで仙臺淨瑠璃、奥淨瑠璃と稱せられて田舍にも殘つてゐたものである。然るに三味線が行はれるに及んで、之に合せて語るやうになり大に世に流行するに至つたのである。三味線は外來の樂器で、一般の説では、永祿年中蛇皮線が琉球から堺港に渡り、この地の琵琶法師である中小路といふものが改作して今日のやうなものにしたのだらうといふことである。渡來

の年代には他に女祿說もあつてはつきり分らない。（糸竹初心集」「糸竹大全」「竹豐故事」「世事百談」「三弦考」「本朝世事談綺」等參照。天文中既に遊女の手に弄ばれてをつたことは「室町殿日記」によりても分るのである）。慶長の頃堺の人で琵琶の名手である澤住檢校なるものが、淨瑠璃に合せて三味線を彈き始めて益々世に行はれるに至つたのである。而してたとへどんな物語でも節をつけて三味線に合せて語るものをすべて淨瑠璃を語ると稱し、あまねく音曲の名となつたのである。その頃の三味線は今日の樣に手のこんだものではなくて、平家琵琶の樣に簡單で又語る方の節も平家をすこしやはらげたやうなものであつた。（文祿三年京都の人瀧野勾當によつて、平曲風の曲節が工夫されたとは「色道大鑑」に記すところである。）澤住檢校と同時代に瀧野檢校といふ有名な人があつた。この人について京都の目貫屋長三郎が學んで、西宮の傀儡師（人形廻しのこと）正田某を語らつて、始めて淨瑠璃に合せて人形をあやつることを始めた。これ操淨瑠璃のはじめである。（瀧野の門人次郎兵衛が、監物某と共に引田と謀つて操人形に合せたといふ說もある。）

この頃は女淨瑠璃語りがあつて、六字南無衞門、左門、よしかた等いふ女太夫が四條磧で語つたのである。ところが一方女歌舞伎の禁止と共に淨瑠璃の女太夫も禁ぜられて了つたのである。これ等の人々の語つたものは幸若舞の曲である。曾我、高館、屋島、御伽草子の文正草子、鉢かづき姫、酒顚童子、梵天國等であつた。その中ことに梵天國は最も盛んに行はれていつでも最後は梵天國を語るのを例としたのである。これより物の終りを梵天國といふに至つたのである。梵天國はめでたい話であつて一種の英雄傳說である。始めは淨瑠璃のために特に作つたものはなくて、有合のものを語つたのである。又熊野本地、阿彌陀本地などといふ神佛の由來を說いた說經の正本をも採用したのである。しかしこれ等のものは皆在來聞き馴れたものであつて珍らしくないといふので、新曲を創作するに至つたのである。「阿彌陀のむねわり」といふのは六字南無衞門の作であるといふ。恰も說經節の樣なものである。

淨瑠璃は最初京都に行はれたのであるが、この地は元來保守主義の地であつて、從來より行はれて居つた說經節、祭文等の勢力が盛んであつて、十分に新しい淨瑠璃が手足を伸ばして發達することが出來なかつた。從つてかうした妨げのない新開地の江戸にその發達を見るに至つたのである。

江戸淨瑠璃の開祖は薩摩淨雲といふ人である。この人も堺の出であつてもとは虎屋次郎右衞門といつた町人である。これが後に薩摩太夫といひ剃髮して淨雲といつたのである。この人は寬永正保頃の人であつて、京都で澤住檢校に學び江戸に下つたのである。その頃中橋の廣小路は竹藪であつたのを拓いて芝居小屋を建てた。ところが島津侯が外出の途中この人形芝居を見て大に興を催し、自分の屋敷によびよせて演ぜしめたりした。島津侯の保護によつて土偶を木偶に改め紙の幕を紫の絹の幕とするに至り、自らも薩摩太夫と改名したのである。寬永十二年に紫幕に十文字の紋をつけ、人形の衣裳も頗る華美なものを用ふるに至つたので、幕府は之を禁止し、薩摩太夫に禁錮を命じた。しかし流行の勢は止め難く、禁止もゆるみ次第に盛んとなつて來たのである。淨雲の語つた曲は多くは北條官內の作である。宮內はもと神職であつて浪人したとも、武家の陪臣で浪人したとも言はれてゐる。江戸では淨雲以來寬永正德の頃までも淨瑠璃は久しい間六段ものであつた。これは例の十二段草子を折半したものだと思はれる。京都では井上播磨なるもの五段淨瑠璃を始めた。これは寬文の始頃のことである。これ以來京阪淨瑠璃は五段を普通とするに至つ

たのである。

薩摩淨雲の門人には杉山丹後掾、櫻井丹波掾、虎屋源太夫等があつて正保慶安の頃有名であつた。これに長門太夫を加へて江戸に於ける淨雲門下の四天王と稱へたことが「竹豊故事」に見えてゐる。

杉山丹後掾の子に肥前掾藤原清政といふ人があつた。その肥前掾の弟子に江戸半太夫といふ者があつた。半太夫はもと說經祭文を學んでゐたのであるが、肥前掾についてから肥前節をやはらげて半太夫節、一名江戸節なるものを始めた。それが貞享元祿の頃から大いに世にもてはやされたのである。その語る詞章は比較的に典雅優麗であつたゝめに、上方人の好みに合して上方でも元祿寶永の頃からもてはやされたのである。その當時上方で用ひられた酒席の淨瑠璃は、多く義太夫物のやつしであつたが、その品位に缺けてゐる點をこの半太夫節が補つたのである。元祿の「松の葉」、寶永の「著綠」「松の落葉」の三書は上方に行はれた各種の俗謠類を集めた代表集であるが、この三書中吾妻淨瑠璃に關するものは、半太夫節が大多數を占めてゐるのである。半太夫節の語り物は、謠ひ物に近いものゝ外、翁式三番叟、蓬萊のやうな祝言物、歌舞伎淨瑠璃、操淨瑠璃の景事や道行等合せて九十篇ほど行はれた。詞章には古典味があつて、流暢ではあるが、强いところがない。いづれも端物である。試みに次の詞章を見ればそれが肯けよう。

いつもきく蘆の里とおもへども、昨日にかはる風のおと、身にしむことのあぢきなく、野末の蟲のすだくなる、千草の花とあだくらべ、涙の露はしぐれつゝ、空行く月のかげうとく、いとゞ思ひに浮き沈む、かりねの

夢もむすばれず、砧の音にさよふくる、時しとて秋を告げくるかりがねの、よすがなきこそかこたれて、あやなく殘る袖の香に、しばし忘るゝうさつらさ、萱が軒端もやゝさむく、籬の菊もみだれ亂れておく露霜の、猶ものさびし秋の色。（秋の色）

次いで半太夫の門人十寸見（ますみ）河東なるものが、半太夫節を變じて河東節を起し、享保の頃から世にもてはやされて江戸の名物になつた。河東本姓は伊藤で、名は藤十郎、日本橋の豪商であつたが、遊蕩のために破產し半太夫の門に入つたのである。享保十年四十二歲で歿した。門人には夕丈・河丈等があつて、師の半太夫節を江戸の名物たらしめたのである。河東節の曲節は全く半太夫節をうけついだもので、纖巧婉柔、絃にのせるにも中々むつかしいものらしい。又その詞章が歌謠らしい點でも淨瑠璃藉派中の第一であらう。且つ文句には難解で俳諧式のところがあつて、文理の整はぬものも多い。從つて平明である義太夫物に馴れた上方人には喜ばれなかつたのである。河東節の詞章は大抵端物一段物ばかりで六段淨瑠璃を全篇語るといふことはなかつた。これは酒席宴會等の座敷淨瑠璃としては尤もなことであつて、この傾向は半太夫節にも現れてゐるのである。（詳しくは佐々醒雪博士著「俗曲評釋」河東の卷の河東總說を參照）

春霞立てるやいづこ、三吉野の山口三浦うら〳〵と、曙出づる日の初め、寢ぬに眼覺す初買の、乘り初めよしと乘り初むる、船は何船寶船、長き夜のとをの、眠のみなめざめ、浪乘り船の音のよき、初清掻きに響くなる、初夜は上野か淺草か、遠寺の鐘の聲つれて、瀟湘の夜の雪、拂ひもあへず、都鳥、橋場、唐崎、待乳山、鳴立つ澤か道哲の、人目の關の許しなく、傘の雫にそば濡れて、雨の蓑輪の冴えかへる、なぜ助樣、初春にはち卷

ちやゑ、鉢卷の御不審か。この鉢卷は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫の初元結の卷き染めや、初冠ぞ若松の松の刷毛先透き額。智惠もきじやうも身代も、おかつたるいの卷物も、今夜の雪と同じこと、堤八丁草そよぐ、草に音せぬ塗り鼻緒、一つ印籠一つ前、二つ廻りの雲の帶、富士と筑波の山あひの、袖なり床し君床し。君ならく。しんぞ命も總角の、これ助六が前渡り、風情なりける次第なり。（助六）

河東節の淨瑠璃は竹婦人（俳人岩本乾什、一說には乾什の門人で、吉原の娼家の主人竹島正朔ともいふ）の作が多い。

櫻井丹波掾正信は、はじめ和泉太夫と稱し、勇力のあるに任せて、淨瑠璃も強きことを好んで、鐵棒の二尺ほどなのを持つて拍子をとつたといふことである。江戸の堺町に操劇を興行した。その子の和泉太夫も亦強いことを好んで人形の首を拔打にしたり、たゝきつぶしたり隨分亂暴なことをやつたものである。この人は他人と喧嘩をしてその相手を殺したがために遂に死刑に處せられた。この親子兩人の淨瑠璃を普通に金平淨瑠璃と稱するのである。かく稱せらるゝ所以は、坂田金時の子の金平（假空の人物である）、渡邊綱の子の武綱といふが如き猛勇なる者が、猛獸惡魔を退治することを書き綴つた荒唐無稽な豪傑武勇譚を語つたからである。これ等は朝比奈、辨慶などは片腕にも足らぬ強いことづくめの極めて幼稚な作であるけれども、當時は戰國の世を去ること遠からず、武勇を喜ぶ江戸つ子の好みに投じて非常に行はれて、享保の頃までも、長く繪入本に綴られて兒童の弄物となり、又後々までも種々のものゝ名に強さ辛さを表す語として金平といふ語が用ひられた。「金平牛蒡」「金平たばこ」「金平足袋」の名稱はこれである。市川團十郎の荒事も金平節の人形を學んだのである。この金平淨瑠璃はすべて軍記物仕立に作られてゐて、文章も曲節音調も殺伐の一點張である。その作者は岡清兵衛、四野宮彌四郎などいふものである。」清兵衛は記憶力の强い人であつて、「太平記」「盛衰記」などを暗誦し、儒佛歌道にも多少の心得があつた人で、貞享年中に歿した。金平淨瑠璃中「金平化粧問答」「金平兜論」「金平地獄めぐり」「日本大王」等には岡清兵衛の署名がある。四野宮彌四郎も同時代の人で「四天王」といふ淨瑠璃に署名をしてゐる。

「江戸名所鑑」といふ本には次の如く記されてゐる。

和泉太夫が淨瑠璃は岡清兵衛と云ふもの作る。いつの程にか金時の子をきんぴらなりと云ひ弘め、渡邊が子をたけつなといひはやしてより、昔語りに云ひ傳へたる辨慶時致朝比奈などは、彼の金平が片手にも足らぬ樣に聞えければ、怪力亂神を好むをのこどもは、金平を語るを聞いては、そばにて拳を握り牙を噛みて喜ぶ程に、金平といふ事を三才の童までも知りて日本國へ弘まりたり。彼の金平作りの清兵衛は生まれつき才發にて物覺えよく、太平記、盛衰記、吾妻鏡などをそらに覺え、儒釋歌道をも少しづゝは試みければ、古事來歷を引くことを得るものなりとかや。

この金平節の流行は上方にまで及んで、大阪の佛藤出羽掾の芝居、京都の虎屋喜太夫の芝居なども、金平物を興行し、井上播磨掾も金平風を加味したのである。金平節の正本には次の如きものがある。

金平法問評
金平天狗問答

、金平兜論
金平黒熊
金平千人切
金平大酒論
金平最期
、金平化粧問答
公平誕生記
公平化生論
公平劍のりつくわ
渡邊岩石割
源氏の由來
四天王高名物語
四天王太田合戰
四天王武者修業
綱金時最後
頼光勇力譚

「聲曲類纂」には「享保の頃、『金平最期』と題し、金平死して地獄廻りせし事を綴りしより、評判あしくすたりしを、又『金平蘇生』と作り直してより、再び流行しけるとかや」とある。かくて享保の頃までは細々とつゞいてゐたのであるが、寶永の始め頃から下火になつてその後は行はれなくなつた。

この金平節が衰ふるに當り、之に代つて江戸に盛んになつたのは土佐節である。これは淨雲の子薩摩次郎右衛門の弟子土佐少掾橘正勝の語つた節であつて、延寶天和の頃から漸く世に行はれるに至つた。物語風の極めて平板なものであるが、金平節とちがつて大いに柔味の加はつたのは、時代の影響とおぼしく、これが金平節に代つて盛んになり、義太夫節が大阪に流行せし頃專ら江戸に行はれたのであるが、半太夫節や河東節が起るに至つてすたれてしまつた。

「源を京都に發せる淨瑠璃は分れて二流となり、一は東して江戸に入り淨雲以後滔々の勢をなしたに反し、一は京阪に止まりて微々として振はず、說經祭文にその所を讓つてゐたのであるが、寛文の頃江戸から淨雲の門人虎屋源太夫が上京してより、上方にも淨瑠璃が再び流行して、これが常芝居も出來る樣になつたのである。これより東西相應じてその特色を發揮し、淨瑠璃の盛大を來したのである。」

源太夫の門下に伊勢島宮内、山本土佐掾、井上播磨掾等があつた。宮内の伊勢島節、土佐掾の角太夫節が共に京都

に行はれた。土佐掾と共に上方淨瑠璃の開祖ともいはれる井上播磨掾は、京都の人であつて、市郎兵衛と稱して聲音遒しくて謠に長じ、江戸萬歳節を折衷して自ら播磨節の一流を立て、大阪に下り寛文の頃から世に流行した。貞享二年五十四歳で歿した。淨雲が江戸に淨瑠璃を開き、源太夫が京都の淨瑠璃を再興せると共に、播磨掾が大阪に淨瑠璃を起せる功勞は没すべからざるものである。

京都に於ては播磨掾と同時代に宇治加賀掾なるものがあつた。はじめ嘉太夫と稱し紀州宇治の人である。若い時から音曲に志し、延寳三年四十一歳の時京都に上り、伊勢島宮内について謠曲の節をやはらげて一流を開いた。これを嘉太夫節又は加賀節といふのである。節くばりが細かで弱々しく上品なところから京都人の趣味に合して大いに喝采を博したのである。この人は多少の文才もあつて、自己の流儀を門人に教へるために二三の書を編んでゐる。「竹子集」「大竹集」「紫竹集」などといふのがこれである。その中にも

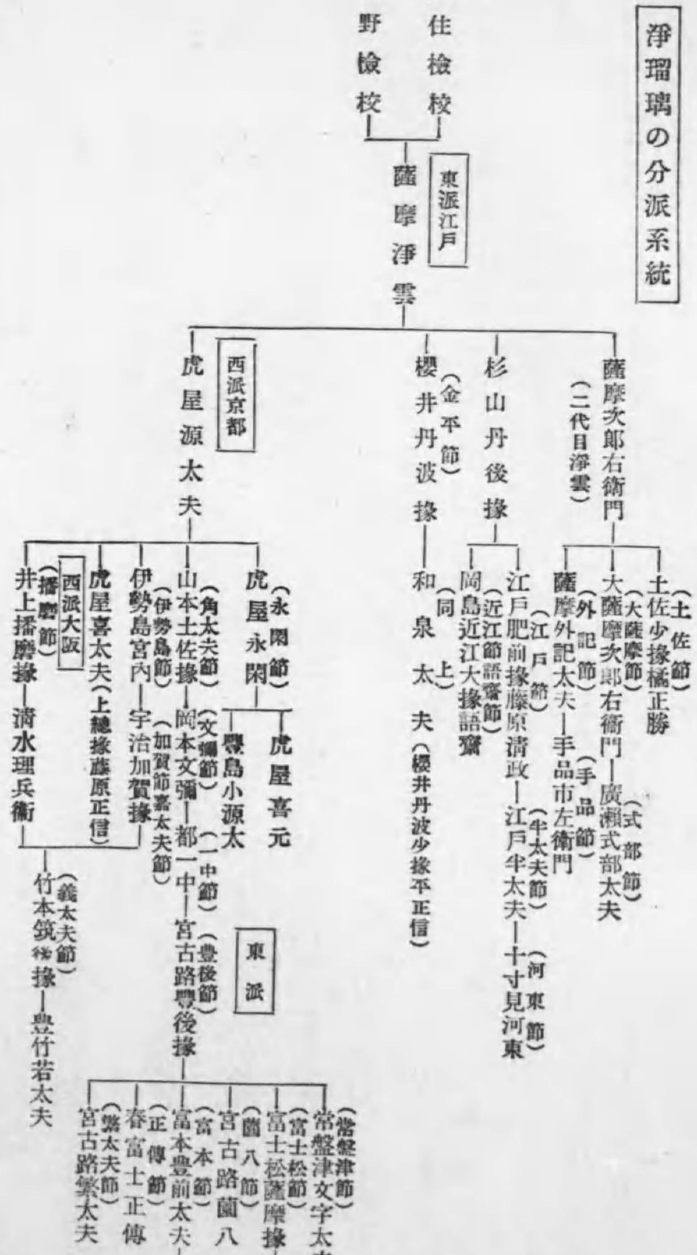
淨瑠璃に師匠なし。たゞ謠を親と心得べし。凡て音曲は聲に力を忘れ心に力を持つべし。

と言つた樣な文句があつて、その藝風が謠曲に近く上品なものであつたことを示してゐる。近松はこの人のために、「徒然草」「世繼曾我」「弘徽嫉妬打」等を書いてゐる。貞享三年加賀掾は大阪に下り西鶴の作である「暦」といふ淨瑠璃を語つて義太夫と競爭したのであるが、失敗して京都にひきかへした。寳永八年七十七歳で歿した。大字八行の正本を上梓し、それに謠本のやうに節附を施したのはこの人に始まるのである。

すべて此頃の京阪の淨瑠璃は其の曲甚だ多數であるやうだが、それは悉く新作といふ譯ではない。昔のものもあれば、又他流のものをば名稱を改めて出したものも少くはない。つまり淨瑠璃作者としての專門家といふ程の者がまだ無かつたのである。そこへ近松が出るに及んでその文才と、これを語つた義太夫の妙舌と相俟つて淨瑠璃界の上に一新時期を劃するに至つたのである。

竹本義太夫は大阪天王寺村の人で、五郎兵衛と云つた。最初は井上播磨の門人である清水理兵衛といふものに學び、後には加賀掾について井上と加賀の二流を折衷して工夫を凝らし、鍛練に鍛練を重ねて遂に義太夫といふ一流を樹てゝ、貞享二年二月大阪道頓堀の西の芝居にて興行し、加賀掾の淨瑠璃の「世繼曾我」(近松作)を語つたのである。然るにそれが井上播磨以來の淨瑠璃なりとの評判高く、更に翌貞享三年近松の新作「出世景清」を得て興行した。爾來作者と太夫と相俟ち相携へて評判益々高く、貞享十四年に竹本筑後少掾を受領し、近松の作の「蟬丸」を語つた。かくして貞享から正德に至る義太夫の語り物は百以上もあるが、それが殆ど近松の作である。正德四年五月六十四歳にて死んだ。かくの如く竹本座の繁昌は近松・義太夫二人の力與つて多きに居るは勿論であるが、竹田近江のからくり、吉田三郎兵衛辰松八郎兵衛の人形遣の功も亦没すべからざるものがある。

淨瑠璃の分派系統



（三）近松門左衛門

近松門左衛門は名を杉森信盛といひ、平安堂、巢林子、不移山人等の號がある。この人は出の分らぬ人であつて家系が審かでない。一說（攝津名所圖繪の說）に兄は京相國寺の宗長老、弟は岡本一抱子といふ名醫で、妹は錦江といふ俳諧師であつたといふ。その生國に就いてもいろいろ說があるけれども、少年（十八九才）の頃から京に居つたことだけは明かである。近松門左衛門といふ作名より附會して、近松寺の住職であつたといふ說が從來あるがこれも信ずるに足らない。彼の作「國性爺後日合戰」に「柳が浦のいと長く、何處に露をくりためて、所も萩の唐錦、故鄕の空に飜す袂の色」とあるより彼の故鄕を萩又はその附近だらう等といふのも勿論附會の說である。近來淀の藩士の次男とする系圖も發表されたが、是も疑問である。寛文十一年出版の俳書、「寶藏追加」（山岡元隣著）の中に「信盛」の名で「しら雲やはななき山の恥かくし」といふ句がある。それは彼の十九才の時である。又自分の書いた辭世の文章の中にも三槐九卿に仕へたといふことは言つてゐるが、佛門に在つたといふことは一言も述べてゐないのである。「茶話雜談」といふ書には阿野家の雜掌であつたといひ、「翁草」では正親町公通に仕へたともいふ。公通といふ公卿は有名なる狂歌師であつて、若い時に加賀掾のために淨瑠璃を作つたともいふので、かゝる人に仕へた關係上淨瑠璃語りと接近するに至つたのであらうといはれてをる。しかしこれも一說にすぎない。又都萬太夫座の拍子木を打つたり、道具を直したりしたと當時の評判記類に見えてゐる。一時下廻りの役者でもしてゐて近松姓を名乘つたものか。萬太夫座所屬の俳優に近松勘之介、同京之介、同梅之介などといふ名の見えるのも何か關係ありげに思はれる。

延寶五年二十五歲の時、京都の歌舞伎芝居、都萬太夫座のために藤壺の怨靈によつて藤の花が忽ち大蛇と變ずると

いふ趣向を立てゝ大いに喝采を博したといふ記錄がある。しかしその脚本は今日傳はつてゐないので分らないが、「弘徽殿鵜羽産家」の中に同一の趣向を用ひてゐるので大體の見當がつく。當時の名優水木辰之助、坂田藤十郎等も近松の脚本を貰つて上演した。貞享元年に藤十郎の演じた「大名なぐさみ曾我」、元祿元年に辰之助、藤十郎の演じた「今源氏六十帖」同三年に辰之助、藤十郎の演じた「水木辰之助餞振舞」等は皆近松の作である。この外近松の脚本には次の諸作がある。（高野博士著近松歌舞伎狂言集參照）

百夜小町	貞享元年（？）
夕霧七年忌	同
佛母摩耶山開帳	元祿六年
傾城阿波の鳴門	同八年
傾城江戸櫻	同十一年
一心二河白道	同
傾城佛の原	同十二年
阿彌陀が池新寺町	同
傾城富士見る里	同十四年
壬生大念佛	同十五年
傾城三つ車	同十六年
唐崎八景屏風	同
吉祥天女安産玉	寶永元年
傾城金龍橋	同五年
御曹司初寅詣	同七年

これと同時に宇治加賀掾のためにも淨瑠璃を作つた。義太夫がまだ雄飛せず、京の加賀掾の座にあつた頃より兩雄は互にその天才を認め合つて、水魚の交りをしたものゝ如く、竹本座興行の最初數回の間は近松の舊作である加賀掾の語り物を語つてゐたのである。ところが貞享三年三月はじめて義太夫のために「出世景清」の新作をものして出世の二字を冠することによつて、前途の幸多からむことを祈つたのである。此頃の彼は尙京都に住んでゐたのであるが、元祿十六年即ち五十一歳の時大阪に下り、世話物の初作である「曾根崎心中」を竹本座が興行して、大いに世の喝采を博してから、大阪にとゞまりて專ら義太夫のために思ひを凝らして年々幾多の新作を出して、音樂と詞曲と相俟つて蟬波名物の隨一となつた。正德四年義太夫の歿するに及びても、其の後繼者政太夫のために筆を執つて暫らくも休まず、「關八州繋馬」の絶筆に至るまで作るところ百有餘篇、享保九年十一月、七十二歳で歿したのである。墓は二つあつて、一つは攝津國川邊郡久々智の廣濟寺にあり、他の一は大阪谷町八丁目の法妙寺にある。參考のためその主要な作を次に列擧しておかう。（傍線あるものは世話物）

源氏供養　赤染衛門榮花物語　藍染川　東山殿子日遊　鳥羽戀塚物語　惟喬惟仁位諍　十六夜物語　平安城

つれ〴〵草　鵜谷物語　世襲曾我　伊呂波物語　津戸三郎　凱陣八島　薩摩守忠度　主馬判官盛久　しゆつせ景清　三世相　佐々木大鑑　源三位頼政　信濃源氏木曾物語　本朝用文章　天智天皇　ゑぼし折　十二段　大覺僧正御傳記　日本西王母　松風村雨東帶鑑　融大臣　多田院　釋迦如來誕生會　鎌田兵衛名所盃　曾我七以呂波　頼朝伊豆日記　根元曾我　當流小栗判官　今川了俊　浦島年代記　蟬丸　天鼓　曾我五人兄弟　大磯虎稚物語　賀古教信七墓廻　一心五戒魂　最明寺殿百人上臈　曾根崎心中　さつま歌　雪女五枚羽子板　用明天皇職人鑑　源義經將棊經　本領曾我　加增曾我　心中二枚繪草紙　兼好法師物見車　碁盤太平記　興兵衛（おかめ）　卯月の紅葉　曾我扇八景　吉野忠信　堀川波鼓　卯月潤色　酒呑童子枕言葉　重井筒　傾城反魂香　高野山女人堂　心中萬年草　丹波與作待夜のこむろぶし　淀鯉出世瀧德　おだつ清十郎　五十年忌歌念佛　心中双は氷の朔日　樋狩劍本地　曾我虎が磨　今宮心中　百合若大臣野守鏡　孕常盤　源氏冷泉節　冥途の飛脚　吉野都女楠　大職冠　夕霧阿波鳴渡　けいせい懸物揃　弘徽殿鵜羽產家　嫗山姥　長町女腹切　傾城吉岡染　天神記　殘靜（ふたりしづか）胎内捃（さぐり）　相摸入道千疋犬　娥哥（かはようた）　がるた　嵯峨天皇甘露雨　大經師昔暦　持統天皇歌軍法　嘉平次（おさが）　生玉心中　國性爺合戰　國性爺後日合戰　鑓の權三重帷子　聖德太子繪傳記　山崎與次兵衛壽の門松　日本振袖始　曾我會稽山　傾城酒呑童子　博多小女郎波枕　本朝三國志　平家女護嶋　傾城嶋原蛙合戰　井筒業平河内通　双生隅田川　日本武尊吾妻鑑　心中天網島　津國女夫池　女殺油地獄　信州川中島合戰　唐船噺今國性爺　心中宵庚申　關八州繫馬

近松の淨瑠璃作者としての生涯は何時頃から始まつたであらうか、思ふにそれは廿四五歳頃からでもあらうか。しかしその確證はあがらないのである。かりに延寶八年刊行の「赤染衛門榮華物語」を以てその初作とすれば、廿八歳の時である。これより貞享三年義太夫のために「出世景清」を作るまでに七年間の作は古淨瑠璃の模倣であつて、文章結構ともに重きをおくに足りない。彼の練習時代と見るべきである。この期の作は單に事件の顚末を叙するに止まり、文章平板で劇的要素が缺け、對話の呼吸が圓熟しないばかりか、脚色も單純で場面の變化に乏しいなど、すべて實地の舞台上の顧慮が缺けてゐる。時間空間の移り變りに就いても物語風であつて、たとへば今小兒の誕生を說いてゐると思ふと二三行たつて「かくて若君十五歳になり給へば」といふ樣な言ひ方をしたり、鎌倉より馬を走らせ「急げば程なく都に着き給ふ」といふやうな書き方をしたり、人形と文章と相應じて如何に動作すべきかに就いて注意を拂つてゐない。しかしかゝる缺點は彼が劇場の人と接近すると共に漸次除かれ、本當の戲曲の體裁をとるに至つた。

彼の作品中世話物は二十三篇であつて、全體の作品の十分の二にすぎない。今日の讀者は時代物の荒唐無稽なるにあき足りないで、世話物の人情をつくしてゐるのに傾倒してゐるけれども、當時の見物は時代物の變化極りなき夢幻的光景に恍惚として醉つたのである。當時の見物は今日の少年が人情小說よりもむしろ歷史小說冒險談をよろこぶのと同じ心理狀態で時代物をよろこんだのである。故に近松自らにしても時代物が主であつて世話物は客である。彼の心中物が喝采を博したのは、際物の目新らしさと實地らしい現實さとを歡迎したのであつて、畢竟世話物は切狂言の餘興である。世話物は當座限りであつて、二度三度と演ぜられたことは少い。又刊本が今日に存する分量に於ても世話物は時代物に比して極めて少きによりても、その多くもてはやされなかつたことが知られるのである。作者も時代物に重きを置いてこれが文章結構に苦心したのである。

今時代物の特質を概觀するに、その範圍は極めて廣く、上は神代の「日本振袖」を始め、天智、持統を經て江戸の

島原蛙合戰に及び、鎌倉時代では謠曲や舞曲の影響を蒙り、曾我もの義經ものが特に多い。而してこれ等の時代物は世話物が人物人情を主とするに反し、ひたすら事件の變化に重きを置くところより、人物が事件のために驅使せられる傾がある。かく事件の變化を主とし、人物の性格を從とするところから、個性の認め難きは勿論、普通の人間性すらどこまで表現されてゐるか疑はしい。勇者は如何なる不可抗力をも除き、智者は千里眼以上の能力を發揮し、一擧手一投足の中に禍を轉じて幸となすのである。これ等はたゞ事件の變化を著しくし目先をかへんとするより、人間としてあり得べき能力なるか否かを問はず、極端なる人物をこしらへて局面轉換の道具に供したにすぎない。されば事件の發展は因果の必然的關係にはよらないで一時偶發の機會によりて左右せられることが多い。つまり非現實的であつて、極端な空想的である。

時代物は史上の事蹟や名稱を借用するが、その人物の風俗言語はもとより、思想感情に至るまで全く現代化されて、少しも時代の特色が無く、天智天皇持統天皇の世にも家老若黨仲間といふ如き名稱があり、上流の武士が臣下に對する語も町人の主人が丁稚に對する語と變りが無い。鎌倉時代の遊女も新町島原の太夫と少しもちがつてゐない。かゝる時代錯誤は無學文盲なる下等社會の見物を主とし、通俗早わかりを主眼としたよりも來たのであるが、一面又當時人心の現代謳歌の一端を現したものとも言ふことが出來るのである。

世話物に至りては頗るこれと趣を異にして、事件の尋常なると共に、人物も亦普通ありふれた男女であつて、その佳なるものに至つてはほゞ一個の性格を持つてゐるのである。例へば「天網島」の小春や、「冥途飛脚」の梅川の如きはこれである。しかし、世話物の人物に於ても近松は多くの類型を用ひてをる。まづ老人型といふものには「冥途飛脚」の孫右衛門、「博多小女郎浪枕」の惣左衛門、「女殺油地獄」のお澤、「壽の門松」の與平衛の母、等よく似た型である。傾城型、女房型ともいふべきものには「曾根崎心中」のお初、「重井筒」のお房、「二枚繪草紙」のお島は同一型であり、「博多小女郎」の小女郎は「冥途の飛脚」の梅川とも似てゐる。若者型色男型には「天網島」の治兵衛「生玉心中」の嘉平次、「及は氷の朔日」の平兵衛、「曾根崎心中」の徳兵衛、「長町女腹切」の半七、「今宮心中」の二郎兵衛など、みな共通の性格を持つてゐる。惡人型には「生玉心中」の長作、「曾根崎心中」の九兵次がある。近松は專ら人情を描くことをつとめ、個人性を描くことにはあまり力を用ひなかつた樣に思はれるのである。從つて一般的の人情はよく現はれてゐるけれども、個々獨特の性格は比較的に活躍しない。世話物も時代物と同じく善惡二勢力の對立を中心觀念として、その悲劇は本人の性格よりも境遇のために左右せらるゝ點は兩者に共通した點である。かの世話物の材料は何れも事實を基礎にしたのであるけれども、これを寫すに當つては實際の事實に拘泥しないで彼一流の穩和健全なる人生觀を以て之を醇化し、敵も味方もそれ〴〵道理のある樣に同情的筆致を以て、人生のあたゝか味を感ぜしめようとしてゐるのである。

要するに近松は樂觀的詩人である。心中の樣な悲慘な事件を寫しても未來の一蓮托生往生樂土を信じて、その調子は何となくはなやかで陽氣であつて之に對すれば恍惚として夢幻の中にさまよふが如く、死といふものも樂しむべき愛すべきものゝ如く感ぜらるゝのである。西鶴の作品は歡樂の中にも暗影がある。近松は悲哀の中にも光明がある。西鶴の人物はひねくれてゐるが、近松のは素直である。何れも浮世の歡樂を追求してその身の破滅に及んでも、深く自己を反省する思慮を缺いてゐる點は、元祿時代思潮共通の特質として近松西鶴ともに同樣であるが、西鶴の人物が

往々すてばちの言語を放つに似ず、近松のは一死以て義理人情の矛盾衝突を調和したるものとして、現世に對して不平反抗の意をを漏さず、未來の一蓮托生を信じ、情に殉ずる美しい心の男女を描いてゐる。これは恐らく當時流行した心中の眞相ではないだらうと思はれる。「長町女腹切」の中にも、「世間に多い心中も金と不孝に名を流し戀で死ぬるは一人もなし」とある。この言が多分當時の心中の實相であつたらうと思ふ。これを醇化美化したのが近松であつたのである。西鶴のさかしき隈々を探り求めたのとちがつて、極端な寫實は藝術でないといふのが近松の見解である。彼の藝術觀である。

彼の藝術論は、穗積以貫(近松半二の父)の著「難波土産」の卷一發端の所に出てゐる。

往年某近松が許にとむらひける比近松云ひけるは、惣じて淨瑠璃は人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句みな働を肝要とする活物なり。殊に歌舞伎の生身の人の藝と芝居の軒をならべてなすわざなるに、正根なき木偶にさま〴〵の情をもたせて見物の感をとらんとすることなれば、大形にては妙作といふに到りがたし。某わかき時大内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし雪いたうふりつもりけるに、衛士にあふせて橘の雪ははらはせられければ、傍なる松の枝もたはゝなるがうらめしげにはね返りてさかけり。是心なき草木を開眼したる筆勢なり。その故は橘の雪をはらはせらるゝを、松がうらやみておのれと枝をはねかへして、たはゝなる雪を刎おとして恨たるけしきさながら活て働く心地ならずや。是を手本として我淨瑠璃の精神をいるゝ事を悟れり。されば地文句せりふ事はいふに及ばず、道行なんどの風景をのぶる文句も、情をこむるを肝要とせざればかならず感心のうすきものなり。詩人の興象といへるも同事にて、たとへば松島宮島の絶景を詩に賦しても打詠て賞するの情をもとゝすと心得べし。文句にてには多ければ何となく賤しきものなり。然るに無功なる作者は文句を必ず和歌或は俳諧などのごとく心得て五字七字等の字くばりを合さんとする故おのづと無用のてには多くなるなり。たとへば年もゆかぬ娘といふべきを年はもゆかぬ娘をばといふごとくなること字わりにかゝはるよりおこりて自然と詞づらいやしく聞ゆ。されば大やうは文句の長短を揃へて書べきことなれど淨瑠璃はもと音曲なれば語る所の長短は節にあり。然るを作者より字くばりをきつしりと詰すぐればかへつて口にかゝらぬ事あるものなり。この故に我作には此かゝはりなき故てにはおのづと少し。昔の淨瑠璃ほ今の祭文同然にて花も實もなきもの成しを、某出て加賀掾より筑後掾へうつりて、作文せしより文句に心を用ゆること昔にかはりて一等高く、たとへば公家武家より以下みなそれ〴〵格式を分ち威儀の別よりして詞遣ひ迄そのうつりを專一とす。此故に同じ武家なりといへば或は大名或は家老、そのほか祿の高下に付て、そのほど〴〵格をもつて差別をなす。是もよむ人のそれ〴〵の情によくうつらん事を肝要とするなり。

淨瑠璃の文句みな實事をありのまゝにうつす内に、又藝にありて實事になき事あり。近くは女形の口上おほく實の女の口上には得いはぬ事を打出していふゆゑその實情があらはるゝなり。此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は、女の底意なんどがあらはれずして却つて慰にならぬ故なり。さるに藝といふ氣を付ずして見る時は、女に不相應なるけうとき詞など多しとそしるべし。然れ共この類は藝と見るべし。此外敵役の餘りにおく病なる體やどうけのおかしみを取る所實事の、外藝に見なすべき所おほし。このゆゑに是を見る人其のしんしやくあるべきことなり。淨瑠璃は憂が肝要なりとて、多くあはれなりなんどいふ文字を書、又は語るにもぶん

や節樣のごとくに泣が如くかたる事我作のいきかたにはなきことなり。某が愛はみな義理を專らとす。藝のりくぎが義理につまつてあはれなれば、節も文句もきつとしたる程いよ〳〵あはれなることなり。この故にあはれをあはれなりといふ時は含蓄の意なうしてけつく其情うすし。あはれなりといはずしてひとりあはれなるが肝要なり。たとへば松島なんどの風景にても、あゝよき景かなと譽たるときは一口にて其景象が皆いひつくされて何の證なし。其景をほめんと思はゞ其景の模樣共をよそながら數々言立れば、よき景といはずしてその景の面白さがおのづから知るゝ事なり。此類萬事にわたる事なるべし。ある人云く、今時の人はよく〳〵理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中、むかし語りにある事に當世請とらぬ事多し。さればこそ歌舞伎の役者なども兎角その所作が實事に似るを上手とす。立役の家老職は本の家老に似せ、大名は大名に似るをもつて第一とす。昔のやうなる子供だましのあじやらけたる事は取らず。近松答て云く、この論尤のやうなれ共藝といふ物の眞實のいき方をしらぬ說なり。藝といふものは實と虛との皮膜の間にあるものなり。成程今の世實事によくうつすをこのむ故家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共、さらばとて眞の大名の家老などが立役がむしや〳〵と髯は生なり、あたまは剝なりに舞臺へ出て藝をせば慰になるべきや。皮膜の間といふがこゝなり。虛にして虛にあらず、實にして實にあらず、この間に慰が有た物なり。是に付てさる御所方の女中、一人の戀男ありて互に情をあつく通はしけるが、女中は金殿の奥ふかく居給ひて、男は奥へ參ることも叶はねば、たゞ朝廷なんどにて御簾のひまより見たまふもたまさかなれば、餘りにあこがれたまひてその男のかたちを木像に刻ませ、面體なんども常の人形にかはりて、其男に毫ほともちがはさず、色つやのさいしきは言ふに及ばず、毛の穴迄うつさせ耳鼻の穴も口内齒の數迄寸分もたがはず作りたてさせたり。誠に其男を傍に置きて是を造りたる故、その男と此人形とは神のあるとなきとの違のみなりしが、かの女中是を近付て見たまへば、さりとて生身を直にうつしては興のさめて、傍に置きたまふもうるさく、やがて捨てられたりとかや。是を思へば生身の通りをすぐにうつさば、たとひ楊貴妃なりともあいそのつきる所あるべし。それ故に畵そらごととてそのすがたをゑがくには又木に刻むにも、正眞の形を似するうちに又大まかなる所あるが結句人の愛する種となるなり。趣向もこのごとく本の事に似る内に大まかなる所あるが結句藝になりて人の心のなぐさみとなる。文句のせりふなども此心入れて見るべき事おほし。

右の所論を以て見れば、近松が寫實といふことに就いて、どういふ考であつたかといふことがよく分るのである。

近松は又世にも稀なる能文家である。最初は古文學の補綴模倣を專らとしてゐたのであるが、後にはこれより脫出して、鉛を化して銀となし、古人を併呑して自家藥籠中のものとしたのである。義太夫節が謠曲說經祭文等當時あらゆる謠ひものの節を攝合して打つて一丸としたのと等しく、近松の文章もこれ等の材料を適用してたくみに融和し、和漢雅俗を折衷し詞藻わくが如くで、人をして應接に遑なからしめるものがある。たゞ餘りに達者なるに任せて筆が走りすぎ、簡潔にすべきを冗長にし、眞面目なるべき所を滑稽化するが如きは白璧の微瑕といふべきである。近松が文章に對する用意のほどは、前述の「難波土產」の本文でよく分る。

なほ參考までに彼の肖像畵に書いた自讃を掲げて置く。松山米太郎氏所藏のものである。（別に馬琴がその著「霧旅漫錄」の中に模寫しておいたもので、大阪金屋橋熊野屋彦九郎所藏のものがある。文章の字句など幾分の差があ

る。）

近松門左衛門性は杉盛宇は信盛平安堂巣林子の像

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへ咫尺
し奉りて寸爵なく市井に漂て商買しらず隱に似て隱には
あらず賢に似て賢ならずものしりに似て何もしらず世の
まがひものからの大和の敎ある道々伎能雜藝滑稽の類
までしらぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生を囀り
ちらし今はの際にいふべくおもふべき眞の一大事は一字半
言もなき倒惑こゝろに心の恥をおほひて七十あまりの
光陰おもへばおぼつかなき我世經畢

もし辭世はと問ふ人あらば
それぞ辭世去ほどに扨もそののちに
殘る櫻が花しにほはゞ

享保九年中冬上旬

入寂名　阿鞀院穆矣日一具足居士

不俟終焉豫自記春秋七十二歲　圓圓

のこれとはおもふもおろかうづみ火の
けぬまあだなるくち木かきして

（四）豐竹座とその作者

竹本義太夫の門人豐竹若太夫は大阪の人であつて、河內屋勘右衛門といふ。後に越前少掾を受領した。この人が元祿十六年に大阪道頓堀に新に操座を設けて、「心中淚の玉井」を語り、爾來竹本、豐竹と二派に分れて竹本の方を西の芝居といひ、豐竹の方を東の芝居と呼んで、互に相競爭したのである。越前少掾は明和元年九月八十四歲で歿した。若太夫が自分の芝居を持つ以前に、即ち元祿十五年に筑後掾のあと芝居で「傾城懷子」を語つた。これが大いに當つたのであるが、これが紀海音の初作であつて、海音三十九才の時の作なのであつた。

この豐竹座では殆ど近松物は上演されないで海音始め他の作者がこれにたてこもつたのである。假りに次にかゝげる豐竹座の興行年表の抄出を見れば、その作者及び變遷が分るであらう。

元祿十六年　作者未詳　心中淚の玉の井　金屋金五郎浮名額
寶永元年　作者未詳　東岸居士

（此間豐竹座退轉）

同四年　作者未詳　富貴曾我、日向景淸、今樣女袖鑑、賴朝七騎落、身替問答
同五年　作者未詳　今樣西行物語、新利屈物語　山椒太夫戀慕流
同六年　紀海音　椀久末の松山、秦始皇帝太夫松

近松　藍染川、赤染衛門榮花物語
作者未詳　敵討難波梅
同七年　作者未詳　佐與中山夜泣石、椀久熊谷笠
正徳元年　作者未詳　北國源氏金の山吹
同二年　紀海音　平安城細石　今宮心中丸腰連理松
作者未詳　藤戸の先陣、信濃源氏、新艘太夫丸、松浦五郎、七枚起請吾妻雛形
同三年　紀海音　信田森女占、傾城三度笠、鬼鹿毛無佐志鐙
錦文流　仁德天皇萬年車
作者未詳　播州曾根松
同四年　紀海音　曾我姿富士
作者未詳　小敦盛花觀、愛護若壽箱
同五年　紀海音　傾城思升屋
近松　吉野忠信錦着長（吉野忠信の改題）
戸川不鱗　記錄曾我玉笄髻
作者未詳　天智天皇豐竹秋
享保元年　紀海音　鎌倉尼將軍、花山院都巽

同二年　紀海音　甲陽軍鑑今樣姿
錦文流　西行法師墨染櫻
作者未詳　照日前都姿
同三年　紀海音　鎌倉三代記
作者未詳　傾城吉原雀、今樣賢女手習鑑
同四年　紀海音　義經新高館、神功皇后三韓責、業平昔物語
同五年　紀海音　鎭西八郎唐土船、日本傾城始、山椒太夫葭原雀
同六年　紀海音　三輪丹前能、吳越軍談比翼舌
作者未詳　伏見常盤昔物語
同七年　紀海音　大友王子玉座靴、心中二つ腹帶、東山殿室町合戰
同八年　紀海音　玄宗皇帝蓬萊鶴、傾城無間鐘
西澤一風、田中千柳　井筒源六戀寒晒、日本五山建仁寺供養
作者未詳　記錄曾我
同九年　西澤一風、田中千柳　賴政追善芝、女蟬丸

元祿十六年竹本座に「曾根崎心中」を出せば、豐竹座の方にても「心中涙の玉の井」といふ世話物を出し、正德元年に竹本座で「冥途の飛脚」を出せば豐竹座でも「油屋お染袂の白絞り」を出して之に對するといふ次第で、常に相

對抗して經營慘澹たるものであつた。かく二座の對抗は出し物の上ばかりでなく、淨瑠璃の語口に於ても、またからくり手穀の上に於ても、さささまの工夫を凝らすに餘念なかつたのである。そのため淨瑠璃界は少からず發達したのである。

「竹豐故事」にも次の樣に言つてある。

竹本豐竹兩座となりてより、東は西に負けまじ、西は東に勝らんと、互に勵み出來、益々芝居繁榮し、淨瑠璃の作者は種々の趣向を工み出し、道具建にも金銀惜まず、金襖にて舞臺を輝かし、或は數寄屋懸りの粹なる思ひつきに、智惠袋の底を振ひ、人形の衣裳には、縮緬緞子繻子金襴等にて美麗を盡し、詰人形の外は皆々足付となり、出遣ひの外は介錯足遣ひ立懸り歌舞伎役者の所作より增りて、天晴見事なり。併し西か東か一座ばかりでは、斯繁昌もせまじ。當時は町中の若い衆、豐竹講の竹本講のと號し、毎月掛錢を集め置き、替り淨瑠璃の節、進物の入用に仕給ふとかや。扨々奇特千萬なる御心中益々信仰なさるべし。

紀海音は享保十七年の「八百屋お七戀緋櫻」を最後の作として、その署名のある作約五十篇の多きに及んでゐる。豐竹座の初期は殆ど海音が獨力でその作をひきうけてゐたのである。しかし海音の作は到底近松の敵ではない。脚色も文章も共に數等劣つてゐる。けれどもとにかく獨力で對抗した勇氣は多とすべきである。彼自らも近松に及ばぬことを知つてゐる如く、「傾城三度笠」「傾城國性爺」等近松に模倣した作が多い。海音の作で佳作とみるべきものは

鬼塵毛無佐志鑑
八百屋お七戀緋櫻
心中二つ腹帶

等である。

海音は姓は榎並、通稱を喜右衛門といひ、後に善八と改めた。父は綿屋善右衛門といふ御堂前の菓子屋であつたが貞因と號し俳諧師であり、兄は有名なる狂歌師の綿屋貞柳(油煙齋)といふ人である。父子ともに安原貞室の門下であつた。海音も狂歌を兄に學び、俳諧を貞室に學びて貞峨と號してゐた。始め黃檗の悅山和尙につきて僧となり、名を高節と稱し同宗の寺院である大和國柿本寺に居つた。後に還俗して大阪にもどり、醫者になり、國學を僧契沖に學び島踏觀契因といつた。紀海音といふのは淨瑠璃作者としての名である。兄の貞柳とは一時不和であつて義絕同樣であつたが、後に和睦した。元文元年夏、狂歌の方で法橋に叙せられ、豐竹座の創立に際して若太夫の請を納れて、その座附作者となつたのである。寬保二年十月四日、八十歲で歿した。彼には淨瑠璃の外には「踊布袋」といふ俳書、「四民乘合船」といふ小說もある。墓は大阪の寺町寶樹寺にあり、清潮院海音日法居士と謚されてゐる。

豐竹座の第二の作者は西澤一風である。この人の初作は明かでない。享保八年に「井筒屋源六戀寒晒」といふ作がある。同じく九年に田中千柳との合作「賴政追善芝」「女蟬丸」といふのがある。この年に近松が死んだので、豐竹座は「女蟬丸」の頃から漸次隆盛に向つたのである。享保十一年に並木宗輔、安田蛙文との合作に「北條時賴記」と

いふものがある。この作は近松の「最明寺百人上臈」の增補であるけれども、非常なる大當りであつて、二年間も打ちつゞけたもので、竹本座が三年越に打ちつゞけた「國姓爺合戰」と比較されるものである。これが最後であつてその後は淨瑠璃の作はない。淨瑠璃以外には「今昔操年代記」といふ作がある。これは操の歴史を知るには是非參考すべき書物である。一風の小說に就いては既に述べた通りである。

豐竹座の作者にはなほ錦文流がある。元祿十二年に竹本座のために「本海道虎が石」といふ淨瑠璃を作つた。小說の條下でのべた自著の小說「棠大門屋敷」（寶永二年）の中に、この「本海道虎が石」興行の時、綾子手摺といふことを仕出し、人形の使ひ樣を見せ、又素語と云ふことを始め、操芝居に舞臺を附けることはこれが始めであるといふことを自ら吹聽してゐる。

本海道虎が石　祿三年　（竹本座）
傾城八花形　同　十五年　（同　）
男色加茂侍　年代不明　（豐竹座）
心中戀の中道　正德二年　（同　）
仁德天皇萬年車　同　三　年　（同　）
西行法師墨染櫻　享保二年　（同　）
熊野權現烏牛王　同　四　年　（同　）

淨瑠璃は竹田出雲あたりからは大抵合作が流行したのであるが、文流のはいづれも合作ではない。作風には何れも初期の佛を存してゐる。

以上の外に豐竹座の淨瑠璃作家としては次の如き人がある。（寶曆末年まで）

戸川　不鱗　田中　千柳　安田　蛙文　並木　宗助　小川　文助　並木　丈助　爲永太郎兵衞
淺田　一鳥　豐田　正藏　豐岡　珍平　但見　千鶴　爲永　千蝶　松屋　來輔　原田由良助
梁塵　軒　但見彌四郎　松屋　來輔　並木　周藏　安田　蛙桂　豐　丈助　豐　正助
難波　三藏　浪岡　橋平　浪岡　鯨兒　並木　正三　豐竹　甚六　並木　素柳　並木　永輔
浪岡　蟹藏　豐竹　千露　浪岡黑藏主　豐竹　上野　三浦　飲子　七　才　子　豐竹　應律
中村　阿契

並木宗助は通稱松屋宗助といひ、市中庵又は全柳と號し、はじめは田中千柳といふ名にて西澤一風との合作にて三四種の作がある。享保十一年「北條時賴記」のとき並木宗助と名を改めて、安田蛙文との合作が多い。（はじめは並木宗助と書いてゐるが、享保二十年から宗輔にあらためた）この人の當り作は

一休和尙　蘆川新左衞門　本朝檀特山　享保十五年　（安田蛙文との合作）
刈萱桑門筑紫轟　同　二十年　（並木丈助との合作）
釜淵雙級巴　元文二年　（獨　作）

等で、寶曆元年九月五十七才で歿した。寶曆元年の興行で非常に人氣のあつた「一谷嫩軍記」は宗輔の遺稿を四段目

から淺田一鳥等の補つたものだといふ。三段目の切熊谷陣屋が最も名高く、陣屋の熊谷として知られてゐる。この人には淨瑠璃歌舞伎作者の門人多く、並木と名のつてゐる人はみな宗輔の流をくんだ人である。

柔塵軒は豐竹座の創立者である豐竹越前少掾の作者としての名である。延享三年に「酒呑童子出生記」の作がある。その後も二三種の作がある。恐らく延享二年に淨瑠璃語りを退いての後の筆のすさびであらう。

安田蛙文はもと武士であつて有馬家に仕へたといふ。一風に學んで宗輔との合作が多い。單獨の作には、享保十八年「鍛倉比事青砥錢」同年に宗輔との合「忠臣金短册」がある。その後はこの人の名が見えない。

爲永太郎兵衛は千蝶と號し、始めは竹田庄藏といひて出雲の門人で竹本座に屬してゐた。

太政入道兵庫崎　元文二年（竹本座）
雲平磯馴松　同三年（同　）
本田善光日太鑑　元文五年（豐竹座）
播州皿屋敷　寛保元年（これが最も有名である）

寛保から延享の頃までは豐竹座の作者として大いに活動した。

淺田一鳥は森長三郎といつて、もとは謠の師匠であつた。寛永元年に前述の「播州皿屋敷」に合作者の一人として始めてその名を出し、以來宗輔及び太郎兵衛との合作が甚だ多い。

（四）近松以後の竹本座の作者

享保九年正月から、近松の最後の作「關八州繋馬」が竹本座に上演され、これを名殘として竹本座の出し物も一變して、竹田出雲、長谷川千四、文耕堂等が主として筆を執つた。近松の歿後十年間に亘る竹本、豐竹兩座の作者を擧げてみれば次の通りである。

年號	竹本座	豐竹座
享保十年	竹田出雲	西澤一風　田中千柳
同十一年	竹田出雲	安田蛙文　西澤一風　世木宗助
同十二年	長谷川千四　竹田出雲	安田蛙文　並木宗助
同十三年	長谷川千四　竹田出雲	安田蛙文　並木宗助
同十四年	長谷川千四　竹田出雲	安田蛙文　並木宗助
同十五年	長谷川千四　文耕堂	安田蛙文　並木宗助
同十六年	長安川千四　文耕堂	安田蛙文　並木宗助
同十七年	長谷川千四　文耕堂	安田蛙文　並木宗助
同十八年	長谷川千四　文耕堂	安田蛙文　並木宗助
同十九年	竹田出雲　文耕堂	並木宗助　並木丈助

右以後寳暦末年までの竹本座の作者をあげてみれば次の通りである。

竹田出雲(千前軒清定)　文耕堂　三好松洛　竹田庄蔵　淺田可啓　竹田小出雲
小川半平　並木千柳(並木宗輔)　吉田冠子(吉田文三郎)　竹田外記　近松半二　竹田文四
中村閏助　近松景鯉　竹田瀧彦　北窓後一　竹本三郎兵衛

寳暦以後明治に至る百餘年の間は殆ど萎靡沈滯また振はざるに至つたので、その間辛うじて近松半二の苦心の作「妹脊山婦女庭訓」が人氣を博した位であつた。

竹本座の作者で近松についで有名なのは竹田出雲である。從來の通說では寳永二年三月、竹本筑後掾に代つて竹本座の座主となり、近松作の「用明天皇職人鑑」を出し、人形衣裳及び道具立なども從前よりは立派にし、出語、出遣を始めた。竹田出雲を「忠臣藏」などの作者である出雲と同一人として居るが、作者の出雲は此時漸く十五歳であるから、これはその父の出雲であらうと思はれる。さて作家の出雲は千前軒と號し、享保八年に松田和吉と共に「大塔宮曦鎧」を作つて近松の添作をうけた。これが淨瑠璃に合作の起つた始である。爾來作るところ三十餘篇、その中十二篇は彼の獨作で、他は合作である。出雲との合作者は、松田和吉、長谷川千四、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、小川半平、並木千柳、吉田冠子、中邑潤助、近松半二、近松景鯉などである。

出雲の文藻はもとより近松に及ばないのであるが、その趣向に波瀾の多いのは更に一歩を進めたと稱してよいのである。就中有名なのは次の諸作である。

蘆屋道滿大内鑑　享保十九年　(獨作)
平假名盛衰記　元文四年　(文耕堂・三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲と合作)
菅原傳授手習鑑　延享四年　(並木千柳・三好松洛・竹田小出雲と合作)
義經千本櫻　同四年　(三好松洛・並木千柳と合作)
假名手本忠臣藏　寛延元年　(同右)

就中後の三者は非常な大入をとつたのである。一體(忠臣藏)は當時の人氣に投じた好題目であつて、すでに近松には「碁盤太平記」がある。又豐竹座の並木宗輔にも「忠臣金短冊」といふのがあり、宇治加賀掾の淨瑠璃には、「忠臣いろは夜討」がある。更に江戸の歌舞伎には津打治兵衛の作である「忠臣いろは軍談」といふのがある。その他前後に數十種の作があるけれども「忠臣藏」の人氣の盛であるのには及ばなかつたのである。

當時吉田文三郎は前にも述べた樣に、人形遣の名人であつて、且つ意匠に富み、菅原の三子の兄弟の着物の郡内縞、千本櫻の忠信の衣服に源氏車の模樣をつけた等は、皆この人の工夫であつて、今日もなほそのならひとなつてをるのである。出雲は寳暦六年六十六歳で歿した。

出雲の子小出雲の作で有名なのは

新薄雪物語　(文耕堂・松洛・半平と合作)
軍法富士見西行　(千柳・半平と合作)

夏祭浪花鑑　（千柳・松洛と合作）

等である。就中「浪花鑑」は九段物の始として知られてをる。

松田和吉は後に文耕堂と稱した人である。竹田出雲と共に「大塔宮曦鎧」を合作せるより以前に、

河内國姥火　正德三年

佛御前扇車　享保七年

の作がある。その他合作、單獨の作も多い。合作ものは多く長谷川千四、三好松洛と共に作つてゐる。それ等には

須磨都源平躑躅　享保十五年　（長谷川千四との合作）

鬼一法眼三略卷　同十六年　（長谷川千四三の合作）

壇浦兜軍記　同十七年　（長谷川千四との合作）

御所櫻堀川夜討　元文二年　（三好松洛との合作）

これ等は今日と雖もなほ行はれてゐるものである。又豐竹座のために

大佛殿萬代の礎　享保十年

をかいた。この人の歿年は明かでないが、寛保以後はその名が見えない。

長谷川千四、この人はもと大和長谷寺の僧である。享保十二年に「敲打未刻太皷」を初作し、同十三年には竹田出雲との合作で「加賀國篠原合戰」、同十四年には「京土產名所井筒」の作がある。後者は單獨の作でもつとも有名である。

この人も歿年は不明、享保十七年以後その名は見えない。

三好松洛は伊豫松山城外の眞言宗の願成寺の僧であつた。還俗して竹田出雲の門人となつたのである。この人には出雲や文耕堂との合作ばかりで單獨の作は殆ど無い。元文元年「赤松圓心綠陣幕」にはじめてその名を出し、明和八年、近松半二・松田ばく・榮善平・近松東南、との合作「妹背山婦女庭訓」に後見三好松洛七十六歳とあつて、その以後は名が見えない。

吉田冠子といふのは前にも述べた人形遣吉田文三郎のことで、享保から寶曆の頃人形遣をつとめたのである。その子の文吾なるもの、二代目文三郎となつて、相つゞいて人形遣として名聲を馳せたのである。淨瑠璃の作は出雲に學び、寶曆元年に三好松洛と共に、近松の「丹波與作」を改作して「戀女房染分手綱」を作り、その後も、出雲・松洛・近松半二等との合作が少くない。寶曆九年竹本座を退いて後は、大阪を去りて京都の芝居につとめ、又江戸に下つて明和七年福内鬼外の「神靈矢口渡」等をつとめて大に名聲をあげた。

竹本座は寶曆十一年座元竹田近江が奢侈のため、罪を得て入牢し、人氣が落ちて次第に衰兆を呈した。その頃作者としても最も努力奮鬪したのは近松半二である。半二は例の有名な難波みやげを書いた大阪の儒者穗積以貫の三男で寶曆元年竹田外記等と「役行者大峯櫻」を作つてより後、松洛・小出雲・冠子等との合作あり、かくて明和三年「本朝二十四孝」「太平記忠臣講釋」を出して大に評判を得、「關取千兩幟」を出したるも極めて不入、ついで「三日太平記」

を出して名詮自性、榮華の夢はかなく破れて竹本座はこゝに中絶した。さて一時歌舞伎芝居として見たがこれも思はしからず、由て翌五年座元を近松門左衛門といふ名義にして、「傾城阿波鳴門」を出し、尋で「曾根崎心中」を書替へて「讀賣三巴」といふ作を上場したが散々の不入であつた。そこで翌年同じく衰微を極めてゐる豐竹座と合同して「近江源氏先陣館」を興行したが、これもうまく行かぬので直に分離し、吉田文三郎を江戸から呼戻し、彼地で好評であつた「矢口渡」をかけて見たが、一向思はしくもなかつた。是に於て半二一生の智慮を絞り「妹脊山婦女庭訓」を出した處、これは非常な大當りで四五年の損失を一時に取返したといふ噂であつた。以上の諸作はいづれも合作であるが半二が主として筆を執つたものである。獨作には「道中亀山噺」(安永七)、「新版歌祭文」(安永九)などがある。天明三年二月五十九歳で歿した。半二歿後は定まつた竹本座の興行もなく次第に衰へて廢絶するに至つた。

一方豐竹座は寳暦七年十二月から上演した「祇園祭禮信長記」(中邑阿契・豐竹應律・黒藏主・三津飮子・淺田一鳥合作)が大いに當つて三年越の興行をつゞけ大いに座運挽回したのであるが、同十一年二月、同十三年正月の二回の火災に罹つて燒失し氣勢またあがらず、明和二年八月終に退轉の非運に陷り、同四年正月豐竹此吉座元となり堀江市の側に再興したけれども、昔日の勢なく遂に沒落して了つた。

二座沒落後は、道頓堀には竹本座系統である西の芝居、竹田の芝居があり、豐竹座沒落後、堀江市の側の芝居があつた。その後御靈社内の芝居、博勞稻荷の文樂軒、座摩社内の芝居、天滿社内の芝居、北の新地の芝居等があつて、何れも操人形を興行したのである。その後天保改革の影響をうけて、社寺境内の芝居の興行が禁じられたので、御靈、文樂の兩座は一時立ちのいたのであるが、文樂軒は再び勢を挽回し、安政三年九月九日から舊地稻荷の社内に再築開演し、明治四年、松島千代崎橋筋に新築し、同十七年九月、平野町の御靈社内に移つたが、昭和二年に燒失して了つた。

七、歌舞伎

(一) 歌舞伎芝居の起原と變遷

「歌舞伎」といふ語は天正頃からいひ初めた語であつて、尋常一般に異なる風俗言動を言つた。歌舞伎(もとは伎でなく妓を用ひた)といふ文字は後の宛字であつて、もとは動詞で、眞面目でなく、異樣な言語動作を現はす語である「かぶかん」とか「かぶく」など用ひた例が澤山ある。

歌舞伎芝居は出雲のお國に始る。お國はもと出雲の巫女であつて、社殿修覆の淨財を得るために勸進の歌舞して廻り、慶長八年京都に來つて興行した。「東海道名所記」には次の如く記されてゐる。

むかし〳〵京に歌舞妓のはじまりしは、出雲神子にお國と云へる者、五條の東の橋詰にて、やゝ子踊といふ事をいたせり。其の後北野の社の東に舞臺を拵へ、念佛踊に歌を交へ、塗笠に紅の腰蓑を纏ひ、鬼鐘を首にかけて、笛鼓に拍子を合せて踊りけり。其の時は三味線はなかりき。斯くて三十郎(名古屋山三郎と異名同人)といへる狂言師を夫にまうけ、傳介と云ふものをかたらひて、三條繩手の東のかた、祇園の町のうしろに舞臺をたて、さま〳〵に舞ひ踊る。三十郎が狂言、傳介が絲縷とて、京中これに浮されて見物するほどに、六條の傾城町より佐渡島といふもの、四條河原に舞臺をたて、傾城數多して舞を踊らせけり。若上らうと云ふ傾城屋、ま

た舞臺を立てて能をいたす。脇もつれも地うたも、皆傾城どもなりければ、謠は蚊の鳴くやうにて、可笑しかりければ、後には脇地うたひは男を雇ひていたせり。歌舞妓過ぎては、祇園鬚山丸山に傾城共をあげ、夜もすがら遊ぶ。これにぞ歴々樣たち、名をかへ品をかへて、御通ひなされし故に、女歌舞妓はとゞめられぬ。猶も六條町へ、夜な〳〵行き給ふ御方ありし故にや、三筋町を追ひたて、西の洞院西七條の中道寺まで一つに合はせて、西朱雀の七條に一構へして押込められ、傾城は此の内より外に出づる事かなはず、其の後若衆歌舞妓始まり、これも故ありて、子どもの前髪をおろさせらる。此の程は夷屋吉郎兵衛、大和屋六兵衛、村山又兵衛、此の三兵衛が太皷を打叩くその中へ、こくもちの勘太郎がどしめくほどに、又九郎主馬のすけ、古びたるおかな、これらの道化もの、人の腹筋をよらする。

これでみれば分るやうに、はじめは衣をつけて塗笠をいたゞき、首に鐘をかけて之を叩き、佛名を稱へて笛皷に拍子を合せて踊つたのである。世間ではこれを「念佛踊」といひ、或は「やゝ子」といふ踊を踊つたため「やゝ子踊」とも言つたのである。後には頭を包み刀をさし男の姿をして踊つた。「羅山文集」五十六に次の樣に出てゐる。

今之歌舞伎非二古之歌舞伎一也。……男服ニ女服一女服ニ男服一斷レ髪爲ニ男髻一、横レ刀佩レ嚢、卑謟俚舞。淫哇嘈雜、男女相共且歌且踊、是今歌舞伎也。出雲淫婦九二始爲レ之、列國都鄙皆習レ之。其風愈盛愈々亂……

又「當代記」卷三にもこの樣を記して次の樣にかいてある。慶長八年四月の條に、

此頃カブキ躍ト云事、出雲國神子女名ハ國但非二好女一出仕、京都へ上ル、縱バ異風ナル男ノマネヲシテ刀脇指衣裝以下殊異相也、彼男茶屋ノ女ト戯ル體有難クシタリ、京中ノ上下賞翫スル事不レ斜、伏見城ヘモ參上シ度々躍ル、

其後學レ之カブキノ座イクラモ有テ諸國エ下ル、江戸右大將秀忠公ハ不二見給一

これでみると後世所謂島原狂言と稱へる傾城買の所作は、既にこの時に始つてゐるのである。この傾城買ひは名古屋山三郎といふ浪人の工夫によるといふことである。山三郎は「猿若大名」といふ狂言を作つて、お國の踊の合狂言とした。又傳介といふものを語らつて滑稽の所作もした。

このお國の芝居は京都の五條橋の東詰にあつたのであるが、後に四條の橋東に移し、又北野でも興行した。これより諸國の遊女がこれにならつて一座を組織し、笛太皷・つゞみを鳴らして歌舞を演じて見物を呼ぶことが流行した。京都の六條の遊女佐渡島正吉は慶長十九年四條河原に舞臺を作つて、遊女を集めて歌舞伎を興行し、後江戸に下つて元吉原に興行して大いに流行した。又幾島丹後守は阿波より江戸に下つて中橋で興行した。その演技のさまは「慶長見聞錄」といふ書に次の樣に出てゐる。

扨中橋にて、幾島丹後守歌舞妓ありと高札を立つれば、人集つて貴賤群集をなし、出づるを遲しと待つ所に、和尙を先立て幕打上げ、橋懸りに出づるを見れば、いと華やかなる扮裝にて、黃金造りの刀脇差をさし、火打袋瓢箪など腰に下げ、猿若を伴につれ、そゞろに立ちうかれたる其の姿、女とも見えずたゞまめ男なりけり、いにしへ陰陽の神といはれし業平の面影ぞや。芝居棧敷の人々は首をのべ、頭をたゝいて我を忘れて動搖する。舞臺に出づればいとゞ猶近まさりする顏ばせは、まことに楊貴妃一たび笑めば六宮に顏色なしといへるが如し。

この吉原は江戸の市外の東南にあつて、その頃始めて葦の生えてゐる原を開いて遊女町にしたのであつて、土地の遊

女もまた紅粉を裝つて歌舞伎を演じたゝめに、見物群集して大盛況を呈したのである。これが後の堺町、葺屋町等の芝居の根源地となつたのである。後、吉原は今の淺草の方面に移つて了つたが、芝居だけはもとのまゝで元吉原の地に殘つたのである。かく江戸へ下つた女歌舞伎の座主(和尚といふ)は佐渡島正吉・幾島丹後守の外に、村山左近・岡本織部・北野小太夫・出來島丹後守・杉山主殿などがあつた。

なほお國歌舞伎の舞臺面を知る材料は、京傳の「骨董集」に載つてゐる阿國歌舞伎圖である。その原圖は今も三原繁吉氏が藏してをられるもので、お國が買手になつて、茶屋のおかゝに言ひ寄るところと、名古屋山三郎の幽靈が出て來てお國と問答するところが殘つてゐる。又京都帝國大學にも「阿國歌舞伎」と題した奈良繪入の書物があつてそのさまを知ることが出來る。又大阪の俳優中村福助氏も珍らしい歌舞伎草子を持つてゐて、それには他に見出されない挿畫があるといふことである。それは老松二本を畫ける野天で、男裝せるお國と同じ姿の山三の他に、猿若と茶屋のおかゝと四人の者が踊つてゐる。そこへお國一座の囃子方二人も參加して踊り、もう一人の囃子方のやうなものが傘を被つてゐる都の女を見物人中よりひき出して、共に踊らせようとしてゐる圖であるといふことである。又この頃の女歌舞伎の演技の模樣は岩崎男爵家藏の二枚折屏風一雙で知れる。一枚には佐渡島女歌舞伎、他の一枚には西洞院の道喜の女歌舞伎を描いたものである。その他村井家、尾州德川家、泉州堺市の山本家等にも女歌舞伎演戯の樣を知る屏風があるといふことである。

しかるにこの女歌舞伎は甚しく淫靡の風を增長し、社會の風紀を紊亂するといふので、寛永の末に幕府は之を禁止した。而してそれに變つて起つたものが若衆歌舞伎といふものである。若衆歌舞伎は三都共に多くの劇場を設けて盛んに行はれたが、衆道の關係もあつて男に代つたといふだけで女と同樣弊害が多かつたから、承應元年六月にこれも禁止されて了つた。江戸の劇場猿若、村山・都、山村の四座に閉鎖を命じたのは同年十二月であつた。しかしその翌年に村山又兵衛なるものがさま〴〵に嘆願して「物眞似狂言盡」といふ名稱で、若衆は前髪を剃り落して野郎頭とし、京都の四條で擧行した。これが所謂野郎歌舞伎である。前髪を剃り落させられた恰好の惡さは、野郎の額の上にくゝり頭巾を置くことによつて多少よくなり、また〳〵若衆歌舞伎にも劣らない弊害を釀し出したが、又一方では鬘や頭巾に工夫をこめ、演出上にも進歩するやうになつた。幕府でもこれに對する禁止の不可能を悟り、數を限つて常小屋を許可し、更に男が女に扮することも許可した。やがて一幕一番であつたものが、寛文年中から二番續三番續といふものが考案され、一番だけのものを離狂言といひ、二番續以上のものには續狂言といふ名稱を與へることになつた。この續狂言が即ち无禁劇なのである。お國歌舞伎から野郎歌舞伎までは實に六十年の推移があるのである。續狂言の創始者は大阪の福井彌五左衛門である。この人は役者であつて又狂言作者である。彼の初作は寛文四年であるといふ。「耳塵集」には

彌五左衛門といふあり、役は花車形にて、狂言作者の名人なり。昔は離れ狂言なりしが、今の二番續き三番續きは、此の彌五左衛門の作なり、即ち『非人かたき打ち』の作者なり。

とある。

寛文九年に都萬太夫・早雲長太夫・龜屋粂之丞・布袋屋梅之丞・村山又兵衛・糸槍權三郎・大和權之助の七人が大座元として七ケ所に芝居をたてることを許された。その後各座に興廢があつて、都と布袋屋とは京都の四條の南側、早雲と

鹽屋は北側にあつて共に四條の大芝居と稱せられた。

大阪に於ては寛永年中に段助といふものが京都から下つて、道頓堀の九郎衞門町の裏の遊女町に場所を構へて、遊女を集めて歌舞伎を興行して大に行はれた。しかしその後女歌舞伎が停止されたので、鹽屋九郎右衞門、その子の福左衞門・大和屋甚兵衞・河内屋與八郎・松本名左衞門・大阪太左衞門等が公の許可を得て、若衆歌舞伎を興行し、又禁止されたので「物眞似狂言記」といふ名で再興したことは、前に述べた京都と同樣である。後大に盛になり、大和屋甚兵衞座は中の芝居となり、大阪太左衞門座は角の芝居となり、その左右にある操芝居と互に繁榮を爭つたのである。

さて元祿時代に名優として名高いものには、京都では水木辰之助・芳澤あやめ・坂田藤十郎・山下半左衞門、大阪には嵐三右衞門・片岡仁左衞門・袖崎歌流・竹島幸左衞門等があつた。

江戸に於ては猿若勘三郎なるものが京より下つて、寛永元年に芝居を中橋にたて「猿若狂言藍」の名稱を以て、若衆歌舞伎を興行した。同九年その芝居を禰宜町に移した。同十一年堺の人村山又三郎なるものが葺屋町に芝居を興した。猿若の方は二代目からは中村勘三郎と改めて、その座をも中村座と稱した。村山の方は二代目から市村羽左衞門と改めて、市村座と稱した。正保元年に岡村長兵衞なるものが木挽町に芝居を興した。その二代目を山村長太夫と稱した。萬治三年に森田太郎兵衞なるものが同じく木挽町に芝居を興した。これが二代目以後森田勘彌と稱した。これが山村座と森田座とである。然るに正德四年に幕府の大奥の老女繪島が、山村座の俳優生島新五郎と通じて罪せられ、座元もこれに連座して遠島に處せられ、山村座はこゝに亡びて、後は中村・市村・森田の三座をば江戸の大芝居と稱したのである。

猿若勘三郎等が江戸へ下つて以來、行ひし歌舞伎は「猿若大名」と「新發意太鼓」などいふ狂言に、當時流行の小唄踊などを交へたものであつて、始めは三味線をも用ひなかつたのであるが、漸次上方から女形の役者が下つて來て、引幕大道具などに三味線を用ひ、二番續三番續の狂言を演ずるに至つた。これはいづれも上方の風を移し入れたものである。元祿時代には既に五番續きの狂言もあつたけれども、なほ最初の俤を存して中入には丹前の所作、總踊が行はれたのである。中村・市村・森田の三座では、興行の際初狂言と稱して、創建當時の狂言を演ずるのが嘉例であつた。即ち、

中村座「猿若」「新發意太鼓」
市村座「海道下り」
森田座「佛舍利」

これである。

京阪の方の歌舞伎は始めから軟かなものが多くて、傾城買の所作事を演じ、その藝風は寫實的であつて、坂田藤十郎の如きは最も之に長じ、三ケ津傾城買の開山とまでほめたゝへられた。「藝鑑」にはこの傾城買のさまを次の樣に記してゐる。

傾城事の狂言、今とは格別の風儀の違ひなり。先づ其の場に口上出て、「只今傾城買ひの始まり。」と觸れてしまへば、村山八郎兵衞といふ立役、買人にて此の出立、加賀の衣裳に、銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる所を、

總身の模樣なり。一尺七寸の脇差を向うへ落ちる許りにぬきさし、左は張臂、右の手に扇の要をつまみ、橋懸りよりゆらり〳〵と出で、正面へ立ちながらせりふに曰く、「八まん之が賈手でやす。」と、扇にて脇差の柄を叩けば、見物一同に「そりや賈人の名人が出たわ〳〵。」と聲々に擧めること、暫らく鳴りも靜まらず。時におくびやう口より、揚屋の亭主、古き淺葱袴の腰をねぢらせ、手拭を腰にさし、貝じやくしを持つて出で、「エ旦那お出でか。」といふ聲の內、扨見物「そりや亭主が出たわ、あの顏を見よ、をかしや。」と笑ふ聲、次のせりふも云ひ出せぬ程なり。漸く笑ひしづまれば、八郎兵衛、「なんとまだ太夫は見えぬか」「イヤもうあれへ、もう追つゝけ是へお出で。」と、橋がゝりをうち眺め、「アレ〳〵只今これへ見えます」といへば、「ヤレ傾城が出てくるわ」と見物皆腰を立てなほし、物をも云はず揚幕を眺めゐる。時に傾城の姿、をかしき衣裳笠入なり。其の時分女形の鬘かくるはたま〳〵にて、多くは花紙を兵庫髷につゝみ、只一人出て、「大じんさまお出でかえ。」といふを、「扨も。」と悅び、大じんと互に手に手を取れば、又わらひ、座敷のあいさつ、一つ〳〵こなしを、どよみをつくりて擧めたり。扨亭主杯をめぐらし、「酒の肴は太夫樣一曲の舞ひ所望々々」とせりふの內、やがてはやし方出でならべば、女形舞の所作あり。これは狂言一番の仕組なり。

これで大體の樣子の想像がつく。

之に反して江戸は、淨瑠璃に金平節のもてはたされた如く、歌舞伎でも勇猛の所作を演ずることを好んだ。この好みに投じたのは市川團十郎である。團十郎が延寶元年に紅粉を全身に塗り、大太刀を横たへ荒事を始めた。これは金平節を學んだものであつて、大いに人氣を呼び荒事師の開山と呼ばれた。

當時の芝居の題目で最も世人の好みに投じたのは曾我兄弟の敵討である。「勝閑擧曾我」は延寶三年山村座で興行された。これが曾我のつゞき狂言の始めである。而してこの以後いづれの芝居でも曾我狂言は、春狂言の吉例として必ずこれを演ずるに至つたのである。

(二) 歌舞伎作者

元來歌舞伎は一齣づゝ離れたものが多くて、役者も一場の連ねせりふを巧みに述べて、喝采を得るのを主としてゐたものである。從つて續狂言となつてより後も、全體の仕組よりも局部の場當りに重きを置いて、役者それ自身とその演ずる人物とを混同して、芝居の中に一身上の私を語るといふ弊が多くあつた。この不都合が一般の無知なる觀衆に歡迎せられたゝめ、益々その弊が甚しくなつた。その他何彼に狂言作者は常に役者に掣肘せられて自由に脚色を立てることがむつかしく、時には役者の注文に依つて仕組を變更しなければならぬ事も多かつたのである。すべて歌舞伎は脚本々位でなくて俳優本位であつた。之に反して淨瑠璃は無心の木偶を對手とするためにこの憂が無かつた。脚本の發達が淨瑠璃よりも遙かに後れたのはこの理由によるのである。かくて狂言作者は役者に使役されたゝめ、淨瑠璃作者よりも位置が低く、人物も學問も劣つてゐた。

上方で續狂言を始めたのは福井彌五左衛門であることは前述の通りである。彌五左衛門の門に金子六右衛門といふ俳優があつて、その門下に富永平兵衛といふものがあつた。これもゝとは俳優で後に狂言作者となつた人で、さきに引用した「藝鑑」の著者である。「耳塵集」に言ふ。

富永平兵衛は彌五左衛門に次いでの作者にて、今顏見世の役者附に狂言の作者と書く事、富永平兵衛初まりな

り。延寳八年の暮の顔見世なりしが、其の當座は諸人擧つて憎めり。それより平兵衛打續き面白からぬ狂言に見物飽き果てぬ。今一入工夫致され能き狂言を致されよと申せしかば、平兵衛曰く、「わろき狂言を出すはよきこゝろならねど、座元衆の大きなる仕合なり。替るたびごとに能き狂言を出し、若し其のよき狂言に見飽きなば、道頓堀に草生ゆべき」といへり。云へば言はなくものか、可笑しき減らず口なり。

即ち彼は狂言作者としてはじめて番附に署名した人である。彼の作には「娘孝行記」「熊野山開帳」「業平河内通」「丹波與作手綱帶」「五道冥官」「日本月蓋長者」「武道遂者」等がある。

又坂田藤十郎のための狂言を近松と共に作つた金子吉左衛門といふ者があつた。同じく金子六右衛門の弟子であつて、「耳塵集」といふ著述がある。「續耳塵集」といふ書には

凡そ新狂言相談極りて後、ひと場づゝしぐみ立てる時、其の役人を呼びよせ、圍居してせりふを口うつしに教へ、一旦はゐる時まで立ち、又小かへしとて再遍稽古し、又次を作者せりふ工夫して口うつし立てる事なり、其の座の立者出る場は、其の立者狂言を仕組みしなり。中興狂言趣向むつかしく成りてより、執筆頭書せよとて、せりふ付のいひ出しを、一くだり程づゝ書きたり。狂言本とて委しく書く事は、金子一高より始まりける

なり。

とある。右の金子一高といふのが「耳塵集」の著者金子吉左衛門で、平兵衛と共に元祿後半の作家である。狂言本はこの平兵衛と吉左衛門とによつて、始めて文字に書き現はされたのである。この二人は脚本作家としての先驅者であつた。「耳塵集」は主として當時の名優坂田藤十郎の逸事を錄したものである。吉左衛門は藤十郎附の作家であつたことは「賢外集」などでも知れる。

江戸に於ては享保以前は文化がまだ開けず、芝居は盛に流行したけれども、專門の狂言作者といふものは無く、多くは俳優の片手間仕事であつた。その中でも有名なのは、萬治寛文の頃芝居の座元であつた都傳内である。寛文四年に「今川忍車」といふ二番つゞきの狂言を作つた。次いで元祿から享保頃までの間には、市川團十郎・早川傳四郎・中村傳七・中村清五郎等いふ人があつた。何れも俳優より出た人であつて、作者を兼ねた人である。初代市川團十郎は三升屋兵庫と稱して「源平雷傳記」「當世小國歌舞伎」「景政雷問答」「和國五翠殿」「傾城王昭君」「出世隅田川」「成田山分身不動」「小栗十二段」「寛濶武藏星合十二段」等を作つた。又中村傳七に就いては「歌舞妓事始」に次のごとく記されてゐる。

正德享保の頃、江戸狂言作者に中村傳七といふ者あり、此の人の作は木に竹を接ぎたるやうなる事をとり組みて、始終理窟詰り、見物よく取るやうに作る名人なり。取りわけ引道具せり出し、押出し、ぶん廻し、引返し等珍らしき大道具仕出し、見物の目を驚かせしなり。あるが中にも、先年中村座にて嫁入角田川といふ狂言に、兩國橋より三圍の堤まで一里程ある川岸の大引道具、大形なる事古今の珍景にて大入せしとなり。

以つて彼が舞臺裝置に新工夫を凝らしたことが知れる。

第四章　後期第一期——明和安永時

一、明和安永時代文學概觀

江戸文學の後期は寛政を境界線として、明和安永時代と、文化文政時代との二期に區分せられるのである。明和安永の時代は元祿時代に對する寛永時代の如く、文化文政時代の盛運に到る準備時代であつて、江戸の文學が京阪のそれに比して隆盛を示した最初の時代である。京阪の文化は享保の頃から漸く東遷の兆をあらはし、明和安永頃に至りてその形跡が愈々顯著となり、文化文政に至つて爛熟の期に達し、天保頃から衰微に向つたのである。京阪文化東遷の兆が現れそめた享保をすぎ、その證跡愈々著しくなつた明和安永の頃になると、京阪の文化は微々として振はなくなつてしまつたのである。しかしなほ和漢學から戯曲・小說の作者に至るまでやはり全く無いのではなくて、相當にはあつたのである。しかしその大勢が西から東に移つたことは、爭ふべからざる事實である。かく京阪文化が東遷すると共に、江戸が上風方の感化を蒙つたことは少くない。享保十九年都一中の門人、宮古路豐後掾が江戸に下つて、その凄艶なる音聲を以て淫靡なる道行心中を語つたところ非常なる喝采を博し、武士までも豐後節の會を催すばかりでなく、太夫の風を模して頭髪や衣服なども文金風（文字金鉢—元文金銀—を鑄造せし時より始つたのでかくいふ）といつて柔弱至極の姿をなし、一般の男女の中にも役者や女郎の風俗にならふものが非常に多かつた。將軍吉宗が主義とした勤儉尙武の風も、大いに上方風に化せられて、元文四年に幕府は風俗に害がありとて、豐後節を遂に禁止する

に至つた。しかしその餘流はなほ絶えなくて、その後身として常磐津が起り、遂に江戸特有の音曲となり、富本、新內の類も亦これから起つたのである。この二流は一時鼎立したので豐後三流といはれてゐる。常磐津はいふまでもなく淨瑠璃節の一派であつて、元文の頃、初代常磐津文字太夫が國太夫節の名を改めたものである。文字太夫は通稱駿河屋文右衞門、文中の號がある。もと京の位牌屋である。宮古路豐後掾の弟子とも子ともいふ說がある。元文の初め江戸に下つて、宮古路文字太夫といつたが、宮古路の名が禁ぜられたので、關東文字太夫と稱した。更に關東の文字も禁ぜられたので常磐津文字太夫と稱したので、常磐津節と呼ばれたのである。安永十年、年七十三で歿した。富本節は常磐津の轉化したもので、寛延の頃富本豐前掾の始めたものである。常磐津と同じく座敷淨瑠璃又は踊の相方として用ひられ、延享寛延の頃から、文化文政にかけて流行したものである。富本豐前掾は通稱福田前司、號は豐洲、江戸の人である。宮古路豐後掾の弟子とも、常磐津文字太夫がなほ宮古路と稱した頃の弟子ともいふ。はじめ宮古路品太夫といひ、後常磐津品太夫と改め、遂に富本節といふ一派をたてたのである。明和元年、四十九歲にて歿。新內節は寶曆の頃、富士松薩摩掾の門人鶴賀新內の語り出したもの。常磐津の諸分派中では最も新しく、曲節悽惋、男女の心中を主として語り、その流行は世上に情死を增加せしめたといはれる位である。かく上方の感化によりて文金風を生じたると共に、幕府の祿米を扱ふ札差の豪奢は藏前風を起し、兩者相俟つて奢侈淫靡の風を作り、その風は當時の洒落本の中に詳しく寫し出されてをる。

次に注意すべきは學問の普及である。八代將軍吉宗が、勤儉尙武の主義に依り實用の學問を奬勵したので、諸種の

科學が勃興して、天文・曆數・本草・醫學等の諸方面に、學者輩出して、耶蘇教の書物以外には洋書の研究も許し、青木敦書を長崎に遣して洋書を學ばしめた程であつた。これより蘭學が次第に開け、明和年中に至りては中津藩の前野良澤、小濱藩の杉田玄白等の蘭法醫が出るに及んでは、ひとり醫學の上ばかりでなく一般文化の上にも大影響を及ぼした。かくの如く諸種の科學が蘭人の手を經て長崎より傳はると共に、注意すべきは當時の漢學に於ける明朝詩文の影響である。由來漢學は「修身齊家治國平天下」の術であつて、倫理經濟の學と考へられ、現に新井白石の如く自ら政治に參與し、又荻生徂徠の如く政論家を以て任ずる者もあつた。所が今や時勢は一變して、純粹の文學として學ぶものが生ずるに至つた。享保の初に徂徠が明の李王の說により、修辭の學を唱へた如きもこの傾向を助長するに大いに與つて力があつた。徂徠門の服部南郭、木下順庵門の祇園南海の如き、何れも詩文書畫を以て一世に鳴つた者である。この二人は文人畫の始祖であつて、南郭は畫名を周雪といひて、又和歌をも能くした人である。寶曆九年、七十七歲で歿した。南海は紀州の人であつて山水墨竹に長じ、寶曆十一年に七十五歲で歿した。これと同時に大和郡山の柳澤淇園も亦詩畫に長じ、着色の密畫を得意とした。かゝる有樣で文徵明や董其昌等の如く詩文書畫に達せる明代文人の風を慕ふもの相ついで出で、明石藩の梁田蛻巖、熊本藩の儒者秋山玉山の如きも亦詩文を以て有名な人である。「漢學の研究が文學的に傾くと共に、從來は度外に於て學者が一瞥も與へなかつた支那小說の研究に從ふものも漸く多く、種々の飜譯が續出するに至つた。」その先驅者は岡島冠山である。この人は長崎の人であつて、始めは通事であつて、後には京阪に移り、江戸にも住んで徂徠もこの人から唐韻や俗語を習つたといふ事である。享保十三年に五十五歲で京に歿した。その著述には「通俗忠義水滸傳」「通俗元明軍記」「通俗明淸軍談」「小說讀法」の著譯がある。之につぎ京都の岡白駒（明和四年七十六歲で歿）が小說や俗語を研究して、支那の短篇小說を撰び集め、訓點を施して出版した。「小說精言」「小說奇言」「照世盃」は即ちこれである。

文化文政に至つては支那小說より換骨脫胎した讀本が多く行はれたが、この時代には飜案したものは少くて、多くは片假名交りに飜譯したゞけのものである。即ち次の如きは是である。

通俗西遊記　寶曆八年
通俗醉菩提　寶曆九年
通俗醫王耆婆傳　寶曆十三年　（都賀庭鐘）
通俗金翹傳　同　年

支那小說流行の機運に乘じて大いに世の評判を得た小說は、都賀庭鐘の「英草紙」である。この人は通稱を六藏といひ、字は公聲、大江漁夫、又は辛夷館とも號した。大阪の人であつて醫を業とし、また書畫をよくし、支那小說に通じた人である。上田秋成は漢學をこの人に學んだといふ。「英草紙」は寬延二年の出版であつて、署名は近路行者、千里浪子といふ名を用ひてゐる。その後篇の「繁夜話」は明和三年の出版であつて、兩者共に九篇の短篇小說を集めたものである。淺井了意の「伽婢子」「犬張子」の系統をひいて異事奇聞の物語であるけれども、文章は漢文の脈を混じて簡勁である。文中評論多く、その材料は多く支那小說の「今古奇觀」などから飜案したものである。世間はこの書を讀本の元祖と稱してゐる。上田秋成の有名な「雨月物語」はこの書の體裁に習つたものと思はれる。この外に「莠句冊」といふ同類の小說もある。

次に國文學の方面を見れば、元祿の頃はこれに携はる文士の素養極めて淺薄であつて、僅かに俳諧師的學問の應用にすぎなかつたので、古典や、古語の智識の乏しいことは當時の小說によく表はれてをる。しかるにこの時代以後は、古文學の普及に伴ひ、文筆の士にして之に心を潜めるもの、學問ある人にして小說の筆を執るものなどが、漸次多くなつて來たのである。たとへば上田秋成の如きはその適例である。彼は眞淵の門人の加藤美樹について國學を修めた人である。又建部綾足も一時眞淵の門にあつた人である。「西山物語」といふ小說を書いて盛んに古語を用ひ、又「本朝滸傳」といふものをも書いた。第二期に至つてはこの傾向愈々盛んになり、村田春海の「筑紫船物語」、石川雅望の「飛驒匠物語」「近江縣物語」の如く、國學者の書いた小說が續々現はれるに至つたのである。

漢學に詩文を專門としてゐる文人風の起つたのは寶曆の頃始つたのであるが、爾來その傾向は益々盛であつて、服部蘇門の長嘯社、江村北海の賜杖堂、片山北海の混沌社、安達清河の市隱堂など、詩社を結ぶことが起り、又蕪村、大雅の如く元明文人の畫を唱道するものも多くなつた。

「學問の普及と風俗の頽敗は相俟つて、極めて不眞面目な遊戲文學の流行を促すに至つたのは注意に値する」。狂詩、狂歌、川柳、洒落本、黃表紙等片々たる輕薄文學は、みなこの風潮に伴つて起つたものであつて、洒落本の中に梵字や唐音を使用して、釋迦の道行、孔子の茶屋遊びを描き、狂詩、狂文に於て盛んに支那の故事典故を應用せるが如きは、みな學問と道樂との結合を知るべき適例である。すべて敎權を無視し、理想を玩弄物にする風潮が盛となり、大學や中庸の文句をもじりて遊廓のことを書き、或は〇〇大神と孔子と釋迦の三人が吉原遊びをやることなどを筆にした。今これ等の文學の背景となつてゐる政治風俗上のことを一瞥してみよう。

英明なる將軍吉宗についでたつた家重は柔弱多病であつて、自ら政治をみること能はざるより、側用人が勢力を得て、前代の勤儉尙武の風次第にゆるみ、京都では浪人の武內式部が公卿の間に遊說して王室の衰微をなげき、今日の如く將軍ありて天子あるを知らざる世は未だ曾つてない。これは畢竟上は天子宰相より諸卿に至るまで學問をしないためである。若し君臣ともに學問があつて古今の大勢に通じたならば、公家一統の世とならん事は疑を容れない。といふことを盛に說いたのである。當時關東の勢の盛大を見て不平の念のある公卿はこの論をきいて、感慨にたへず、往々學を講じ武を習ふものがあつた。桃園天皇もひそかに式部を召してその講義を聞かうとせられるに至つた。幕府はこの事件に關係せる公卿を或は流し、或は禁錮に處し式部を追放に處した。次いで明和四年には藤井右門、山縣大貳が勤王の說を鼓吹したゝめに死刑に處せられた。次いで寬政五年には尊號事件のために公卿が罰せられた。かくして公武の間の感情が漸く圓滿を缺かうとして居る所に、國學者や水戸學者の歷史的尊王說が次第に盛になつて、幕府にとりて恐るべき勢力が漸く增加し來つた。寶曆十二年家治が將軍となり、田沼意次父子並んで政を執り權勢並びなく、政治はみな賄賂情實によつて行はれたのである。意次は將軍の嬖妾津田氏と結託して自ら得た賄賂の半を大奧に送りその歡心を買ひ、また將軍が繪を好むにつけ入り、狩野榮川等を將軍に侍らせて、繪事に耽らせ、少しも世間の事を知らせなかつた。意次の賄賂をむさぼる方法は、先づ大名に向ひ君はなにがしの子孫である、故に祖先と同等の地位までのぼるべきであるとてその心を動かし、賄賂の來るのを待ちて官位をすゝめるのである。而して彼自ら辨じていふには、金銀は人の生命にも代へ難い寶である。これをなげだしてまで奉公したいといふ人であるから、その人

は上に忠誠であること疑なしと。堀田相模守は三千兩で大阪城代の職を得た。一度意次に面會しようとして取次に百二十兩を贈つたけれども、少額だといふので面會が許されなかつた。田沼の紋所は九曜星であつた。この紋所ある贈物が賄賂用に製造されるのを見て、商人は九曜は日本人の好む模樣と考へ、この模樣ある織物器物を輸入したと言ふ位である。以てその一斑を知ることが出來よう。

又當時權門駕、權門師といふ名稱が行はれた。これは權家に出入するための乘物と、權家に出入して諸侍の立身出世の媒介をなす人とを指した名稱である。

「かくて上下の奢移遊惰は、元祿の初期にも過ぎ、八代將軍が苦心して養成した勤儉尚武の風は全く破壞され、諸侯は財政窮乏して金錢を大阪の豪商から借りて、一時の急を救ふものが多くなつて來た。併し借用はするものゝ大抵は返濟の道が立たないで、安永・天明の頃には豪商達ももはやその命令には應じないため、金融は逼迫して諸侯の困難は一層はげしくなつたのである。且つ田沼執政の間は、氣候不順であつて水旱・地震・噴火等毎年の如く起り、こと に著しいのは、安永元年の二月にあつた大火である。これは明暦以來の大火災と稱せられるもので、燒失せるもの七百町、死傷二萬人と稱せられたものである。天明三年七月には淺間山の大噴火があり、同じく六年七月には江戸及び近傍の諸國に大洪水起り、天明の末年には大饑饉を生ずるに至つた。されども意次は一切將軍の耳に入れないで、たまたま小姓の小笠原某といふものが將軍に諸國の洪水の話をしたといふので、之に閉門を仰せつけた位であつた。その他田沼は吉野の金峯山から金銀を採掘し、印幡沼を埋立て、又隅田川の中洲を築き、神社佛閣の門前に新地を拓いて茶屋を建てしめてその地代を納め、大阪の豪商に二百萬兩の上納を命ずる等、常にお爲お爲と稱しては私利に汲々としてゐた。かくの如くであるから幕府の威嚴は全く地に墮ちて、諸侯は往々にしてその命令を奉ぜざるに至つた。且つ幕府にありて事務をとつてゐるものは無學無識であつて、儒者は藝人の如く待遇され、聖堂なども無用の長物であるから之を廢しよう等といふものもある位であつた。この當時の有樣の一般は、樂翁公にあげられて目附役となつた守山源五郎といふものゝ「海士の焚く藻」といふ隨筆に見えてゐる。それに當時の旗本の有樣をかいて次の樣に記してある。

世の有樣は下方(しもがた)とて歌舞伎役者芝居にて打ちはやす拍子をこゝ家々にまねて、夜に入ると若きともがらより合ひより合ひはやしけり。歌舞伎狂言も歷々の人集り自身にまねて興行したり。もとより博奕は言ふに及ばず、又女藝者といふもの殊の外流行して下町山手いづちとも差別なく、少しも見めよき娘はみな女藝者にしたてたり。

かくの如く市內到る處に私娼を生じ、旗本の士はこの社會の通人たる名を得ることを以て名譽とし、四千石の旗本でありながら遊女と心中するものさへ出來た位であつた。堺町や木挽町には男娼をもてあそぶ御殿女中があり、所謂十八大通と稱する道樂者が起るに至つた。かくて江戸の町には歌舞伎、遊廓が盛に繁昌し、巽の里といはるゝ深川は、北里といはるゝ吉原と相競ひて、一は妖艶一は洒落、一は色を重んじ一は意氣地を尙び、大名の留守居役や、藏前の札差などが豪奢をきそふ所となつた。而してかういふ色里の地で第一の客としてあがめられるものは、金錢を湯水の如くに浪費する分限者である。されば武士も之を羨み、武家の風俗を野暮無粹とあざけり、柔弱なる町人の風を眞似刀や脇差も中身の利鈍は問ふ所にあらず、專ら外面の裝飾に意匠を凝らし、淨瑠璃や三味線をもてあそび、通人を以

て自ら任じ、元結を多く卷きつけて髷の根を高くつき立て、又羽織の紐の極めて長きを先の方にて小さく結び、大小を落し差しにして懷手をなし、駒下駄をひきずりながら市中を徘徊したものである。女子は燈籠鬢といつて兩鬢に鬢張りを入れてふくらまし、毛筋をうすくすかしたものである。黄表紙、洒落本、狂詩、狂文などいふものは、この時代の風潮より發生したものである。

かくの如き政治上社會上の有樣に通せずしては、この時代の文學は解することが出來ないのである。

二、京阪文學の形勢

江戸新興の小說を說くにさきだつて京阪文學の形勢を一瞥しておくことにする。

八文字屋本は其磧の歿後多田南嶺が筆を執つた。南嶺は義俊といひ秋齋又は桂秋齋と號し、攝津の人で京に遊學し壺井義知の門に入りて有職故實の學を修め、博覽多識を以て稱せられた人である。併し才に任せて世を欺き自說を立てんが爲に、種々の書物を作り置きて之を古書と稱して引用するが如き卑怯なことをした。後年師匠から破門されたのもこのためであらう。又俳諧では男鈴と稱して當時有名なる俳人の半時庵淡々と親友であつた。寛延三年に五十三歲で歿した。八文字屋本に筆を執つたことはたしかであるが、署名には八文字屋の代々の名のみが記してあるから、どれが南嶺の作であるか明かでない。唯その死去の翌々年の寶曆二年出版の「世間母親氣質」には南圭梅嶺翁と書いてある。これは恐らく南嶺の文字をほのめかしたものと察せられる。この外

武遊双紙（ふたつぶみ）　（元文四年）

蠟倉袖日記　（寛保二年）

等はこの人の作であらうと言はれてゐる。明和十年の八文字屋本「俄仙人戲言日記」の序に「西鶴其磧が筆まめに面白い事のありたけを書きつくし、南嶺が口車くる〳〵廻る舌の尖で診しき事をねぶりまはしたあとへ云々」とあるから、南嶺が八文字屋本に筆をとつた事は疑容を入れない。

八文字屋は自笑の歿後、その子其笑あとをつぎて凌雲と號した。寛保元年の「善光倭丹前」に始めてその名を出してゐる。其笑は寛延三年歿。その子の瑞笑は白露と號し、延享四年「彩色歌相模」に始めてその名が見えてゐる。明和三年に歿した。瑞笑の弟を自笑といふ。始めは素玉といひて寶曆八年の「契情蓬萊山」に始めて名を出してゐる。然るに明和四年になつて八文字屋は升屋彦太郎なるものに自分の家の版を讓つた。爾來芝居の評判記はなほ八文字屋より出せるも、小說の方はこゝに終末を告げたのである。

寛政初年の京都の大火に八文字は類燒して家道益々衰へ、大阪に下つて心齋橋筋、安堂寺町にかすかに渡世して評判記のみは細々ながら出版せるも、文化三年に自笑死してその子なにがしは放蕩無賴で產を破り家を失ひて評判記をも出すことが出來なくなつたのであるが、この自笑に小僧の時から召し使はれた卯作なるものが評判記の作り方を覺えて、梅枝軒泊鷺と號して師匠兼主人なりし自笑と名を連ね合作の樣にして評判記を出したが、天保九年十年の頃にその者も死んで八文字屋は全く滅亡して了つたのである。

かくの如く八文字屋といふ書肆は亡んで了つたのであるが、所謂八文字屋本なるものは、明和四年以後も續々出たのである。

南嶺の後に和譯太郎なるものがあつた。これは上田秋成の異名であつて、文章輕妙圓轉滑脫でかねて諷刺鋭利であつた。その作は

諸道聞耳世間猿　明和三年
世間妾氣質　同　四年

であつた。

又京都には永井堂龜友といふものがあつた。始めは兵作堂ともいつた。この人の作は

風流虫合戰　寶曆十二年
風俗誹人氣質　同
當世銀持氣質　明和七年
風流茶人氣質　同
世間姑氣質　明和九年
世間旦那氣質　安永三年
世間仲人氣質　同

等十數種の多きに及んでゐる。

大阪には增舍大梁なるものがあつた。

世間化者氣質　明和七年
當世傾城氣質　同　八年

等を著した。

この外明和、安永、天明にかけて「何々氣質」といふ名稱の書物が多く出てゐるが、何れも拙劣にして多く論ずるに足らざるものである。

三、教訓物の變遷

當代文學に於て注目すべきものは教訓ものゝ變遷のあとゝ、讀本の起原とである。まづ前者から概觀してみよう。教訓ものは前期の第一期に於ては、教訓ものと小說との境界判然たらず、純粹の小說といふべきものゝ少なかつたことは既に述べた通りである。第二期に至つても、西鶴の作品や八文字屋本の類は、町人に對して或意味に於ては教訓の意を寓しない譯ではなかつたけれども、その寫す所は主として實社會の實相であつたがために、事實としての教訓の效果は少なかつたのである。然るに貞享・元祿を去ることやゝ久しくして世上の風俗人氣も改まり、寶曆の頃になつて一時盛んに教訓物が輩出した。これ等は純粹の小說といふことは出來ないもので、平民的通俗倫理を以て文學又は社會の批評をしたものである。少しく溯つてこの種類の書の發達のあとを尋ねてみよう。

正德・享保の頃に增穗殘口、井澤長秀なる人があつた。殘口は大和蟠龍子といつて、もとは豐後の人で京に上つて近衛家に仕へた。最初は日蓮宗の僧侶であつたが還俗して神道を稱へて講演を開きなどして佛教を排斥した。

異理和理合鏡
有像無像小社探
直路の常世草
神國加魔祓
神路の手引草
つれ〴〵しのゝめ
死出の田分言

以上を殘口八部の書といふ。右の中で小說の體をそなへたものは「艶道通鑑」一部のみであつて、これは神代以來の種々の情話をしるしてそのあとに道德的批評を下したものである。その他のものはすべて一種の神道說である。この人の思想は一風變つてゐて面白いところに特色がある。

井澤長秀も蟠龍子と號し熊本の人である。細川家に仕へて鐵砲頭をつとめ武術に長じた。神道にも志して山崎闇齋の門人について學んだ人である。殘口の神道は蕃山の系統である。この人の著述には次の樣なものがある。

本朝俚諺
廣益俗說辨
武士訓
菊池佐々軍記

この中でも、「廣益俗說辨」は廣く世に行はれたもので、古來の傳說を歷史によつてその眞俗を辨じ、倫理的批判を下したものである。

右の兩人の外に丹羽佚齋、靜觀房好阿などいふ人があつた。共に敎訓物の作者である。

丹羽佚齋は江戸の人であつて號を樗山といひ、著作には次の如きものがある。

田舍莊子
雜篇田舍莊子
六道士會錄
天狗藝術論
英雄軍談
田舍一休
從好談

中でも「田舍莊子」はもつとも流行したものである。これは禽獸虫魚に擬した寓言で莊子の主意を通俗に說いたものでこの頃の敎訓物の中では最もすぐれたものである。これ等敎訓物の好評を博したゝめに「御伽夜話」「面影莊子」などの敎訓物相ついで世に出るに至つた。これ等はいづれも時代は正德・享保の頃のものである。

次いで寶曆の頃に至つて靜觀房好阿なるもの〻

當世下手談義

が出て教訓物は一層世に流行するに至つたのである。かく教訓物が一時に流行するに至つた由來は、將軍吉宗が學問道德を奬勵せる結果と、心學者の石田梅巖や、禪宗の白隱和尙等によつて說かれた心學及び禪學の感化が與つて力があるのである。「當世下手談義」といふ書は洛陽の沙彌靜觀房好阿と署名して寶曆二年江戸で出版されたのである。この人の出生は京都らしく思はれるが、ある書によれば江戸の兩國橋の近くに住む山本善五郎といふ手習師匠をしてゐた男であるといふ。この書は心學道話の如く積極的に倫理道德を說いたのではなくて、社會の風俗、芝居、文學等の缺點を面白をかしく指摘して人をして不知不識の間に道に進ましめようとしたものである。「下手談義」といふ名稱も白隱禪師の「辻談義」の名に基いたものである。この書が世に出づるや非常な勢で流行し、模倣の作が多く出るに至つた。何れも江戸の出版である。寶曆三年には

當世辻談義

といふ書が出て「下手談義」を反駁した。

又伊藤單朴といふ人が「下手談義」に擬して同じ寶曆二年に

教訓雜長持

を著した。單朴は江戸石町の人で、正德年中八王寺のほとり青柳村に隱居し青柳散人と號し、寶曆八年七十九歲で終つた。なほこの人の作には次の如きものがある。

錢湯新話

教訓差出口

楚口良探

「錢湯新話」は三馬の「浮世風呂」を呼び起すもととなつた。

かくの如き教訓物の流行はひきつゞき明和年間に及びてこの類の書が絕えず出た。而して時代の風俗や人情が頽落すると共にこれ等の教訓物も次第に不眞面目となりて、花柳社會の內面を面白をかしく說き立てゝ教訓といふよりも寧ろ惡德宣傳の效果の方が著しかつたのである。この傾向がやがて風來山人の戲作などを導いたのである。つまり教訓の書から誨淫の書を出すやうになつたのである。

四、讀本

(一) 讀本の起原とその傳統

讀本作者には上田秋成と建部綾足とがある。讀本といふのは元來實錄物の系統に屬せるものであつて、歷史的の人物事件をかりてこれに想像を加へ脚色を施したものである。寶曆以後實錄物が流行して、御家騷動や仇討の類が世の嗜好に投じ、元祿時代の浮華輕佻の反動として擊實素樸の文學を喜ぶに至つたのである。これは儒教が人心にしみこんだ影響といふべきである。之を譬へていへば、元祿時代は恰も人生の春に醉へる青年時代の如く、當代はまさに四十歲前後の分別盛であつて、情熱漸次乏しくなり、活氣を減少して來た時代といふべきである。この時代の反映が讀本出現の現象の上にも認められるのである。

實錄物には戰記・仇討・武者修業・一代記・御家騷動等の種類がある。これは小說や淨瑠璃等の假空的要素の多いに對

して實錄と稱したのであるが、これも亦巷談街說を潤色したものであつて、正しい歷史的事實では無い。たゞこれを事實らしく見せかけるために文章も修飾も加へず、單に事件を知らせるのを目的としてをる。從つて小說は作り話であるからためにならぬといふ人々も、實錄物は事實なりと信じて一種の興味を以て讀まれたのである。

大阪で淨瑠璃作者が操芝居の衰ふるに至つて、糊口のために實錄物に筆を執つた。實錄物の中で最も行はれたのは「太閤記」である。これは中心たる人物が偉大なる人格者であると共に、僅に二代でその家が亡びてしまつたことが强く世間の同情をひいたのである。寛政の頃岡田玉山が「繪本太閤記」を出して十二册づゝ一篇として七篇まで出した。これが甚だ行はれたものである。たま〳〵歌麿が錦繪に「太閤五女花見圖」を出した。これが幕府の忌諱に觸れて罰せられ、惹いて玉山の「太閤記」にも及びて絕版を命ぜられた。後遂に文化元年には天正以來の武者の名稱を出すことは勿論、旗印、家の紋などを表すことが一切禁ぜられた。かくて後實錄物は寫本として貸本屋から民間に貸出したのである。

讀本はこの實錄物に小說的趣味を加へ、その材料は歷史又は口碑に傳へられた傳說で、當時を去ることやゝ遠き足利時代のものをとつて、その文章は和漢を調和して雅俗折衷の體を用ひたのである。讀本の先驅なる「英草紙」のことは前に述べた如くである。この影響をうけて起つたのは秋成の「雨月物語」である。又同時に綾足の「西山物語」といふものがある。共に明和五年に出來たものである。この兩書は何れも後の讀本の大家である馬琴に著しき影響を與へたのである。秋成・綾足の二人は共に畸人であつて性行閥歷も亦尋常でない。共に多藝多能であつて、秋成の煎茶や綾足の畫は素人以上である。又ともに强情であつて人の下に立つことをいさぎよしとしない點などもよく似てゐる。

(二) 上田秋成

秋成は享保十九年大阪に生れた。彼の出生素姓は能く分らない。父母も詳かでないが或は母は曾根崎新地の藝者であらうといふ。これは當時一般の風說であつたものと見えて、

三井は浪人者、白木屋は煙管屋、鴻池は小酒屋、小橋屋は古手屋、辰巳屋は炭屋なり、神代からつゞいてある家のやうに誇ることおかしゝ、老はにくんで茶屋のはてじやといふ、いや太皷持の古なつたのじや、答へる、穢多でさへなけりや御免の人交り、何にせよかし、只今は山の大將我一人、お相手はどざらしやるまい。

と辯駁してゐる。かうした弱い强がり樣はやがて一種の性癖を彼の上に形作り、世に背き人にすねた態度をとらしめるに至つたのである。

彼は四歲の時生母の手を離れて、堂島の商賈上田家に貰はれた。五歲の時惡性の痘を患つて殆ど危かつたのであるが、漸くのことで恢復した。六歲の時養母は死去した、父は程なく後妻を娶つて秋成は三度目の母に養育されたのである。少年時代の彼は虛弱で時々驚癇を發したりした。しかし父の後妻の慈愛によつて漸く人となつたのである。けれどもかゝる虛弱な體質で富裕な家庭に育つたものであるから、青年時代は遊蕩にふけつて家を外にすることが多かつた。然るに廿六歲の時には養父も死んだので一家の主人として牙籌と親しむに至つたのである。明和八年三十八歲の時火災にかゝつて家產を全部失つて了つた。このため獨力家計を支へなければならなくなつたので、彼は醫を學んだ。所々に移轉すること十回以上にも及んだ。四十二歲の時大阪に出て開業した。かくてまづ可なりの生活をしてゐ

たのであるが、時々見そこなひ等をやる事があつた。五十五歳春醫業を廢して再び田舍住居をなし、六十歳の時京都に移り煎茶や著述で糊口をしのいだ。文化六年六月廿七日、七十六歳で死した。京都南禪寺の西福寺に墓がある。通稱を東作といつたのであるが、後に餘齋と改めた。無腸居士、鶉居、等その號である。

既に述べたやうに彼は青年の頃は放蕩であつて學問もせず、唯天性の才にまかせて道樂半分に歌をよんだり俳諧などに遊んでゐたのであつたが、三十三歳の頃(明和三年)から國學に志し加藤宇萬伎をその師とした。秋成はこの良師を得て趣味は益々向上して古典的となり、明和五年三十五歳の春には有名な「雨月物語」が出來たのである。

彼は神經質のすねものであつて、晩年はいかにも清貧をたのしんだ風流漢のやうに見えるけれど、その實は偏屈と貧乏が自慢の名譽心の強い男で、私生兒といふ先天的の僻みに加へて、若い時の我がまゝ育ちが累をなして、人とよく喧嘩をしたものである。從つて友人といふものは少く、京都の漢學者である村瀉樗亭、畫工である呉月溪、大阪の書家である森川竹窓、その他小澤蘆庵、伴蒿蹊等數人にすぎなかつた。江戸の文人で親しく交際したのは蜀山人と村田春海位である。妻は京都九條の農家の女であつたが、秋成にならつて學に長じ文も能くし、晩年には剃髪して瑚璉尼といつた。秋成より四年早く死んだ。晩年には京都丸太町鴨川の東岸にあつた羽倉信美(稲荷神社の神官)の邸を借りて移り住んだ。「京攝戲作者考」には

非藏人羽倉譽前の屋敷の内に四疊半の家を建てゝ住す、常に粥をすりて土鍋に入れ焚て食す、菜は胡麻鹽とひしこ味噌といへる二味に過ぎず。

と記してある、又「壁書」に

家寶かんしやく丸

第一　いぢをつよくしはらのさむきにこたへべし

禁　物

酒　肴　たばこ　油　阿諛訓に云アブラ

すべてのものくさきをきらふ

文士　茶人　財主　臭氣不可對

出店類藥無之候

をかゝげたのもこの邸であつたと思はれる。かくの如く彼は誰にでも惡口をいふのが常であつた。號の無腸も蟹の異名なればよこばひにて眞直の反對である。彼の自畫讃(「秋成遺文」卷頭の寫眞版參照」にも

冥福藏天眞　厄貧顯奇才

と書いてゐる。又彼の性質は晩年の隨筆である「膽大小心錄」(文化六年歿年の筆)に文人畫家をあざけつてゐるのでもよく分る。(彼の傳記性格等に就いては拙著「秋成遺文」の「上田秋成傳」及び「江戸文學研究」中の「綾足と秋成」參照)

彼の著書を年代順にあげてみると左の如くである。

諸藝聽耳世間猿　明和三年刊

世間妾氣質　同　年成る

雨月物語　同　五年成る　安永五年刊

春雨物語　文化三年刊

せぶりの翁物語

癇癖談

藤簍冊子

「諸藝聽耳世間猿」「世間妾氣質」及び「雨月物語」はいづれも中年の作であつて、晩年には國語を主とした著書が多いのであるが、それでも「癖癖談」「春雨物語」等の作もある。

「雨月物語」は「英草紙」（寛延二年都賀庭鐘著）をまなんだものであつて、その中には「白峯」「菊花の約」「淺茅が宿」「夢應の鯉魚」「佛法僧」「吉備津の釜」「蛇性の淫」「青頭巾」「貧福論」の九章を收む。「白峯」といふ一章は撰集抄と「太平記」の六本杉とに基いたものである。馬琴は再び之を「弓張月」にとつてゐる。又「菊花の約」は「英草紙」の豊原兼秋の話に基いたものである。「吉備津の釜」はその後半は「牡丹燈籠」により、「蛇性の淫」は「西湖佳話」に基き、「夢應の鯉魚」は支那の怪談に據つたものである。何れも怪異なる話を含み凄慘幽玄の趣が深い。

「春雨物語」はもと十卷あつたのであるが、いまはその半のみ傳はつてゐる。擬古文の短篇集である。

「癖癖談」は寛政以後の作とおぼしく諷世嘲俗の文であつて、體裁は「伊勢物語」に擬したものと思はれる。これは六樹園（石川雅望）の「しみのすみか物語」と類似した作である。

この物がたりは、朱雀のくつわが塗桶の中に、へしこめてありしなり。作者は誰とも記さゞれど、傳へていふは、在郷の中將とかや、さだめて、田舍道場の新發意どのが、やつし腹して、才まぐるものか。文辭の京めかせると、故事を雅俗に摘み來れるとを、これやそれと聞のつぶての、當粹なかしら書して、おのが洒落社中にひけらかさむとす、されば吾妻に京傳あり、こゝに都のやぼ傳がまはらぬ筆は、春日野の若紫のすりこ木ぢやまで。

これはその序文である。

この外に、「せぶりの翁物語」といふものがある。茶の由來をかいたものである。

由來雅文で小說風の作をなしたものには、これよりさきに荷田在滿の「白猿物語」「落合物語」がある。綾足も亦これをかいた一人である。

三　建部綾足

綾足は名を英親、字を孟喬といつて、はじめは淺草の門前に住みて、風の神の袋を脊負つてゐる形が面白いといふので凉袋と名のつたのであるが、後に凌岱の字に變へたのである。歌や和文では綾足と稱し、畵の方では寒葉齋と號した。もとは津輕藩の家老職の二男だといふが、早くから國をとびだして長崎へ行つて繪を習つたり、東福寺の僧になつたり、又還俗したりした。俳諧を學びて生計を立て、延享四年二十八歳の時始めて「俳諧南北新話」を著し、「蕉門頭陀物語」「俳諧明題集」等の著述がある。後一朝眞淵に就いて古學を修めてから尙古主義にかぶれ、俳諧を以て日本武尊と火燒翁との唱和に始まるとなし、之を旋頭歌の片歌といふからには、十七字十四字のものは短歌の片歌である

と稱して、

片歌二夜問答

同百夜問答

片歌道のはじめ

の書を著し、片歌の始祖の意で日本武尊の薨地伊勢の能褒野に碑を立てたり、華山院右府に片歌道守といふ四字の染筆を請うて自家に掲げたりして、自ら片歌の元祖を以て任じたのである。かゝる一種の片歌運動を起したのであるけれども、識者の冷笑を買つたばかりで一向反響がなく、僅かに相模・下野・上野邊に多少の信者を得たのみで全く失敗に終つたのである。後は主として畫を以て生計を立て

寒葉齋畫譜

漢畫指南

孟喬雜畫

等の著述をなしてゐる。安永三年に五十三歳で歿した。

彼の小說には「西山物語」と「本朝水滸傳」とが有名である。

「西山物語」は明和五年の出版であつて、これはその前年に來て自分の弟子に古き言葉を知らしむるために作つた由の序文があつて、その文章中の古語には出所や割註が施してある。その結構は、京の西山に大森七郎といふ武士があつて、その妹のかよといふ女が親戚の大森八郎の息である宇須美といふものと情を通じたのである。所が七郎の家は零落し、八郎の家は富豪であり且つ傲慢な男であるといふ樣なところから行きちがひを生じて、二人の結婚はまとまらなかつたのである。七郎は憤慨して妹を殺して首を八郎の所に届けたといふ事件であつて、さして面白いものではない。これは當時京の西八條村にあつた事實に基いたもので、當時は「傾城大和草紙」といふ芝居にも仕組まれたもので、秋成にもこの事實をかいたものがある。唯異色とすべきは通篇擬古文體をとつてゐる點にあるのである。

「本朝水滸傳」は十册あつて安永二年の出版であつて、一名「吉野物語」ともいふ。吉野味稻の條を卷頭に出してゐるからである。惠美押勝、道鏡、清麿、道祖王、鹽燒王、不破內親王、豐成等を人物として、一篇支那の水滸傳に擬して作つたもので、萬葉集にも出てゐる吉野仙柘枝の故事をとり、味稻王が柘枝仙女と契つて設けた百人の子が、四方に散じて英雄となり、終に江州の伊吹山に集るといふ趣向である。その趣向たるや以上の如く極めて幼稚であるけれども、とにかく水滸傳を日本に翻案した最初のものであるといふ點で有名である。馬琴は之を評して

いと淺はかなる筋多くしてたくみなりと思ふ筋なし。たゞその趣水滸傳を摸擬したれども、水滸の古轍を踏まずして別に一趣向を立てたるは當時の作者の及ばざる所なり、實に今の讀本の嚆矢なり。

この後水滸傳の翻案物漸次世に出るに及び、ついで安永五年に佐々木天元の「日本水滸傳」、天明三年に椿園主人（本名浦邊源曹）の「女水滸傳」等みなこれに刺激されて出來たものである。殊に馬琴の八犬傳の如きはこれに暗示を得たものである。

この外に綾足には「漫遊記」五册がある。綾足の作として彼の死後寛政十年に出板せられた。諸國漫遊中に聞き集めた珍事異聞を記したものである。

さて狹義の讀本の起源は既に述べた樣に大阪の都賀庭鐘である。つゞいて上田秋成がある。けれども共に上方のことであつて江戸のことではない。眞に讀本の繁榮を極めた關東に於てこれが先驅をなしたのはこの建部綾足であつた。

つゞいて平賀鳩溪が擧げられる。この二人は江戸讀本の先驅者であると稱せられてゐる。綾足は多藝多能なる點に於て秋成に似てはゐるが、文才に於ては到底秋成の敵ではない。たゞ擬古の形式を以て世人を驚かさうとしたにすぎないのである。この點、例の片歌の宣傳を以て人を瞞着しようとしたのと同一轍である。

(四) 平賀源内

綾足と並んで江戸讀本の祖と稱せられる平賀源内は讃岐の志度浦の人である。名は國倫、字は士彛鳩、溪と號し風來山人、天竺浪人、紙鳶堂、森羅萬象、福内鬼外等の別號を持つてゐる。父は高松藩の小役人であつて源内の二十歲の時に死んだ。妹に養子をして家をつがしめ、廿五歲の時江戸に出て漢學を服部南郭に學び、國學を眞淵にうけた。眞人淵に入門したのは綾足と同年同月である。又本草學を幕醫の田村元雄に學び出藍の譽があつた。元來發明心に富んだであつたので、西洋最新の輸入物も一見してその構造製法を知り、しば〳〵之を模造したのである。例へば火浣布、エレキテル、寒熱昇降水、金唐革の如きこれである。その他人參の培養、甘藷の栽培法、砂糖の製法の改良、油畫、さては源内櫛、源内燒の工夫等まことに多才多能人を驚かすものがあつた。彼はこの腕と頭とを以て時の老中田沼に仕へて大いに積極的にその才能を振はんとしたのであるが、高松藩主が他家に仕官することを許さなかつたので、その志を果さず、不平を戲作にもらしたのである。晩年發狂して人を害しそのため入牢し、安永八年五十歲前後で歿した。

次に彼の著作に就いての概略を述べよう。

「根なし草」は寶暦十三年の作であつて、前後兩篇各々五册ある。この年の六月に荻野八重桐といふ役者が隅田川に船遊び中あやまつて水に落ちて溺死した事件があつた。風來はこれを材料として閻魔王が當時有名なる女形の瀨川菊之丞の美色に戀慕して河童に命じて冥途に連れて來させようとした、そこで菊之丞の弟子である八重桐がその身代りになつて死んだといふことにして、滑稽なる趣向を立てたものである。この書大いに行はれて彼自らのいふところによれば三千部以上賣れたといふことである。明和四年に市川雷藏（柏車）といふ役者が死に、その翌年に坂東彦三郎（薪水）といふ役者が死んだ。風來はまたこれ等の人のことを「根なし草」後篇として書いた。

「風流志道軒傳」は「根なし草」の前篇と同年に書かれたものである。志道軒といふのは當時淺草の境内にあつた講釋師であつて有名なる者であつた。風來はこの志道軒に托して異國巡りの趣向を構へたもので、後の遊谷子の「和莊兵衛」馬琴の「夢想兵衛」の手本となつたものである。ガリバーの旅行記の影響とも考へられるが、それと明かな證據は無いのである。尤も古くから島巡りのことは言ひ傳へられてをるので、足利時代には「御曹司島巡」などもあるのである。

風來の狂文集に「六々部集」「飛花落葉」なるものがある。

世間では「そしり草」と言つて歷史上の人物をそしつたものを風來の作と言つて居るけれども、これは江戸の講釋師馬塲文耕の作であつて風來の作ではない。

又明治になつて覆刻された漢文の「風來山人春遊記」なるものがあるけれども、これも風來の作ではない。これは奥州の學者熊坂臺州の作であつて「魚籃先生春遊記」といふものである。これを名を變へて出版したのである。

風來の奇才は行くとして佳ならざる所はなかつたのである、そのとるべきものは縱横なる滑稽の才と痛快なる嘲罵

の筆とである。既に述べた樣にこの風來を綾足に並べて江戸讀本の祖と稱するのが一般の說である。しかし、これは風來の著述が繪人の半紙本であつて形式が後の讀本と同體裁であるところから來た誤りである。風來の作品は、時事を材料として滑稽をほしいまゝにせるもので、後の黃表紙や滑稽本にこそ直接の影響はあるけれども、歷史小說なる讀本には殆ど無關係なるものであることに注意しなければならぬ。

五、黃表紙

(一) 黃表紙の沿革

安永天明の頃に榮えた黃表紙を說くに當つて、少しく溯つてその沿革をながめて見よう。

元來繪を主として女子供の玩具にする繪草紙を「草雙紙」と稱した。馬琴は「いはでもの記」及び「作者部類」に於てこの「くさ雙紙」なる名稱の由來を說明して、これ等は製本が粗末であつて、表紙をすきかへし(還魂紙)の紙を二切にし、灰墨で印刷したゝめに惡臭があつたので臭雙紙といふ名で呼んだのであるが。後製本もよくなり臭といふ字を改めて草の字に變へたのである、といふけれども首肯し難い。又「言海」では草假名でかいた雙紙の意といひ、「嬉遊笑覽」では雙紙と草子と聲が同じいから、分つために草子の方をさうしといふのである。徑山金山同音であるから分けてこみちきん山かねきん山と呼ぶのと同例であると言つてゐる。しかしすべて「草」といふ語は正式のものより劣つたものを稱する時に用ひられるもので「草芝居」「草角力」「草物」などいふ語も、その意味で使はれてゐるのであるから、從つて「草雙紙」なる名稱も平安朝以來の物語類に對して名付けた名稱であらうと思はれる。

草雙紙には時代によつて赤本、黑本、青本、黃表紙、合卷の區別がある。

もと小形の繪雙紙は行成表紙といふ紗綾形や龜甲模樣の表紙を用ひたのであるが、享保の頃からこれが丹表紙に變つたので俗に之を赤本と言つたのである。次いで表紙が黑くなつたので黑本と言つたのであるが、なほ世間一般の名でこれをも赤本と稱してゐた。次いで寶曆の頃に薄萌黃の表紙となつて之を青本と稱した。明和の頃になつて更に之が黃表紙に變つた。この薄萌黃の時も、黃表紙の時も江戸時代では青本といひ、今日では黃表紙といつてゐるのである。薄萌黃色の表紙は變色して、今日では黃表紙と區別が無いから、實際に相應してゐるといふ意味で黃表紙の名稱が行はれてゐるのであらうと思ふ。江戸時代には總稱して青本といふが普通であつた。

黃表紙は一册を紙五枚と極め、二册ものゝ時には價十二文、三册ものゝ時は價十八文で賣つたのである。しかるに文化三年に三馬の書いた。

雷太郎强惡物語

が出たときに五册分を一册に合せて、即ち二十五枚のものを一册としてこれを上下二册にして出した。これが即ち合卷物の出來た始めである。この以後の草雙紙は殆どこの合卷物となつてしまつたといふことである。後には中が分れたけれども五册分を袋に入れ一袋にして出した。これ等は主として外形上の變遷である。併しこれはやがて自然に內容の變化にも伴つたのである。之を要するに草雙紙はその外形に於てのみならず、內容に於ても三段の變化を經たのである。即ち赤本時代、青本時代、合卷時代の三期がこれである。以下各期に就いての概觀を述べよう。

(二) 赤本時代

貞享元祿の頃から安永四年「金々先生榮華夢」が出て草雙紙が大人の讀むべきものとなるまでを赤本時代と稱するのである。赤本はそのはじめは淨瑠璃本、御伽噺の類を內容としてゐたのである。金平本の如きものも、之を見て語るためのものではなくて、畵を多く入れて婦女幼童の慰にしたものである。又御伽噺の類は、桃太郎、舌切雀、鼠の嫁入等についてみても、畵が主であつて、詞書は極めて少いのである。しかるに元文寛保の頃から淨瑠璃本や御伽噺の類は漸次減少して、軍記もの、一代記、敵討物等が多くなつて來た。たとへば次の如きものはそれである。

吳越軍談
漢楚軍談
新田一代記
義經一代記
八幡太郎一代記
靜一代記

而してこれ等の書物を出版した本屋は、江戸の山本九左衞門、鱗形屋三左衞門、鶴屋喜右衞門等である。この中で山本と鶴屋とは京都の方の出店である。又版にせる繪本類に繪をかいた人は江戸には菱川師宣がある。次いで鳥居清信がある。この二人は相並んで元祿の大家である。享保の頃では奧村政信が江戸に居つて、京都の西川祐信と相對して有名である、享保の頃赤本類に筆を執つて署名したのは近藤清春である。この人は畵ばかりでなく、詞書も自作したといふことである。清春以後安永七八年頃まで主として筆を執つたのは鳥居清滿、鳥居清經、富川房信（吟雪）である。作者の方で署名したはじめは觀水堂丈阿といふ人である。寶曆十年版の草雙紙が作者署名の始めであると言はれてゐる。この時代のものは內容が甚だ貧弱であつて、且つ出版の日附などもなく全く子供の玩具である。「何と子供衆合點か〳〵」と終りに書いたのも、この丈阿が始めであるとは「臆說年代記」のいふところである。

(三) 青本時代

青本時代は安永四年「金々先生榮華夢」から、文化三年「雷太郎强惡物語」に合卷物が始まつたまでの三十三年に亘つてゐる。この時代は大體之を二期に分けることが出來るので、安永天明がその前期であるし、寛政享和がその後期である。而して安永天明の青本の特色は無邪氣なる滑稽にある。言葉の洒落はすでに「金々先生榮華夢」以前より行はれてゐたのであるが、春町以後盛となつたのである。しかし安永の頃はなほ滑稽の中にも素樸にして幼稚なるところがある。挿繪に於ても未だ幼稚であつて青本の全盛期といふ事は出來ないのである。この時代の主なる作者は

戀川春町
朋誠堂喜三二
市場通笑

である。就中春町は畵と作とを兼ねてゐる。けれども春町作といふよりは春町畵と書いた方が多いのである。

天明時代は青本の全盛時代であつて、滑稽の最も盛なる時である。天明元年に四方山人が草雙紙の評判記である「菊壽草」と題する書をかき、その翌年に又「岡目八目」を書き、役者評判記に擬して新版の青本に優劣の等級を加へた。これによつて流行の盛であつたことがうかゞへるのである。同書天明元年の條には次の如く記されてゐる。

稗史の作者益々竝び出で滑稽を競ふ。……年代記に、草雙紙いよ〳〵しやれる事を第一とす。當世風體この時より初まるといふ。又此の年四方山人草雙紙評判記を著し、菊壽草といふ。草雙紙は大人の見るものとなりたりといひしは此時なり。

天明時代の主なる青本作者は、芝全交、市場通笑、南陀伽紫蘭、森羅萬象、岸田杜芳、唐來三和、山東京傳等である。之に挿繪をかいた人は安永から天明へかけて鳥清長、北尾重政、及び重政の門人である政美（まさよし）、政演（のぶ）（京傳のこと）等である。

今これ等青本の特質を考へてみよう。青本は赤本時代の影響をうけて御伽噺、昔物語、淨瑠璃や芝居の筋書といふ樣なものが可なり多かつた。昔話童話には次の如きものがある。

風流桃太郎手柄話	安永五年
日照雨狐の嫁入	安永八年
桃太郎一代記	天明元年
增補猿蟹合戰	寛政十年
增補大江山物語	寛政十年
昔物語には	
源家再興小鳥丸	安永四年
外濱善知鳥物語	同
靜舞末廣源氏	同　六年
三德兼備源家長久	同

等をはじめとして、頼光、四天王、頼朝、義經、正成、義貞の事に關するものが多い。

戯曲脚本を分り易く書いたものは次の如きものである。

萬代矢口渡	安永四年
八百屋お七戀櫻操芝居	安永六年
糸櫻本朝育	同
假名手本忠臣藏	寛政元年
忠臣金短尺	同

併し、以上の如き特色よりも更に著しいのは滑稽諧謔である。當時の作者は眞面目な人はすくなくて、多くは輕佻浮薄なる市井の遊蕩才子の徒であつて、何等の理想も抱負も見識もなく、たゞ滔々たる社會の潮流と浮沈するにすぎなかつたのである。而してこれ等輕薄才子の最も尚ぶところは「通」（つう）であつて、自ら通人を以て任じ、通言を解し、洒落をいふことを得意としてゐたのである。安永天明の青本には通人とか通とかいふことを材料にし、又書物の

標題にしたものが少くない。例へば次の如きものはこれである。

曲輪雀大通先生　安永八年
大通人穴探　同
大通其佛　同
扨化狐通人　同　九年
大通人好記　同
當世大通佛開帳　天明元年
有難通一字　同
極通人由來　同
四天王大通仕立　同　二年
七福人大通傳　天明二年
化物通人の寢言　同
茶羅の毛通人　同　三年
讀と歌通の一字　同
通人寶盡　同
髪手本通人藏　同　四年

全盛大通記　同
三國一大通本地　同

數へれば際限がない。又當時の通言として專ら行はれた語には「とんだ」といふのがある。普通はづれをいふ語である。この語を作の標題につけたものには次の如きがある。

金平巽國めぐり　安永八年
頓作時雨月　同　九年
樂和とんだ數奇砂　天明元年
昔話虛言桃太道　同　二年
飛田高慢噺　同　三年

又「とんだ茶釜」といふ語が行はれた。意味は意外なといふことである。「辰巳園」に「とんだ茶釜の辨」といふ文があつて次の如く說いてある。

之は谷中の笠森にありしおせんが美しきを見て、顏と顏見合せてよき女なりともほめられず、茶釜になぞらへて、とんだ茶釜といひ出したるとなり。

又喜多村節信が武江年表書き入、明和七年の條には次の如くかいてある。

此の頃とんだ茶釜といふ諺はやる、或云明和七年二月、上野山下の茶屋女林屋お筆、もとは吉原四つ目や大隅といひし妓なる由、人みな見にゆく。名づけて茶釜女といふ。錦繪に出る。又云笠森お仙他に走

りて跡に老父出居るを戯にいへるとかや。二説何れか是なる、思ふに延享二年の春、「時つ風」といふ發句集、江戸名物を集めたるなり、其の中に、「爐開きや二階にとんだ茶釜かな」といふ句見えたれば前説は承け難し。

その他行はれた通言には以下の如きものがある。

「いきちよん」男女ともにいきな樣子をいふ。「威氣千代牟物語」(安永九年)といふのがある。

「萬八」でたらめの意。「千三つ」より變つたものである。

「ちよちよら」辯口にて人をあやなすことをいふ語である。

「日本」何でもほめて第一といふ程の意味に用ひる。

「大木の切口、ふといの根」「ひようたくれ」「とんちき」「どら燒さつま芋」「鯛の味噌ず」(大飯憎都)「よものあか」

「一ぱい飲みかけ山のかん鴉」「故下師の小刀のみこみ印」「ならずの森の尾長鳥」「天上みたか」此等の中で今日もなほ殘つてゐるものには「きいてあきれる」「虫がよい」等がある。又名詞の語尾を動詞にはたらかせることも多い。「茶づる」(茶漬をくふこと)「める」(めりやす歌をうたふこと)「いたこる」(潮來節をうたふこと)などはその例である。これ等の語は當時の通人の絶えず使用したものであつて、なほ青本の作者によつて新に種々の口合、洒落が製造され應用されたのである。從つて書物の標題までも諺や古語のもぢり等が多いのである。次の例を見ればよく分る。

楠無題記　安永七年
餅は餅屋　天明元年
擲打鼻上野　天明二年
牡丹餅有棚　天明三年
縄原細見二度の賭　天明四年
天地人三階圖繪　同　五年
我家樂之鎌倉山(「我家樂の釜だらひ」といふ諺あり)　天明五年
然るべし苦は藥の種　同　六年
一富士二鷹辱茄子　同　八年
武茶修行押强者　寛政元年
人間萬事西行猫　寛政二年
馬鹿長命子氣物語　同　三年
地獄沙汰金次第　寛政六年
全交法師常々草　寛政六年
垣覗本草盲目　同　八年
夜眼遠眼笠の内　寛政九年

目明千人盲仙術　　同十一年

これ等のことは青本に限らず洒落本も同様である。

以上の如き青本の内容は昔話を無理に取合せて滑稽化し、或は古傳説にこじつけて眞面目なるものを變じて滑稽となし、又は事實を誇張して極端に想像をめぐらし、或は當時盛であつた神佛の開帳、又はその時に出た見せ物等の中で、評判の高かつたものを材料として趣向を構へたものが多かつた。就中注意すべきは時事を諷刺したものである。併し諷刺とはいふものゝ作者に於て特別に時勢に反抗する程の考もなく、たゞ穴探をなして自ら喜び、人に誇るに過ぎなかつたのである。いまその諷刺的なるものゝ例をあげてみれば左の如くである。

三副對紫曾我　　安永七年　　春町作

これは富元節の流行したるこゝ赤坂邊の大名の豪奢に耽つたことを、曾我兄弟に假託して書いたものである。卷中赤澤(赤坂)門の先生とあるのは卽ちこの大名のことである。六樹園の「豐前豐後兩國の名取」も同じ事實をもとにしたものである。

通增安宅關　　天明元年　　清長自畫自作

これは田沼の賄賂政治を諷刺したものである。

間合嘘言曾我　　天明五年　　歸橋作

曾我兄弟が工藤に對面する時、間にあはせの嘘言をいふに假託して當時の時勢を諷したものである。

文武二道萬石通　　天明八年　　喜三二作

田沼の惡政を樂翁公が改革し、文武を奬勵し、士をとりしまれることを書いたものである。萬石通は農具の名稱であつて、なまくら武士と眞の武士とふるひ分ける意である。續朝が重忠にいひつけて大小名の心掛を取調させんために富士の人穴を通さしめて文武二道にふるひ分けるのである。之を最後として喜三二は戯作の筆をとめたのであるが、それはこの作に就いてその筋から諭旨されたためだと言はれてゐる。

鸚鵡返文武二道　　寛政元年　　春町作

これは「文武二道萬石通」にならつた作である。而して作としては原作よりも面白いものである。延喜の帝が上下萬民の奢をいましめんために美衣を脱ぎ粗衣をつけたまひ、道眞に政をまかせられる。道眞は大いに文武を奬勵したのである。このために騷ぎが起り、又學問も盛になつたことを記したものである。警句に富む。

孔子縞于時藍染　　寛政元年　　京傳作

樂翁公のために天下がよく治つてよい世の中になつたことを、極端な想像を加へて滑稽化したものである。定信を道眞に比して天下泰平となれる間の消息を滑稽にかいたものである。

天下一面鏡梅鉢　　寛政元年　　三和作

黑白水鏡　　寛政元年　　石部琴好作

太平權現鎭座始　　同　年　　伐木丁々作

その他寛政の治を諷刺したものは多い、かく時事はこれを作中にとり入れて活きた興味となり得るのであるが、政府の出版界に對する取締が嚴重になつたゝめに、諷刺の作も漸く影をひそめるに至つたのである。寛政三年京傳は青本

のために罪せられ、又喜三二も說諭をうけ、寛政元年春町も樂翁公から呼び出されたけれども病氣と稱して出頭せず急に死んで了つたといふ始末で、青本は末尾甚だ振はなくなつたのである。

青本の興味は半ばは畵に在るのである。無理なこじつけを苦心して畵に表して、一見捧腹にたへざらしめるのである。畵と詞と相俟ちて始めて妙味がある。畵の無い青本は氣のぬけた麥酒のやうなものである。從つて春町、京傳、一九の如く畵と作とを兼ねた人は最も都合がよいのである。繪心の無い作者は最も不利益な位置に立つ譯である。つまり青本は繪入小說といふよりも字入繪本といふべきものである。從つて清長、俊滿(南陀伽紫巵といふ人である)北齋、歌麿といふ樣な繪かきであつて青本の作に筆を執つた人も多いのである。

さて寛政以後に至ると青本の風は又一變したのである。即ち滑稽より變じて敎訓となつたのである。若しこの變遷を劃する作がありとすればそれは

心學早染草　　寛政二年　京傳作

であらう。「青本年表」に早染草に善玉惡玉といふことを初めて書き出せし京傳が妙作、殊に敎訓の意深く、大に行はれて二編三編に至る。後世に善玉惡玉といふ言葉は此時に始まるか。」と云つてゐる。つまり從來行はれた言葉の洒落が談理の風となり、罪のない無邪氣な滑稽は理窟に陷るに至つたのである。この原因は以前の滑稽的傾向が漸く世人に倦かれて來たのと、樂翁公が世の風俗を振肅して、勤儉尙武の方針をとるに至つたためである。從つて遊戯文學が敎訓的となり、天明の狂歌も眞顏に至つて俳諧歌と稱して、理窟くさいものとなり、川柳までも一時は眞面目なものと變つたのである。

かくて寛政以後の青本は、滑稽が敎訓となつたばかりでなく、更に別に一種の逆轉を行ひ、敵討物、怪談物の復興となつたのである。「青本年表」寛政四年の條には次の如く載つてゐる。

この頃化物語の本行はる。之より四五年間怪談多し。又一代記軍書の類行はれて、今年の出板草書怪談多くして戯作少し。案ずるに、此頃より世間の風俗街談などを綴ることを憚りし故、是等の作に移りたるなるべし。

かういふ風で長編の述作が必要となつて、青本は合卷物となり、これと共に一方には讀み本が流行するに至つたのである。文化三年には三馬が青本を變じて合卷物を始めたのである。

(四)　青本の作者

次いで青本の作者の主なるものに就いて解說して置かう。青本の作者に就いての參考書は「戯作者撰集」「物之本江戸作者部類」「戯作者小傳」「戯作六家撰」「小說史稿」「戯曲小說通志」及びこれ等に基いて述べてある「近代小說史」等である。

戀川春町

春町は寛政元年四十六歲で歿した人である。この人は駿河の小島侯の臣であつて、本名は倉橋壽平と言つた。狂歌では酒上不埒、又は壽山人と稱した。江戸小石川の春日町に住んでゐたので春町と稱したのである。(元祿頃の作者

は多く俳人であつたが、安永天明以後の作者は多く狂歌師であつたのは面白い推移である。）多くは自畫作であつて、繪は鳥山石燕に學んだといふ。作は安永四年から寛政までつゞき、殁後寛政十年に遺稿と稱するものが出版せられた。彼の代表作は次の通りである。

金々先生榮華夢	安永四年	
高慢齋行脚日記	同　五年	
楠無益委記	同　八年	
鸚鵡返文武二道	寛政元年	

「金々先生榮華夢」は劃期的の作であつて、子供の讀本であつたのを大人のよむものとしたものである。これは盧生の邯鄲一炊の夢より考へつき、金倉屋金兵衛なる田舍出の青年が江戸で目黒の不動に參詣し、門前で名物の粟餅の出來る間まどろみ、その間に富豪（神田八目堀の和泉屋）の養子に望まれ、金にあるにまかせて遊び廻り、後に零落して、剛染の女は手代にとられ、果は養家より放逐されて夢がさめるといふ趣向である。その通人めかして遊び場のさまをうつしたところは大いに人氣に投じたものと見えて、成金のことを「金々先生」といふに至つた。

「高慢齋行脚日記」は萬屋高慢齋といふ俳諧師があつて、その門人の方外なる者が相弟子をそゝのかして惡所遊を敎へ、青砥藤綱に呼び出されて鎌倉追放に逢つた、そこへ高慢齋が行脚から歸つて來て、四書五經を煎じて飲ましめ之を敎訓したことをかいたものである。

「楠無益委記」は「楠未來記」のしやれである。未來の滑稽なる想像をかいたものである。

「鸚鵡返文武二道」は、喜三二作の「文武二道萬石通」を模して、白川樂翁公の政治を諷したものである。

この外に春町は酒落本も二三かいてゐる。

朋誠堂喜三二

文化十年、七十九歳で歿した人である。本名は平澤平格といつて、秋田の藩士である。龜山人は狂名である。狂歌での名は淺黄裏成（衣服に淺黄の裏地をつけるのは、田舍武士の風俗で野暮とされたものである。田舍者の意）後には手柄岡持といふ名を用ひた。この人は狂詩にも長じ韓長齡又は天壽と稱した。青本の作は安永四年から天明八年までである。その作は次の如くである。

鼻峰高慢男	安永六年	
親敵討腹皷	同　年	
鐘入七人化粧	同　七年	
長生見度記	天明三年	
文武二道萬石通	同　八年	

「鼻峰高慢男」は「高慢齋行脚日記」より出た作である。鎌倉の長者上野屋萬右衛門に萬石といふ一人子があつた。美男であつたけれども鼻が低い。主人は之を治さうといふので出入のものに金をやつてほめさせたところ、だん〳〵鼻が

高くなつて來た。而して天狗の所へ連れてゆかれて試驗され、又低くなつて歸るといふ話である。

「親敵討腹皷」は動物を擬人にしたおとけ話である。「かち〳〵山」の後日譚である。

「鐘入七人化粧」は道成寺をもぢつたものであつて、長唄を七つ組合せて、でたらめの滑稽を盡したものである。

「長生見度記」は「楠無益委記」のやうに未來記のもぢりであつて、將來の突飛なる豫言である。

「文武二道萬石通」に就いては既に述べた通りである。

この人には「古朽木」といふ讀本形の滑稽な作があり、時代の風俗見聞を記した隨筆には「後昔物語」といふのがある、當時の芝居や遊里のことが書いてある。又狂歌狂文を集めたものには「我而白」といふのがある。

市場通笑

文化九年七十四歳で歿した人である。通稱は小平二といひ、經師屋で終身獨身で暮した人である。俳號橘雫、江戸の人で日本橋通油町に住んでゐた。「市中の仙人」と人が呼んだといふ。この人は青本專門の作者であつて、安永八年以來天明にわたつてその著作も多いけれども、特に注意すべきものがない。この人の作には教訓の意を寓することが多かつたので世に「教訓の通笑」と稱した位である。

芝全交

寛政五年に歿したことは分つてゐるが、その年齢は不詳である。西久保神谷町に住んだ大藏流の狂言師であつて、山下藤十郎といふ人である。この人の作には次の如きものがある。

大悲千錄本　天明五年
芝全交智惠の程　同　七年
鼻下長物語　寛政四年
全交法師常々草　同　六年

中でも傑作は「大悲千錄本」である。無邪氣な滑稽に富んだ作である。寓意はない。全交は喜三二と共に青本作者としてすぐれた人であつて、滑稽洒落はそのもつとも得意とするところである。

萬象亭

文化五年五十五歳で歿した人である、本名は森島中良、兄は甫周といふ有名な蘭醫でもある。中良も蘭學に通じてゐた。狂歌も作つてその名を竹杖爲輕と言つた。平賀源内に師事して、森羅萬象、天竺老人、二世風來山人等と稱した。青本は天明二年から寛政七年にわたつて十數部ある。その中でも特に有名なのは

從夫以來記　天明四年

である。これは未來の豫言の空想である。

萬象亭戯作濫觴　天明四年

これは自傳に擬した作である。彼の作は源内の風をうけて滑稽を主とし、他の青本作者のやうに通人めいた洒落や、

又教訓の口調等は弄しないで、たゞ可笑味を專らとしたものである。

嘘無誠一卷　天明四年

大笑止老毛鐘入　天明六年

面向不背御年玉　同　年

これ等はみなその作風をうかゞふべきものである。

彼は又洒落本の作もある。それも一般の洒落本とはその趣を異にし、猥褻をさけて滑稽を主としたものである。

田舍芝居

の如き作は、當時流行の遊廓には何の關係もない田舍芝居の可笑味を寫したもので、一種の新體を開いた。

萬象亭の門人に七珍萬寶といふものがあつた。芝の增上寺門前の菓子屋福島屋仁左衛門といふ人であつて、二代目森羅亭と稱した。青本の作も少くはないが、餘り行はれなかつたものと見えて、後には狂歌師になつて北川眞顏の門に入つた。

唐來三和（都來(十)三などといふ拳の懸聲からつけた名）

文化十年に六十七歳で歿した人である。もとは武士であつたが浪人をして書肆蔦重の弟分となり、本町松井町の遊女屋に入婿となり、通稱を泉屋源藏と言つた。狂歌は蜀山人に就いてまなび又戯作を好んだ。青本も洒落本もその作は多くはないけれども孰れも佳作である。「作者部類」で馬琴は次の樣に批評してゐる。

言行共に老實の好人なるに、さる渡世をするは宿世怪むべしといふ人多かり。能文にはなけども趣向は上手にて、折々あたり作もありき。

有名なる作は次の二作である。

莫切自根金生木　天明五年（外題が廻文であることも名高い）

天下一面鏡梅鉢　寛政元年

前者は金の多くなつて困る話、後者は例の樂翁公の政治を諷した作である。

山東京傳

文化十三年五十六歳で歿した人である。京傳の傳記には馬琴の書いた「伊波傳毛記」がある。岩瀨傳藏といふ彼の通稱をもちつたものである。これを反駁したものは京傳の弟の京山のかいた「蜘蛛の糸卷」である。その他彼の傳記は馬琴の「江戸作者部類」「戯作六家仙」「京傳一代記」等に詳しい。

彼は江戸京橋の銀座二丁目に住んでゐたので京傳（通稱が前述の通り岩瀨傳藏であるから）といひ、家は愛宕山の東にあつたので山東菴とも稱した。晩年には醒齋又は醒々老人とも云つた。身輕の折助は狂名で、北尾政演は畫名である。

彼の著作は多方面に渡り、青本作者として、浮世繪師として評判がある。又洒落本の作者としては殆ど他に匹敵する人を見ない位である。讀本の作者としては馬琴と並び立ち、近代風俗の研究家としても注目すべき價値ある人であ

る。

今彼の生涯を通觀して著作の年表をかゝげてみる。

寶暦十一年　（京傳生る）

安永　七年（十八歳）開帳利益札遊合（著者の名は見えない）

同　九年（二十歳）娘敵討故郷の錦（此には始めて作と記してある）

天明　二年（二十二歳）御存商買物（京傳の名始めて見ゆ）

同　五年（二十五歳）江戸生艶氣樺燒

同　六年（二十六歳）客衆肝膽鏡（これが洒落本の初めであらう）

同　七年（二十七歳）通言總籬

寛政　元年（二十九歳）孔子一代記

同　二年（三十歳）心學早染草

同　（同　）玉勝青砥錢

同　三年（三十一歳）（手鎖一件のあつたのはこの年である。）

同　五年（三十三歳）（銀座に煙草入煙管の店を開いたのはこの年である、後には讀書丸も賣つた。）

同　十年（三十八歳）忠臣水滸傳（讀本の初めである。）

文化　元年（四十四歳）近世奇跡考（考證的隨筆の初めである。）

同　年（同　）優曇華物語

同　二年（四十五歳）櫻姫全傳曙草紙

同　三年（四十六歳）昔語稻妻表紙

同　四年（四十七歳）善知鳥安方忠義傳

同　五年（四十八歳）本朝醉菩提（稻妻表紙の續篇である）

同　十年（五十三歳）雙蝶記（讀本に於ける絶筆）

同　年（同　）骨董集前編（隨筆である）

同十三年（五十六歳）（歿す。）

以上で以て彼の筆をとつた方面の如何に廣いかといふことが分るであらう。しかしその間にも年代によつて、作品の種類の異なつてゐることを見るのである、二十歳から三十歳まで、三十歳から四十歳まで、四十歳から五十歳までと大體その作の傾向を異にしてゐる樣に思はれるのである。

二十歳から三十歳までは彼の特色を現した最も得意の時期であつた。一方には畫家として、一方には青本の作家として盛名を馳せた時代である。二十二歳の時始めて京傳といふ名で

御存商賣物

といふ青本を書いて名聲をあげた。これは書物の合戰話であつて、今日よりすれば大したものではない。次いで二十五歳の時に

といふ青本を書いた。これは仇氣屋の艶次郎といふ自惚の強い主人公が、浮名を立てようとして北利屋喜之助、輪留井思庵などと遊蕩にふけつたが一向にもてないので、金錢づくで自分のところへ女をかけこますといふ樣なことを始めとして、いろ〳〵愚劣なことをするを趣向としてゐる。この作は非常な評判を得て、主人公の「艶次郎」といふ名は自惚男の代名詞となつた。又彼は艶次郎の鼻を妙な恰好の獅子鼻に描いたゝめに、世に之を京傳鼻と稱して頗る有名となつた。

ついで二十六歳頃から洒落本をかいて益々有名となつた。「客衆肝膽鏡」はその初作であらうといはれてゐる。三十歳の時にかいた「心學早染草」は、京傳の名聲を高くしたものである。人間には善玉と惡玉といふものがあつて、これの作用で善心惡心が動くのである。理太郎といふ金持の息子にこの善玉惡玉が入りこんで、種々の行を爲さしめ、遂に善玉が勝を制して理太郎本心にかへるといふ趣向である。これは宣長の神道說を京傳が應用したものである。寛政三年彼の三十一歳の時、松平越中守が風紀振肅に力を致して居つた際であつたが、書肆蔦屋重三郎の勸めに應じて法律を犯し

青樓の世界　錦の裏
大磯風俗　仕懸文庫
手段詰物　娼妓絹籠

を著した。これらの上袋には敎訓讀本と小書して賣出して、書肆も利益を得たのであるが、法を犯したために、京傳は五十日の手鎖、蔦屋重三郎は此等洒落本の絶板に加ふるに、重き過料に處せられた。その際の調書の一節に次の如く出てゐる。

同(寛政二年)七月中、右三部とも前に取引仕候、草雙紙問屋通油町重三郎方へ賣遣候、對談にて相渡、作科筆工とも紙一枚に付銀一匁づゝの割合にて、三部分百四十六匁、金に直し、金二兩三分銀十一匁の內其の節爲ニ內金一金一兩銀五匁請取候所云々

彼はこの事件のために大いに悲觀し、爾來全く洒落本を作らず、又青本も在來のやうに遊廓のことを材料とするのをやめて、專ら赤本風の敎訓物語、又は昔噺を綴ることになつて、彼の作風は全く一變した。これよりは彼の著作は漸く振はなくなり、專ら經濟上貨殖に心を致す樣になつた。即ち三十二歳の時「萬八」(江戸淺草平右衞門町柳橋の北角にあつた料理屋、書畫會又は歌舞、挿花の演習會などが盛に行はれたところ)に書畫會を催して利益を得、この收入で翌年銀座に煙草入及び煙管袋物などの店を出し、又一方には讀書丸といふ藥を賣出した。かくて四十歳すぎまでは作品としてあまり名作は出なかつたのである。たゞその間に彼の讀本のはじめともいふべき「忠臣水滸傳」が出てやゝ好評を博した位であつた。

四十歳以後になりて再び文學の時代に入り、馬琴と交り互に相影響し、相競爭して多數の讀本を出したのである。

四十四歳の時

優曇華物語

を著した。翌年には

を著し大いに行はれた。又その翌年には

昔語稻妻表紙

を出し、讀本の名聲はその極點に達した、(「稻妻表紙」の出た年は馬琴の「弓張月」初篇を出した年である)。そのほか

善知鳥安方忠義傳

本朝醉菩提

雙蝶記

「本朝醉菩提」は支那の「醉菩提」を日本の一休になぞらへたものであり、「雙蝶記」は讀本の絶筆である。なほ當時は考證の流行した世であつたから、學者の隨筆が盛に出た。この風は小說家にも及んで、馬琴にも「燕石襍志」がある。京傳もこれ等に刺戟されて、經營慘澹十年もかゝつて文化十年

骨董集　前編

を出した。これは德川時代の風俗の考證である。これを出して間もなく彼は歿したので、彼は「骨董集」と討死したと言はれた。

京傳は青年時代は大の放蕩で遊里の事情に精通し、當時通人の牛耳の執つてゐた藏前の札差の文魚に愛せられて、そのとりまきとなつて盛に遊んだのである。彼は三十歲の時に菊園といふ女、(京傳三十三歲の時死す)四十歲の時玉の井といふ女を娶つた。これは二人とも遊女である。彼は放蕩であつたけれども儉約家であつて、遊びに行つて居ても人と金錢の貸借はなさず、着物も人より貰つたものゝ外は自ら錢を出して調へなかつたといふ。吉原の遊女玉の井の所へ通つて家に居ることは一ヶ月中僅かに四五日にすぎないやうな事があつたけれども、一日には一分以上の金錢は使はなかつたのである。玉の井といふ女も京傳の氣風をのみこんで女郎ではあるが、上草履の鼻緒まで自ら立てゝ穿いたといふことである。「伊波傳毛乃記」には次の如く出てゐる。

……頻りに賣色を好んで、吉原に通ひつゝ、家に在ること一ヶ月に五六日に過ぎざりき。然れども父母これを許して制せず、人以て一奇事とせり。……

一日其の母物を搜り索むるとて、京傳の皮籠を開く事ありしに、其の中に吉原中の町なる茶屋より送りし揚代の書出しといふもの數十通あり、驚いておもへらく、吾兒遊興に費すもの此の如くなれども、其の身の衣裳調度はさらなり、親の物とては、紙一枚私に遣ひ失ひし事なし、渠が才覺量るべからずと歎賞して、いよ〳〵遊里に赴く事を禁ぜざりき。……

時に天明年間、世上華奢遊興を事として、能く其の事に通達せし嫖客を大通といへり、當時有福にして放蕩なるもの、十八人ありける、それを十八大通とぞ唱へたり。淺草御藏前なる札差、表德を文魚といひしものは、彼の十八大通の一人なりき、京傳この文魚を友とし善し、よりて其の徒らの資を得て、凡そ遊興に費す所の錢財は、父母を煩さずして、自己の働きに成せり、自分の財を費さずして、數年遊里に樂しみを極めたる、亦一奇と謂ふべし。

彼は自分の煙草入の店には品物に意匠を凝らし、種々の廣告を散らして月々八九十兩の收入があつたといふ。「京傳

流」といふ語は割前の酒といふ意であるのでも彼の性格は知れる。かく遊び好きであつたけれども、全く夢中にならざる所が、即ち花柳社會を觀察し諷刺し、青本洒落本の佳作を得た所以である。元來彼は才子である。彼はその才を彼の性格に配して多くの文學的作品を得たのである。

六、洒落本

洒落本は又蒟蒻本ともいつて、安永天明の際盛に行はれたものである。その體裁は吉原細見の形にならつて、半紙を二つ切りにして、之を半分に折つて二三十枚をとぢ合せて、土器色の唐本表紙をつけ、多くは一冊ものにして卷頭に口繪を一枚つけたものである。「その內容は遊廓の內幕であつて、作者はこれによつて自分の通を誇り、讀者はこれによつて遊里のかけひきを學んだものである」。所謂「誨淫の書」であつて、猥雜卑穢を極めたものである。洒落本といふのはこの性質から名付けた名稱で、蒟蒻本といふのは形からつけた名稱で半紙半截の恰好が蒟蒻の大きさ程であつたからである。「近世物之本江戸作者部類」に

明和の季の頃より寬政の始めまで、柳巷花街に耽りぬる嫖客のおもむきを、半紙二つ裁りなる小冊に綴りて、よくその情狀を述べたる誨淫艶史を、世俗洒落本と喚び做したり、其れが中に大半紙半枚をもてしたるもありけり。

と出てゐる。「これは小說としては唯一種の寫生文であつて、何等の趣向も無い。文學的の價値は少いものであるけれども、當時の風俗言語をそのまゝに寫し出してゐる點に於てはこれに勝つたものは無い。この點に於て洒落本は元祿時代の西鶴本と相對すべきものであるが、西鶴本の人物言語の描寫には、文章語を加味し、服裝等の好みにも作者の理想が混じてゐるのに反し、洒落本は徹頭徹尾寫生風である。遊女遊廓を題目とした文學の最も盛であつたのは、西鶴本を中心とした元祿時代と、洒落本を中心とした安永天明時代とである。この點よりしても西鶴本と洒落本とは、時代思潮の背景を根本として、面白い對比をなしてゐるのである。洒落本の寫す所は、或は大磯や假粧坂に托した事もあるけれども、その實は江戸の吉原・深川でなければ、新宿・品川の世界である。吉原を北里といひ、深川を巽と稱してその特色を發揮したものである。」

洒落本は從來明和年間に出來た「遊子放言」が元祖であるといふ說が專ら行はれたのであるが、その後の研究によるとこれは誤りで、早くも寶曆七年に

異素六帖
聖遊廓

なるものが出てゐる。その形式からいふと享保の「兩巴危言」「史林殘花」等もその先驅といふべきであるが、この兩書は漢文の花街志にすぎない。後の蒟蒻本の正當なる始めはまづ上述の「異素六帖」「聖遊廓」と見なければならない。

「異素六帖」は支那の「義楚六帖」をもぢつたもので上下二冊、寶曆七年正月板である。作者は書家の澤田東江である。上卷は儒者と僧と歌人と三人が出逢つて吉原のことを話し合ひ、歌人は百人一首、儒者は唐詩選の句をひいて共に遊里のことに譬へて戯れ興ずることを書いたものである。下卷は繪畫を主として詩の句と百人一首の下句とをつらねて題したものである。一例を左にかゝげる。

太夫の揚屋入り

素陌紅塵
拂レ面來
無二人不一レ道二
看レ花回一

少女のすがた
しばし
とゞめむ

紫陌紅塵共に唐の太夫の名なり。しはくは、むらさきのみちとよむ。我が朝には花紫、小紫といふて、太夫の通名とする事あり。紅塵とは紅葉の散り敷きたる景色、是れも太夫の名とす。我が朝には紅葉のえんにて、高尾と名附けて貴ぶ。この故に素見の人は、花を見てかへる心地せりとなり。

「聖遊廓」は一名を「雪月花」といひ大阪板、寶暦七年六月板、一冊である。これは孔子と老子と釋迦との三聖人が詩人李白の營業してゐる茶屋へあそびに行き、李白の女房おたき太鼓持の白樂天を相手にして酒落たあそびをなし、果は釋迦大士が急に無常を感じ、假世太夫といふ女を連れて、梵宇の書置を殘して駈落することをかいたものである。卷末には廓言葉が唐音でしるしてある。作者は不明であるが漢學書生のいたづらから始つたものゝやうである。「道行妹背の送り火」といふ淨瑠璃まで添へてあるところ凡手ではない。卷頭を例文として左に記してみよう。

綿蠶たる黄鳥丘隅に止まる、止まる處に止まらざれば、鳥だにも如かじといふ。四角な文字の廉取りて、鳥は木に住む魚は水にすむ、人は情の下にすむと、曰つき歌に唄はすは、これも和國の道ならめ。廓の歌は客の浮氣をたねとして、萬の端唄とぞなれり。長歌、短歌、船頭、馬方、たけき惡者の心を和ぐるも、ゆかりのつきの一節ぞかし。さればこそ銀猫は拋てども、江口の君のなげぶしには、腰をぬかせし例もあり。爰に聖人の通ひたまへる廓あり。揚屋の亭主は李白とかや。中にも孔子は廓にて、すゐといはれて端手ならず、えちご縮の帷子に、もんろの羽織すそ長く、深編笠にあは草履、古金買の目利にも、太夫かひとは見えたりし、李白が方へ這入りければ、亭主李白「是れは仁さまお珍らしい。サア〳〵奥へ。」ともてはやす。孔子「ナント李ス、この中は久しいの。無事で珍重珍重。」と庭敷へ行く。李白女房濕「是れはお珍らしいおかほ。お噂ばつかり申してをりました。」仲居なつ「もし仁さま、この中横堀で御見うけ申しました故、大方お寄りなさるであらうと存じましたに、よう待たせなさつたの。」

寶暦の頃は酒落本の出るものは多くなかつた。大坂板に猪之文章、月花餘情等が寶暦年間に出たが後、

遊子方言　明和七年
辰巳の園　明和七年

の二書が出るやうになつて酒落本は大いに流行するに至つたのである。

「遊子方言」は漢の楊雄の「楊子方言」よりその名をとつたものである。その序文(漢文)には「田舍老人多田爺」といふ名が記されてゐる。この田舍老人は再摺本の板元として記されてゐる「丹波屋利兵衛」の事であるといふ說(華野茗談)